

平成22年度

名城大学英語多読プログラム報告書

名城大学 大学教育開発センター 平成23年3月発行

BEATRIX POTTER
THE COMPLETE TA

CURIOS GEORGE AND THE PUPPIES



名城大学多読プログラム報告書

目 次

2011年3月発行

はじめに 楢 一也	1
2010年をふりかえって 岡林 園	2

1. 2010年度の取り組み

1-1. 多読ルーム紹介ツアー 岡林 園	3
1-2. お勧め図書紹介/ご意見箱の設置 竹田真紀子	3
1-3. 多読推進のためのコンテスト 岡林 園	4
1-4. 今年度購入した本について	
1-4-1. 多読ルーム全体として 竹田真紀子	10
1-4-2. イギリスで購入した本について 岡林 園	11
1-4-5. 多読ワークショップの開催 (METS: Meijo English Teachers Sessions) 授業内多読活動と多読教材を使用した生徒主導型プロジェクト 竹田真紀子	12
1-6. 八事・可児キャンパスの図書の貸出及びデータ管理について 竹田真紀子	15
1-7. 刈谷市総合文化センター名城大学連携講座 「First Step to 多読」 只木 徹・竹田真紀子	16
1-8. 名城大学附属高等学校国際クラスへの多読指導 只木 徹・竹田真紀子	18

2. 名城大学及び名城大学附属高等学校における多読実践報告

2-1. 英語多読を自ら実践しての一考察 吉永美香	20
2-2. 多読指導と授業内活動としてのオーラル・インターパリテーション実践 平尾節子	23
2-3. 名城大学附属高等学校の取り組み	
2-3-1. 名城大学附属高等学校英語多読プログラム実践報告 杉山剛浩	25
2-3-2. ブックトーク指導 伊藤高司	29
2-3-3. 附属高校国際クラス多読実践報告 澤田麻衣	31

3. 楽読クラブ

3-1. 楽読クラブ前期活動報告 2010年度前期部長 高橋俊平	37
3-2. 楽読クラブ後期活動報告 2010年度後期部長 平手美帆	38
3-3. 楽読クラブ活動を振り返って 小柳津敬央	40
3-4. 3年間の多読での勉強 宇野朝貴	42
3-5. 楽読クラブ部員の学習成果の検証 岡林 園	44

4. 検証【データ資料】2010年度多読教育の実践状況 竹田真紀子	48
4-1. 多読ルームの基本情報	48
4-2. 多読ルーム貸出冊数及び利用者数	49
4-3. 可児・八事キャンパス貸出冊数及び利用者数	50
4-4. 図書レベル別貸出冊数及び蔵書数	51
4-5. ジャンル別貸出冊数及び蔵書数	52
4-6. 2010年度ベストリーディング	53
5. 学会発表等	
5-1. 中部地区英語教育学会石川大会 / 大学英語教育学会(JACET)月例研究会 A Report on Extensive Reading 只木 徹・竹田真紀子	54
5-2. 多読授業研究会(豊田高専)名城大学多読実践報告	
5-2-1. First Step to 多読 成人向け多読講座報告 只木 徹	57
5-2-2. 多読授業研究会での合同発表 岡林 園	60
5-3. 研究ノート Extensive reading approach satisfies intelligence curiosity 伊藤高司	63
6. 2011年度に向けての展望 竹田真紀子	67
7. 多読ルーム訪問者一覧	68

はじめに

大学教育開発センター 楠 一也

読者の方々は、旺文社の大学受験ラジオ講座なるものをご存じだろうか。毎月テキストを購入し、朝の5時から早起きし、AMラジオ（愛知県では中部日本放送（CBC））を聞きながら、講義を受講するものである。通称、「ラ講（らこう）」と呼ばれていた。田舎に住み、都心の予備校に通うのに億劫な筆者には適当な学習ツールであった。入試が近い冬の時期は早起きが辛いものの、迫る入試を考えると、自然に目が覚めたものである。ちなみに、テキスト販売の不振やネット、予備校のサテライト講義の台頭などから、残念ながら番組は終焉している（平成8年3月に放送終了）。

ラジオ講座の中では、関西大学の林省之介教授（当時）の古典の授業が好きでたまらなかった。この授業の特徴は、とにかく「読み、読め」である。人間の書いたものであれば、時代を超えて、感情をこめて読み続ければ、思いも通じる、という指導法であった。「百篇も読めば、思いも通ずる。」などと、よく激が飛んでいたものである。関西人であるが故に、浪花節の指導法も当然というべきか。

古今東西を問わず、読む、聞く、話す（今様は（キーボードを）「打つ」が主流か？）というコミュニケーションの手法は変わらないはずである。故に、読むことに特化した英語多読学習に対して、学生が高い評価を与えたことは、ある意味、自然なことなのかもしれない（名城大学大学教育開発センター『名城大学英語多読プログラム報告書』、平成22年3月、74～77頁から。）。

さて、昨年4月に着任した筆者の多読ルームの初仕事が、入学者への図書カード作成に係り、派遣職員の超過勤務の了解を求められるというものであった。突然のことであり、何が起きたのか理解できず、慌てたことが懐かしく思い出される。それから10か月余りの間、英語学習で、多読という方法を知ったことの驚きや、所謂、ミニ図書館の運営に右往左往しながらも、多読ルームの運営が維持できたことは、ひとえに関係するスタッフの尽力によるものである。

筆者は新米管理職であり、多読ルーム関係者にとっては、門外漢の輩が来たことで困惑したこと

であろう。また、ときには「多読教育に理解が足りない」と叱責を受けるほどの失礼も申し上げた。心の中では非礼を詫びつつも、職責上、学内の状況を考慮した場合、そのような言葉を絞り出さざるを得なかつた次第である。

大学関係者の配慮と、平成19年度から3年間の私立大学経常費補助事業により、多読ルームは充実した整備ができたと自負している。創業期から関わったスタッフの苦労は、並大抵のものではなかつたはずである。しかしながら、筆者の着任と同時期に、英語以外の教育との兼ね合いを考慮し、多読学習の充実を考える時代に突入してしまつたと考える。つまり、創業から守成の時代に転換したのである。

守成の時代において、筆者が多読ルーム、英語多読学習のかじ取りで考慮すべきことは、正課・課外を通して、学生の英語学習にどのように貢献するかを考え、多読学習を礎に、更なる英語学習の施策を見出すことであろう。

なお、理想を言えば、「英語を学ぶには、まずは多読から」と、学生が主体的に多読学習に取り組むことである。各学部等の教育によって、学生の学習意欲が喚起され、学生が英語の学びに目覚めたとき、最初に多読学習を選択することを願って止まない。

2010年をふりかえって

岡林 園（嘱託英語講師）

2010年度は先ず、多読ルームとLL教室の共同企画のツアーフラッシュから始まりました。多くの先生方のご協力を頂き、学生の皆さんに多読ルームにきていただくことができました。また長尾純先生のご協力により、**英語多読プログラムのご案内**という素晴らしいパンフレットが完成し、これを学期初めに学生の皆さんにお配りすることができ、多読プログラム、および多読ルームについてよく知っていただくことが出来たと思います。

今年度は多読推進のためのコンテストを三つ計画し実施しました。先ずははじめに、昨年にひき続いての、第2回開催となる、The Second Oral Interpretation of English Literature Contest（第2回英語読み聞かせコンテスト）を7月に、The First Picturebook Contest（第1回英語絵本コンテスト）を9月に、そして、The First Book Review Contest（第1回英語書評コンテスト）を12月に実施しました。（詳しくは1-2参照）3つのコンテストには合わせて（読み聞かせコンテストの楽読クラブ部員予選を含め）62名の学生の皆さんに参加していただきました。

4月より新任の竹田真紀子先生が金沢工業大学から着任され、彼女の素晴らしい笑顔と熱心且つ闘達なご指導で、多読ルームは一段と活気にあふれたものになりました。

今年度はのべ利用者数は38,000を超え、延べ84,000冊の本をご利用いただきました。英語ご担当の先生ばかりでなく、理工学部の吉永先生、また法学部の榎本先生のように英語以外のご専門の先生方にも、研究室やゼミの方々に多読ルームをご紹介頂き、多読を奨励していただき、ご利用いただけるようになりましたことは本当にうれしい展開がありました。

また他方では、2010年3月に全学共通プログラムについての報告書が出され、そこで全学共通英語プログラムの中の多読プログラムについても報告がなされました。内容につきましては、よくご理解いただき、評価していただいたところもありましたが、また多少の誤解もあったのではないかと思われました。結果として、2011年度からは全学共通英語プログラムから外れることとなり、多読を授業に取り入れるか、また成績評価に加えるかどうかは担当の各先生方の判断に任せられることとなりました。

言語習得には多量のインプットが必要であり、多読はインプットの手段として大変に有効な手段であることは、既に多くの学者により研究発表されてきたこと

あります。2009年3月発行の**英語多読プログラム報告書**において理論的背景は十分に述べられており、ここでは控えさせていただきます。しかしいかに理論的に有効な手段であるとしても、それを学生の皆さんに実行していただくためには何らかの仕組み、仕掛けが必要であります。名城大学全学共通英語プログラムは多読を取り入れた画期的なものであり、その中で成績評価の30%を多読に当てるという、すばらしい仕組み、仕掛けがあったため、学生の皆さんに多読の有効性、醍醐味を味わうきっかけを提供することが出来たと思われます。全学共通教育に参加している6学部で行われた2009年度のアンケートのなかに多読に関する質問があり、これに対して70%以上の学生の皆さんが、“多読は楽しく、また役に立った”と答えてくれたことが、それを証明してくれていると考えます。

学内外の皆様にご支援ご助力を頂き、全学で総蔵書数25,000冊となり、天白キャンパスのみでも14,000冊を有するこの多読ルームは、全国でもあまり無い屈指のものであると自負しております。この宝の山は、学生の皆さんに読んでいただきて、皆さんの知識、英語能力に変換されてこそ、価値のあるものとなります。

ただ設備として存在するだけでは意味がありません。学生の皆さんに、ただ“こういうものがありますからご利用ください”といつても、学生の皆さんのが自主的に足を向けるというのは考えにくいのではないかでしょうか。この宝の山に気づいていただき、“これを利用したい、利用しなくては損だ！”と思っていただけるきっかけを提供してくれる仕組みが再構築されることを願ってやみません。

最後に、この1万冊から2万冊へと成長していく、すばらしい蔵書に囲まれて定年退職を迎えたことを、ご協力、ご支援をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

1. 2010年度の取り組み

1-1. 多読ルーム紹介ツアー

岡林 園（嘱託英語講師）

2010年度はまず多読ルームとLL教室の共同ツアーの企画から始まりました。多読ルームは本の紹介、多読ルームの構成と本の配架、利用方法の紹介をするため、LL教室はATR-CALL（国際電気通信基礎技術研究所の開発したComputer Assisted Language Learning）の紹介をする目的です。前年度、一度に多くの先生方が学生さんを連れて多読ルームに来てくださいましたため、多読ルームに人があふれて、貸し出しカードの登録に大変な混乱をきたしてしまったことの反省から、学生さんへの多読ルーム専用利用カードを事前に印刷をいたしました。これは山添直樹先生の全面的なご協力をいただき可能になりました。事前に多読ルーム案内ツアーのスケジュールを組み、先生方のご希望を伺って行いました。

多読ルーム、LL教室、それぞれ1クラス10分程度で2週間にわたるスケジュールを組みました。3週間目にずれ込んだクラスもありましたが、ほとんどの先生方が1～2週目にツアーにおいてくださいました。

今年度は、長尾純先生のご協力により、英語多読プログラム用パンフレットが完成し、全学共通英語の履修者に配ることが出来ました。



1-2. お勧め図書紹介/ご意見箱の設置

竹田真紀子（嘱託英語講師）

多読ルームでは、名城大学大学教育開発センターのホームページ及び多読ルーム前の掲示板にて、おすすめ図書を紹介している。毎月、イギリスやアメリカなど英語圏の国のその月にちなんだ行事、祝日、儀式、スポーツイベントなどの本や新着本を学生が本を選ぶ際のヒントになるように選んで紹介している。

○ おすすめの英語多読図書

■ 今月の新着・お勧め本 2010年6月号

さあよいよい6月に入り梅雨の季節になりました。ジメジメして嫌な季節ですが、雨は私たちの生活にとても大切な恵みをもたらしてくれますよね。

みなさん今年は名古屋で「COP10」が開催されるのを知っていますか？ COP（Conference of the Parties）とは、国際条約を結んだ国が集まる会議（開催国議）のことです。多様な生き物や生態環境を守り、その恵みを将来にわたって利用するために結ばれた生物多様性条約の10回目の開催国議が「COP10」です。国際会議が名古屋で開かれる前に、将来の私たちの環境を守るために、雨や天気が生物全体を取り巻く環境にどのように影響しているのかもう一度考えてみませんか？

■ 「The Water Cycle」 「Weather Watching」



2010年度おすすめ図書テーマ

- 4月 イースター特集
- 5月 とびだす絵本とオバマ大統領
- 6月 環境問題：COP10名古屋開催にちなんで
- 7月 映画化された本特集
- 8月 ディズニー新着本
- 9月 マンガ特集
- 10月 イギリスで買い付けをしてきた本の紹介
- 11月 新着本伝記特集
- 12月 クリスマス特集
- 1月 ウィンタースポーツ特集
- 2月 ヴァレンタイン特集



また学生が読みたい本をより反映して選書ができるように、カウンター前のテーブルに6月よりご意見箱を設置した。今までリクエストがあった本は、「マイケル・ジャクソン」「ゲド戦記」「Iron Man」などである。洋書は発注してから納品まで6ヶ月以上もかかるものがあり、リクエストをもらってもすぐに応える事ができない場合もあるが、順次対応している。

1-3. 多読推進のためのコンテスト

The Second Oral Interpretation of English Literature Contest

(第2回英語作品読み聞かせコンテスト)

岡林 園 (嘱託英語講師)

The Second Oral Interpretation of English Literature Contest
英語読み聞かせコンテスト

英語の発音・アーティキュレーション(発音の明瞭さ)・
イントネーションを練習して自然な英語を身につけよう!
本やスピーチ、映画の感動を伝えてみよう!

日時：7月2日(金)
18時30分～

会場：共通講義棟南
201教室

*申込者多数の場合、下記日程で予選を行います。
【予選】
日時：6月25日(金)
18時30分～
会場：共通講義棟南
201教室

英語の本、またはその一部分を朗読するコンテストです。
内容のジャンルは問いません。
多読ルームの図書から選んでも、
他のものから選んでもかまいません。
あなたの好きな物語・スピーチ・映画の
1シーンなどを3分間にまとめて、家族や友人に
読み聞かせるように朗読していただきます。

対象：全学部の学生・院生
持ち時間：1人最大3分間
賞品：1位 図書カード3000円分
2位 図書カード2000円分
3位 図書カード1000円分

みんなの参加をお待ちしています！
問い合わせ先: 多読ルーム貸出カウンター TEL: 052-838-2612
内線: 2836

昨年に引き続き、第2回コンテストを行いました。まず6月中に楽読クラブでの予選を行いました。大学教育開発センター英語講師の山添直樹、非常勤講師のLeah Sullivan、Andrew Blythの3先生に審査員をお願いして予選を行いました。20名が参加して行われました。2年生は夏合宿、また前年の12月に第1回のコンテストの経験があり、かなりの上達を感じました。初めての1年生もなかなかの健闘ぶりでした。

高橋俊平、田代佳央理、平手美帆、西岡知香、宇野朝貴、小柳津敬央、掛札恵子、飯田匡悠、上内雅一朗の合計9名が本選に出場しました。

第2回本戦

7月2日 18時30分～20時50分

(※表彰時間まで含む)

天白キャンパス共通講義棟南 201教室にて行われました。高いレベルでの競技であったとの審査員の評をいただきました。

参加者：学生：25名

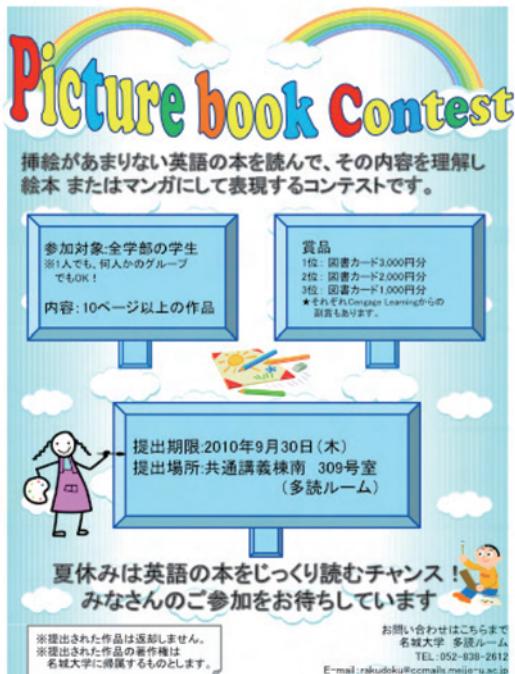
学 部	参 加 人 数
経営学部	4名（1年生1名、2年生2名、4年生1名）
経済学部	2名（1年生1名、4年生1名）
人間学部	4名（1年生2名、3年生2名）
法 学 部	2名（1年生2名）
農 学 部	10名（1年生4名、2年生6名）
薬 学 部	2名（1年生2名）
理工学部	1名（4年生1名）

本戦審査結果

大学教育開発センター所属の英語講師 3名（Robert Markovitz 先生、竹田真紀子先生、柳沢秀郎先生）の審査員により厳謹なる審査を行った結果、以下のように上位 3 名と、Honorable Mention（選外佳作）2 名を決定いたしました。

	学 部	氏 名	タ イ プル
1位	薬 学 部 1 年	古 松 知 昭	Obama's Speech
2位	薬 学 部 1 年	藤 井 彩 佳	Rain, Rain, Rain
3位	理工学部 4 年	小柳津 敬央	Nick Clegg's Speech
選外 佳作	人間学 部 3 年	掛 札 恵 子	Little Charo
	経 営 学 部 3 年	上 内 雅 一 朗	The Missing Piece Meets the Big O

Picture Book Contest



読んだ本の感動を絵で表現してもらうコンテストを計画しました。漫画時代の学生の皆さんの中には大変に絵を描く・イラストを描くのが得意な方が良く見受けられるため、多読ルームの絵本以外の本を読んで、それを絵本で描きなおしていただくというコンテストを計画しました。夏休みを利用してじっくり描いてもらおうと締め切りを9月末に設定し多くの作品が集まるかと期待しましたが、締め切りを10月末まで延ばしても実際に提出されたものは2作品にとどまりました。数は少なかったですがどちらも大変な力作でした。大学教育開発センター所属の講師の投票により、以下のように決定されました。

1位：農学部 2年生 川崎 彩夏さん

Wonderful Wizard of Oz



2位：都市情報学部1年 植田 貴文さんの

The Little Match Girl

となりました。表彰状と副賞の図書カードは可児キャンパス担当の柳沢先生から手渡されました。



両作品はネイティブの先生による英語のチェックの後、多少の文章の訂正を行い、コピーを多読ルームに蔵書としておさめました。

来年度は 少し負荷の軽いポスター・コンテストも考えられるかと思いました。

The First Book Review Contest

The first Book Review Contest 2010

好きな英語の本を 友だちに紹介してみませんか？

コンテストについて

好きな本の書評として、以下3点を英文でまとめて提出して下さい！

1. Introduction of the book (内容の紹介)
2. What is good about the book (どこが良かったか)
3. What impacted you most./What did you learn (一番感動したこと または学んだこと)

条件

- ◆A4サイズ1枚にまとめてあること(パソコンで出力したものでも手書きでも可)
- ◆英語500語以上であること
- ◆多読ルームにある本の書評であること

審査員 英語嘱託教員

応募について

締切 :2010年12月24日(金) →多読ルーム(共通講義棟N309)に提出
表彰式 :2011年1月 8日(金)

賞品 : 1st place / Book card (¥3,000)
2nd place / Book card (¥2,000)
3rd place / Book card (¥1,000)

副賞 /多読ルームで大人気！
Cengage Learning のFoundationシリーズのコレクションブック

★応募された作品は多読ルームホームページや、掲示板に展示させていただきます。

問い合わせ先:名城大学 多読ルーム
TEL: 052-838-2612
E-mail: rakudoku@ccmails.meijo-u.ac.jp

多読ルームのキャンペーン第3弾として、
読んだ本についての感動を、なるべく感想だけ
でなく、どこがすばらしいかを分析して紹介し
てもらいたいということで、本の書評コンテスト
を以下の要綱にしたがって行いました。

ブックレビューコンテスト実施要項

2010年11月18日

■締 切 2010年12月24日 (金)

■発 表

■表彰式 2011年1月 8 日 (金)

■賞 品 1位／図書カード3,000円分
2位／図書カード2,000円分
3位／図書カード1,000円分

副賞／Cengage Learning の
Foundationシリーズのコレクショ
ンブック

■必要項目

1. 本の内容の紹介

- a. 時（時代）と場所の設定
 - b. 主たる登場人物の紹介（性別・年齢・特徴などその他）
 - c. あらすじの紹介
2. その本の良かったところ
- a. 構造、構成
 - b. 場面設定

- c. エピソード
 - d. 人々の心情表現 など
3. 一番感動したところ または学んだこと
- 枚数・語数 A4サイズ用紙1枚（パソコンで出力したものでも手書きでも可）、英語500語程度
- 題材 多読ルーム内の図書
- 審査員 大学教育開発センター英語講師

参加者の学部の内訳

全学共通プログラム以外の学部からも応募があり、大変うれしく思いました。

農 学 部	9名
薬 学 部	4名
経 営 学 部	5名
人 間 学 部	3名
法 学 部	2名
経 済 学 部	1名
合 計	24名

The First Book Review Contest 2010 結果発表

大変お待たせいたしました！
The First Book Review Contestの結果をお知らせいたします。

応募人数	: 24名
審査員	: 英語教員6名
審査観点	: 1. 本の内容の紹介が書けているか 2. どこが良かったか説明できているか 3. 感動したこと または 学んだことが書けているか 4. 文法・語彙力
採点方法	: 上記4つの審査観点から、各5点満点、計20点満点で採点。 6名の英語講師の合計点で順位付け。

上記方法で審査した結果、こちらのみなさんの受賞が決定しました！

順位	学部	氏名	おすすめ書名	レベル
1 st place	経済学部	宇野 朝貴さん	The Citadel	5.0
2 nd place	法学部	山中 知美さん	Girl Meets Boy	1.0
3 rd place	農学部	櫻井 瞳さん	Look Out for Turtles!	2.0
Honorable-mention	薬学部	木戸 啓輔さん	The Phantom of the Opera	2.2

※選評は別紙をご覧ください。
おめでとうございます！

多読ルーム

作品の講評

- * 1位；宇野 朝貴 “The Citadel”：

先ず第一に37000語という大変に長い本を見事に要点をまとめて、どのようなお話であるのかを紹介してあること、第2にこの本の長所が明確に書いてあることが好評化につながりました。作者の経験に触れて医学的知識の源をあきらかにした上で、医療現場のことがよく描かれている点や、作者のイギリスの医療制度に関する理想ままで読みとる事ができる点など具体例をあげて書かれています。また第三の項目である感動のシーンについても、この本の本質に触れるものであり、なるほど納得できるものでした。最後に英語力について、読み易さレベル5という難易度の高いものを読みこなし、またよくこなれた英語で、自然体の自分の言葉で書かれており説得力があり、多くの審査員の高い評価を受け最高得点となりました。

* 2位：山中 知美 “Girl Meets Boy” は読み易さ度1.0という読みやすい本の書評です。難しい本のみの書評が高得点をとることなく、この書評が高い評価を受けたことをうれしく思います。評価基準の4項目を見毎にクリアしており、特にこの本から学んだことが平易な自分の言葉で書いてあり、説得力ある大変良い書評となっています。

3位：桜井 瞳 “Look Out for Turtles！” はノンフィクションです。大変よく要点をかいつまんで紹介し、“イラストが大変に美しく、まるで絵本のようである”とこの本の長所としてあげています。英語力については今少し努力が望まれますが、この本を読んで亀についてもっと知りたいと思わせるような上手な紹介をしてくれました。

* 選外佳作：木戸 啓輔 “Phantom of the Opera” も感動を自分の言葉で述べてあるところが大変に共感を呼び好評であったため、Honorable Mention（選外佳作）として加えさせていただきました。

3作品ともそれぞれにジャンルも読みやすさレベルも違う作品が選ばれたことは大変に良かったと思っております。応募作品全体の問題点として、

第一に、要約が長すぎるということをあげたいと思います。内容を肝心なところ、つまり要点をかいつまんで、短く紹介するということは色々なことに共通して大切な技術といえると思います。この点についての改善を期待したいとおもいます。第二に、作品の良い点については、感想ではなく、何が、どこが、どうして、何故良いのかということを分析的に書く訓練をしていただきたいと思います。もうひとつの問題点はパラグラフが書けていない人が沢山いたことです。英語で書く基本としてパラグラフの書き方を学んでいただきたいと思います。また会話以外の文章で、be going to, want to と書かないで wanna, gonna を使った方がいましたが、これは書き言葉ではありませんので（会話文ではかまいませんが）、気をつけていただきたいと思います。

24という多くの書評が出たことを大変うれしく思います。上記以外の作品も大変良いものが沢山あったことを申し上げたいと思います。たくさんの応募ありがとうございました。来年度の第2回コンテストにはまたよりよい作品の応募があることを期待しております。

表彰式



2010.12.24 Book Review Contest

提出作品一

No.	書名
1	Grandad's Magic Gadgets
2	The Golden Monkey
3	I Spy
4	Harry Potter and Sorcerer's Stone
5	Alexander Graham Bell
6	The Little Prince
7	E.T.
8	PEANUTS ; A Story About Janice
9	Look Out for Turtle !
10	Girl Meets Boy
11	THE FIREBOY
12	JUST LIKE A MOVIE
13	The Wizard of Oz
14	The Happy Prince
15	The Phantom of the Opera
16	International Management
17	不明
18	不明
19	The Kindest Family
20	Help !
21	TROUBLE at the Zoo
22	Cheese-Rolling Races
23	Night of the New Magicians
24	Citadel

Book Review Contest優勝者の作品

Book Review: The Citadel

Tomoki Uno

This is a novel about a doctor called Manson. He first arrives at a mine as an assistant doctor and works his way up to become a doctor he wants to be since then. He meets a woman who teaches children at school in that area. He gets married to her and moves to another larger town where he grows his reputation as a good skillful doctor. After he's gone through a trouble with some of the people in the town and nearly lost his license, he decides to move to London to open a practice. As days go by, he meets the other doctors in London, and sees how they make money and become rich. He starts to think of money as a measure of how successful a man is. He gets to know many rich people and buy another practice to deal with them. But eventually, money can't change him. An event reminds him of the feeling he had in his first days as a young doctor. He realizes that what he was doing is wrong in principle with a great feeling of regret. He apologize his wife that he hasn't listened to her advice and tells her about a blueprint for his future plan. And that makes his wife Christine so happy once again. Now, he wants to build a hospital in a relatively small town where he and two of his friends work together and share the knowledge together to offer patients best treatments. Manson, Denny and Hope, these three of the doctors are the experts in different fields of medical practice. But a sad thing happens to Dr. Manson like a bolt of lightning out of the blue. His darling wife, Christine is hit by a bus on her way back home just when she has brought a lump of cheese at the store. It is an accident and she is dead. He breaks down greatly and takes to his bed for weeks. But his long time

friend Denny is never going to let him live in this way for long. He takes Manson to the country and tries to cure his pain of losing her. At first, it doesn't seem to work out but gradually, the nature of the beautiful country begins to affect his feelings. The story ends here.

As a review for this book, I'd say this is the one of the best books I've ever read. The story never got me bored until I finished reading this book. Since the author had served as a medic in the British navy, he knew about disease very well. The story kept me curious about the various treatments he gave to his patients. I think, guessing from the author's experience as a medic, this story reflects his own opinion about the ideal medical system in UK.

I was interested in Mason's feelings and thoughts which are changing throughout the story. Especially, the part where he came back to his true self and then faces the death of his wife nearly brought tears in my eyes. Although this book doesn't say what he did after that, I was deeply moved by his determination to change the medical system that couldn't give an equal opportunity to receive the necessary treatment to everyone living in UK.

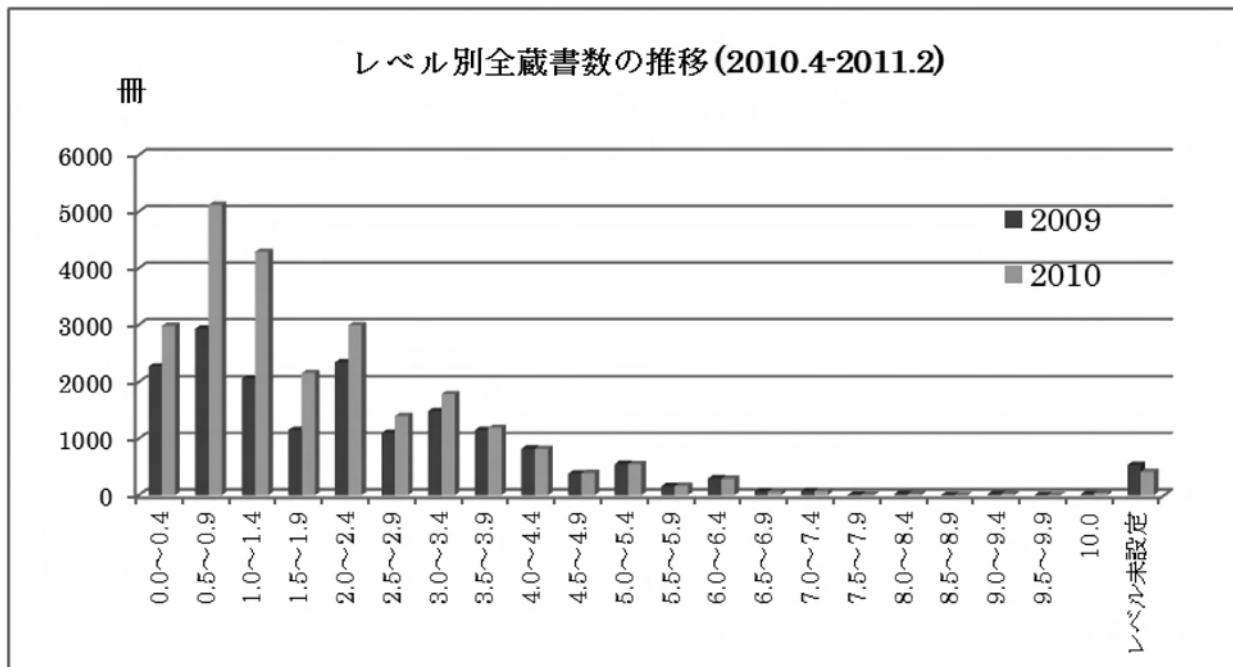
1-4. 今年度購入した本について

1-4-1. 多読ルーム全体として

竹田真紀子（嘱託英語講師）

今年度は、昨年度のデータから一番学生に読まれているレベルの0.5～0.9、1.0～1.4を中心に、蔵書数の少ない1.5～1.9レベルの本の充実をはかりたい。

るよう発注計画をたてた。0.5～0.9、1.0～1.4レベルの本については、ほぼ年度当初の計画通りに本を増やすことができ、貸出も増えた（下図参照）。しかしながら1.5～1.9レベルの学生に読みやすいジャンルの本が思うように見つからず、貸出冊数と蔵書のバランスがとれていない。来年度に向けては、このレベルの本のさらなる充実をはかりたい。



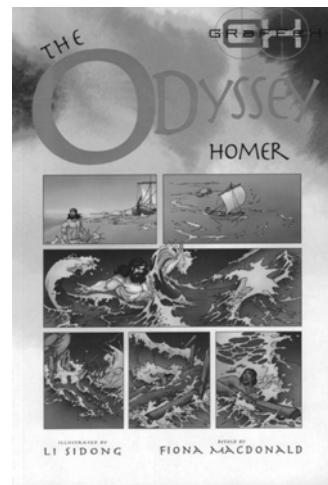
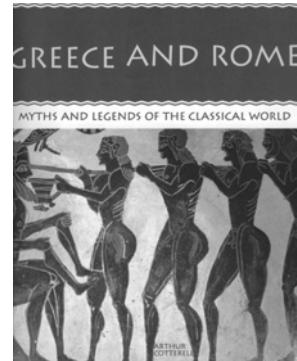
ジャンルについても学生の嗜好にあわせて、特にPicture Books, Science, Human interestの本を中心に購入した。また特に人気で学生からの要望もあり購入したものは、ディズニーのシリーズ、Curious Georgeなどである。その他にマンガの充実をはかったことで、今年度はOne Piece, Case Closed（名探偵コナン）などのマンガ本を嬉しそうに競って借りていく学生を多く見かけた。人気マンガは学生が内容を知っているので私自身きちんと文字を追って読んでくれないのでないかという懸念があった。しかし学生からは、内容を知っているので、日本語と英語の言い回しの違いや擬態語、擬声語の違いに気づき驚いたなどの意見が聞かれ、表現の違いなどに気づくよいきっかけとなっていることがわかった。また数時間もマンガを立読みする学生も時折見られマンガは学生の多読へのモチベーション向上に貢献していると実感した。



1-4-2. イギリスで購入した本について

岡林 園（英語嘱託講師）

男子学生の希望の多いスポーツに関する、特にサッカーに関する本がどうしても少ないと、2010年9月、EUROCALL (European Conference of Computer Assisted Language Learning) 学会に出席のためフランスに行くのを利用してイギリスに立寄り、ロンドンのみで5軒ほど書店を回りました。Waterstone's の本、支店、Borders、Blackwell's 等を巡りましたが、なかなか希望のレベルの本が見つかりませんでした。最後にFoylesで希望のレベルの本をみつけることができました。サッカーに関する本は、Arsenal, Chelsea, Liverpool 等のチームに関する本と、プレーヤーに関するもの、そして、スクワッシュ、テニス、スケートボーディング等のその他のスポーツに関するもの、また車、列車等の乗り物に関する本もかなり見つけることができました。またかねてよりなんとか手に入れたいと考えていたところの、ギリシャ、ローマの神話を易しく書き直してあるものを見つけることができました。これらは英語文化の根底に含まれていて、色々な本の理解に欠くことのできない重要なものです。たとえば、*Mythology of Greek and Rome*, *Iliad and the Odyssey*, *Psyche and Eros*、等です。また特にグラフィック・ノベルと呼ばれるコミック・ブックと同じようなものでも見つけることができました。そして一番の収穫はBOEWOLF – 英語で書かれた最古の英雄叙事詩 – それもグラフィック・ノベルになったものを見つけることができたことです。古期英語で書かれている原本はとても読むことはできませんが、しかし、英語の物語としては、ぜひとも多くの皆さんに知っていていただきたいと思うものひとつです。今回のロンドンでは合計100冊ほどを購入しました。今回のFoyles書店は我々にとって一番好みしいレベルの一つまり現地の小学校高学年から青少年用 – 多くの蔵書がそろっていて、ロンドン行きは大変実り多いものになったと思います。



1-5. 多読ワークショップの開催 (METS)

授業内多読活動と多読教材を使用した生 徒主導型プロジェクト (2010年6月9日)

竹田真紀子 (嘱託英語講師)

2008年度に多読ルームが開設されて以降、設備、スタッフ、蔵書について整備が進められ、以前のように学生から「借りたい本がない」「借りたい本が探しづらい」という声はあまり聞くことがなくなった。多読を英語学習としてだけでなく生活の一部として取り入れて、常に多読図書を持ち歩いている学生も見られ、多読が学生の中に浸透しつつあることを実感していた。しかしながら、その一方で先生方からは、「授業内で多読をどのように扱うべきか?」「授業外の課外学習としてだけ扱うべきか?」「黙読以外にはどのような授業内活動ができるか?」などの相談を受けることがよくあり、先生方と多読をどのように授業内外で取り扱うべきか話あい、どのような活動に発展できるのかなどについて提案する機会の必要性を感じていた。そこで名城大学英語教員研修会 (METS: Meijo English Teachers Session) にて6月9日に、私が今まで授業で行ってきた多読活動を紹介することにした。研修会では、参加した先生がたもそれぞれが授業内でどのような多読活動を行っているのか話しあい、意見やアイディアを交換するよい機会となった。



以下に私が研修会で紹介した、1) 授業内多読活動：読み聞かせのアイディア、ブックカンファレンス、2) 多読教材を利用したプロジェクトワークについて紹介する。

1) 授業内活動

読み聞かせのアイディア

学生に役柄を与える（例：子供と母、おじいさん／おばあさんと孫など）お互いに自分が誰のつもりで誰に本を読んでいるのか意識させながら読む。

授業内で学生がペアになって本を読み聞かせする際に、読んで相手に聞かせるという指示だけでは、学生は棒読みになったり、恥ずかしがったりして積極的に大きな声で読むことができないことがあった。そこで私は、学生に役柄を与え読ませることにした。この目的は、学生が自分が誰のつもりで誰に本を読んでいるのか意識させるとともに、役柄を演じながら読むことにより恥ずかしいという気持ちを軽減されることであった。例えば、おじいさんが孫に本を読む際は、かわいい孫のために優しく読むように意識させ、孫がおじいさんに読む際は、耳が聞こえにくいくらい、大きな声ではっきりと読むように指導した。こうすることによって、毎回学生は、役柄に合わせて自然に違ったことを意識しながら（イントネーション、正確さ、感情：優しさ、憎しみ、愛情、流暢さなど）相手にわかるように伝えることを心がけることができるようになった。

ブックカンファレンス

毎週必ず1冊は本を読むように指導し、3～4人のグループで読んだ本について紹介する。また紹介された本について質問をする。

本を紹介する際に、はじめは、書いてきたブックレポートを見ながら紹介させ、慣れてきたら見ないで紹介させた。また聞き手にも質問をさせることを課題として与えた。本の紹介者は、まず本を「読み」それに対してブックレポートを「書き」、その本を紹介することにより「話し」、聞き手はそれを「聞いて」質問するというように4技能を使う活動へと発展させた。

2) 多読教材を利用したプロジェクトワーク

多読のノンフィクションの教材を利用して、学生が自分たちで計画を立て、毎週1つのトピックについてリサーチを行い、数週間後に（私の場合は6週間）パワーポイントにまとめさせグループで英語でプレゼンテーションをさせる。その後、

互いのグループについて評価しあい良かった点、改善点について話し合う。

日本のような環境では、意識的に英語を読む機会は作れても、ライティングやスピーキングなど英語を産出するような機会はそう多くはない。そのため学生は英語を生産的に使うことに自信がなく積極的に取り組むことができない。プロジェクトワークは、このような問題に対して、多読教材を使って何が出来るかを示す一例である。

学生自身が主導になって読んで学んだ内容、語彙などを有意味な活動（学んだことを学生が協力してまとめそれを発表する）を通して再利用し、4技能を使って最終的に英語を産出することができた。何よりも大切な事は、学生が主になって積極的に取り組むことができる環境づくりである。こうした環境の中で自分たちの作品を発表することで自信がつき、英語に積極的に取り組むように学生たちが変わっていくということである。

1

Extensive Reading

1. What do you do for ER in your class?
2. Do you have any successful activities using ER materials?
3. Do you have any problems?

3

Book conference

Students introduce a book.

1. Use the same questions on the book report. At the beginning, they can see their book report. Then, later they can introduce without the book report.
2. Use book conference sheet. Students introduce a book and draw a picture of the characters, images, a scene.. Then, ask questions.

5

Why project work?

- There is little chance to make use of reading materials for further production (Speaking / Writing) of the target language.
- Sharing the findings among students
- Intensive / Extensive reading
- Authentic & meaningful language use

2

Read to your partner.

Assign a role for students.

e.g. baby, wife/husband, boyfriend/girlfriend, little sister/brother, teacher, grandmother/father

- | | |
|-----------------------|----------------|
| ◆ Hi, my sweet heart. | ◆ Hi, darling. |
| ◆ Hi, honey. | ◆ Hi, sweetie. |
| ◆ Hi, Miss Takeda. | ◆ My dear. |
- With love, hatred, accuracy, intonation, emotion,

4

2 purposes for reading

- **Reading for fun!** (楽しみのために読む)
Read books you like. (Extensive Reading)
- **Reading for getting information!**
(情報を得る為に読む)
Find information you need. (Reading Project)

6

PROJECT I

COLONY PLANNING

Schedules

Week 1	SSR / Read to your partner
Week 2	Project Homework1 (Group presentation1)
Week 3	SSR / Read to your partner
Week 4	Project Homework2(Group presentation2)
.....
Week 12	Presentation preparation
Week 13	SSR / Read to your partner
Week 14	Group Presentation/Poster presentation

Introduction

- Write the names of your group members.
Decide a leader for the group.
 - leader -
 - member 1
 - member 2
 - member 3
 - member 4

Topic

- England (London)
- USA
- Brazil
- Australia
- Dominican Republic
- Mexico
- Nigeria
- Canada
- China
- Egypt
- France
- Germany
- Iceland
- Greece
- Israel
- Kenya
- Puerto Rico
- Russia
- Costa Rica
- New Zealand
- Cuba
- Peru
- The Philippines
- South Korea
- North Korea
- Jamaica

Project Homework 1

- Why do you want to colonize that place? Write at least 2 sentences. (Work? History? Technology? Fashion? Music? Sports? Culture? Nature?)
Because ...
- What is the current population of the place?
(Use simple wiki & don't read everything)
- How many people will you bring with you? Who are they?

COLONY PLANNING PROJECT

Your group is in charge of planning a new colony. Discuss which country you want to colonize and choose one from the list.
Use your imagination!

- Place you want to colonize:
-

Establish Colonies in Space



Write sources!
You need to use books
at least 3 times.

Sources: (from books? Website?)

Title: Italy
Author: Makiko Takeda
Publisher: Takechan publishing

What is the goal?

- Ss took the initiative in carrying out the book conference and project work. In so doing, Ss are able to review, and recycle the words and contents they learnt in class in a meaningful way.
- The most important thing is to provide Ss with the environment where they can take a central and active role in learning. It is possible that Ss can dramatically change their attitude toward learning. They become confident in using English by working together in groups and presenting their own work.

1-6. 八事・可児キャンパスの図書の貸出及びデータ管理について

竹田真紀子（嘱託英語講師）

2008年度に多読ルームがタワーに開設された年の2学期より、八事・可児各キャンパスにおいても多読図書の貸出が始まった。しかしながら、多読ルームとしての場所が確保できるめどがたたず、とりあえずはブックトラックに本をのせて各教員が教室まで本を持参して授業内で貸出を行うこととなった。授業では、学生が手書きで貸出・返却の記録をつけて管理をしていたので間違いや書き漏れも多く図書の紛失もある程度は避けられなかった。また八事に関しては、部分的なデータはとっていたものの、非常勤の先生全員に授業内で貸出業務をお願いすることは難しく、全体を把握してそのキャンパスごとの特徴（レベルや嗜好）にあわせた蔵書計画をたてることは難しい状況にあった。このように、多読ルーム開設当初より、八事・可児両キャンパスのネットワークの構築及び蔵書管理が常に懸案事項となっていた。

2010年度においても引き続き、ネットワークの構築実現の方向を模索したが固定の場所の確保等の問題すべてをクリアすることはできなかった。そこで今年度は、ネットワーク化を一氣に行うことと断念し、まずはハンディーターミナルという蔵書点検用に使用していた機械を用いて各キャンパス個々にデータをとり、その後セントラルデータに反映するという方法を2学期から導入した。これによって、レベル別の貸出、返却のデータをとることが可能になり（天白キャンパスのようにジャンル別まではできていない）図書紛失のリスクは格段に減った。またレベル別の貸出データを今後の蔵書計画に反映することが可能となった。（両キャンパスの2010年度の貸出実績については4. データ検証参照）

可児キャンパスに関しては、嘱託講師の柳沢先生が可児担当として着任され、可児キャンパス2号館の2501教室を多読ルームとして使用できることになった。八事に関しては、固定の教室の確保はできなかつたが昼休みの時間に教室を借りて貸出業務を行うことにした。貸出業務を一括して嘱託教員が担当することにより授業内で各教員が貸出のための時間を割く必要もなくなり、学生もよ

り多くの図書の中から時間を気にせずじっくりと自分にあった本を選ぶことができるようになった。



可児キャンパス多読ルーム

1-7. 刈谷市総合文化センター名城大学連携講座「First Step to 多読」

只木 徹（学長室）
竹田真紀子（嘱託英語講師）

名城大学の学生だけでなく近隣地域の市民の皆様に多読を通して英語を学ぶ喜び、名城大学の英語教育を知っていただく目的で、2010年度の新しい試みとして刈谷市大学連携市民講座において成人向け多読講座を担当する機会を得た。講座名は「First Step to 多読」で10月18日（月）から11月29日までの全5回、月曜日の9時半から11時に行われた。講座の内容は、多読初心者のために、

多読や多読を使ったアクティビティを実際に体験してもらしながら、多読の効果的な方法などを学んでもらうというものであった。また12月12日（日）には、希望者を実際に名城大学多読ルームに招待し、講座終了後受講生がそれぞれ多読を継続して行うことができるよう、より多くの本を紹介するとともに名城大学の多読ルームを実際に体験してもらった。アンケートにおいても受講生からは非常に高い評価をいただき、成人の多読学習への可能性を確信するとともに、成人学習者が継続して多読を行うことが出来る環境の必要性を強く感じた。今後の展望として、多読ルームをより整備し、名城大学の学生はもちろんのこと、このような一般の近隣地域の市民の皆様にも貢献できるような施設にしていきたいと考えている。

◆名城大学

講座等名	内 容	開催日時	会 場	対象・定員	参加費	事前申込	問合せ先
First Step to 多読	自分の力に見合った本をたくさん読むことで多読の喜びを知り、多読関連のアクティビティを楽しみます。（5回講座）	10/11～11/15 毎週月曜日 (11/1は除く) 9:30～11:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 15名	受講料 1,500円	9/1～9/15	生涯学習課 Tel. 62-1036
大人の環境学	地球環境問題の複雑さと解決の困難さ、特に温暖化や資源循環問題を題材に学びます。（5回講座）	10/6(金)・21(木)・ 11/12(金)・26(金)・ 12/10(金) 10:30～12:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 30名	受講料 1,500円	9/1～9/15	生涯学習課 Tel. 62-1036
「健康寿命」を全うするために —今何が必要か?—	健康寿命（元気で活き活き生活できる寿命）を全うする為の食事法、化学物質との付合い方を学びます。（3回講座）	10/6～10/20 毎週水曜日 10:00～11:30	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 30名	受講料 1,500円	9/1～9/15	生涯学習課 Tel. 62-1036
光でつながる生命と宇宙	生き物と宇宙の世界を「光」というキーワードでつなぎ、中学生でも親しめるように紹介します。（6回講座）	10/9～11/13 土曜日 14:00～16:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤 中学生以上 20名	受講料 1,800円 教材費 実費	9/1～9/15	生涯学習課 Tel. 62-1036

都合により、変更する場合があります。

表1 参加者

	30代	40代	50代	60代	合 計
女性	2	7	1	2	12
男性	0	0	1	0	1
合 計	2	7	2	2	13

表2 平均年齢

女性	47.2歳
男性	50歳代

受講生は全13名中男性は1名のみであった。年齢は30代から60代と幅広く、特に子どもに少し手がかかるなくなった40代の女性が一番多かった（表1、2）。講座の受講動機としては、「英語が話せるようになりたい」「英語力を伸ばしたい」「旅行や英語のニュース・映画を字幕なしで理解できるようになりたい」といった英語そのものへの興味からくるものや、「子供が習っている英語がわからない」「子供と一緒に勉強したい」など子供への英語の必要性から自分も英語を学びたいという意見も多かった。



授業では、様々な多読教材を用いたアクティビティを行いながら、毎回多読ルームから多読図書を持参し受講生に貸し出しをした。受講生は、その本を授業外で読み感想を簡単にレポートにまとめ、次回の授業でその本についての感想をグループで英語で話し合った。その他に、毎回速読を行いリーディングスピードや理解度を意識させるように促しその変化をチェックさせることで、どのような読み方が適切なのか受講生が体験しながら学べるようにした。その結果、1回目と最終回を比べて理解度（内容確認問題の正答数）も上がり、読書スピードは格段に早くなかった（表3 67.4→121.9語/分）。

表3 速読の結果

	正答数 (8問中)	範囲	語彙数 (1分間)	範囲
1回目	5.7	0~8	67.4	44~114
最終回	6.5	3~8	121.9	57~160

受講生たちの多読の読書量は、全5回の平均で週5.5冊、3,500語、5週のべ約28冊、19,000語であった。ほぼ全員が多読初心者であったが、自分の嗜好やレベルにあった本を見つけることができ

るようになり、中にはのべ52冊、30,000語程も読んだものもいた。

表4 多読結果

	冊数平均	範囲	語数平均	範囲
全体	27.6冊	6~52冊	18581語	8626~29306語
1週当たり	5.5冊	1~10冊	3492語	1000~7000語

多読に限らず、どんな勉強であっても楽しく取り組むことが成功の鍵である。多読3原則は、（1辞書は引かない、2わからないところはとばす、3つまらなくなったら止める）楽しく学習に取り組むためのルールのようなものである。多読の素晴らしさはここでは語り尽くせないがその大切な一つは、学習者主導の勉強法であるということだと思う。先生から教材を与えられるのではなく、どんな年齢や嗜好の学習者であっても自分で自分の好きな本を選び読むことができる。またどんなレベルの学習者であっても、個人のレベルにあった本を自分で選び自分で学習スピードも決めることができることである。つまり多読を通して自立学習者として学習者自身が成長できるのである。アンケートでは、最終回に出席した9名中9名全員が、「多読に非常に興味を持ちこれからも続けていきたい」、「講座や講師にとても満足した」と答えた。これは、彼らが多読を楽しいと認識し、自立学習者としての第一歩を踏み出した結果であろう。



1-8. 名城大学附属高等学校国際クラスへの多読指導

只木 徹（学長室）
竹田真紀子（嘱託英語講師）

名城大学と名城大学附属高等学校の高大連携多読指導の取り組み強化のため2010年度は、5月21日と9月6日の2度にわたり大学の教員が附属高等学校に出向き特別授業を行った。以下がその概要である。

第一回多読特別授業

日 程：5月21日（金）
11:00～12:00
担当教員：只木 徹、長尾 純、竹田真紀子
対象学生：名城大学附属高等学校 国際クラス1年生
目 的：多読初心者の為の多読の導入・多読への動機付け

多読初心者である国際クラスの1年生を対象に実際に多読の教材を用いて、多読とは何か？多読三原則、多読の効果、多読図書の語彙数やレベルの調べ方などについてアクティヴィティを通してデモンストレーションを行った。また実際に学生が使用している教科書の語数と学生が身につけたい英語力に必要なインプットの量を比較させることによっていかに多量のインプットが必要なのか、また多読がその目的達成のためにいかに重要かを考えさせて多読の具体的な目標設定も行った。



第二回多読特別授業

日 程：9月6日（月）8:45～9:30
担当教員：只木 徹、竹田真紀子
対象学生：名城大学附属高等学校 国際クラス2年生
目 的：大学入試をひかえた多読経験者に多読教材と検定試験や大学入試試験の英文とを比較させ多読への新たな動機付けをはかる

国際クラスの学生は、年に何度も英検やTOEICなどの検定試験を受けるため、試験対策の勉強を日常的にする。また受験近くになると受験対策のための問題集ばかりに意識がいってしまいがちである。そこで第二回の特別授業では、名城大学で2010年度の後期より導入した授業用の多読教材（McGrawHillのReading Laboratory）を使用して、多読教材と受験問題（東大の入試問題を使用した）、検定試験（TOEIC、ケンブリッジ英検PETレベル）の英文のレベルを比較させることによって、どのくらいのレベルの多読図書を読めるようになることが試験対策にとっても必要なのかを認識させるようにした。多読の必要性をもう一度学生と一緒に考えるよい機会となったようである。

この授業の後、担任の澤田先生が企画された「多読月間」（2-3. 名城大学附属高等学校の取り組み参照）では、学生が多読に精力的に取り組み素晴らしい結果を残すことができた。澤田先生より結果を詳細にレポートしていただき感謝している。新しい本が入ると学生が嬉しそうによってくる様子などを教えていただき学生が楽しんで多読に取り組んでいることを本当に嬉しく思う。試験の点数は試験対策をすれば飛躍的に伸びことがある。しかし英語の運用力は短期間で身につくものではない。それには多量のインプットが必要不可欠でそれにはある程度の時間がかかる。その点で多読は日本のように英語を日常的に使用しない環境（EFL: English as a Foreign Language）では特に重要な意味を持つ。日常的に英語のインプットが存在しないのであるから学習者が意識的にその機会を作らなければならない。多読は学習者がレベルや読みたいジャンルを決め与えられるのを待つことなく自らが主導になってその機会を作ることができるからである。附属高等学校との

連携は大学教育では実現できない長期的な多読指導を実現することができる。附属高等学校の先生方の指導のもと3年間多読に取り組んできた学生が大学でさらに力をつけることができるよう取り組んでいきたい。

1

Put the items in order of difficulty from easiest to the most difficult.

[] [] [] -----> []

 easiest The most difficult

4

Where do the questions come from?

- A: TOEIC Part7
- B: ケンブリッジ英検 PET Test
- C: 東京大学入試問題



2

Why did you put the items in that order?

2

3

1. Work together with your partner and in group.
2. Answer questions of Purple A & D as quickly as you can and show me the answer until you get all the answers correct.
3. The winning pair gets 12points,
the 2nd:11pointsthe last:1point.
4. The points for your group is the total points of 2 pairs in your group.
$$\boxed{12} + \boxed{1} = 13 \text{ points}$$
5. The ONLY winning group can get prize and move one space forward.

2. 名城大学及び名城大学附属高等学校における多読実践報告

2-1. 英語多読を自ら実践しての一考察

名城大学理工学部建築学科准教授 吉永美香

(1) 多読及び多読ルームとの出会い

私が本学の多読ルームに初めて入ったのは、平成22年2月上旬のことだ。所属学科の卒業研究発表会が共通講義棟で開催されており、ちょうど30分程度の空き時間があったので、気になっていた多読ルームに足を運んだ。

実はその数週間前、書店で『多聴多読ガイド』という雑誌を見つけ、「多読」に興味をもったばかりであった。日本の多くの大学生がそうであるように、私も和訳・文法・語彙記憶中心の大学受験英語を学んだが、一向に自由自在に操るレベルに達しない。言い訳がましく付け加えておくと、研究職である以上、確かに仕事に英語を使う。英語で書かれた専門書や論文を読んだり、英語のソフトウェアを利用したり、ときには国際会議で英語の論文を発表することもある。しかしこれらはあくまでも自分の専門分野の英語である。latent heat loadとかdual source chillerとかいう専門単語は何の苦もなく読み書きできるが、日常生活でごく普通に必要な英語力を持ち合わせていないのだ。そんなことを漠然と何年も考えていたあるとき、多読が「英語圏の子供たちが母国語としての英語を学ぶように」英語を学ぶ方法であるという記事を読み、これは良いのではないか、という直感を抱いた。

さっそく多読を始めようと思ったが手を付ける場所が分からないので、『多聴多読ガイド』を参考に、インターネット書店で数冊のGRと児童書を購入した。しかし程なくして、1~2時間で読み終わるような薄い書籍でも一冊1000円近くの費用がかかるため、多読の継続には経済的にも保管場所にも困難が伴うことに気が付いた。

多読ルームは学生向けの施設であって、教員が利用できるところではないかもと思っていたが、入室したところ、快く貸して下さることが分かった。蔵書のジャンルと書棚の位置、書棚の上段が読みやすいレベルで下段にいくほど難易度が高くなる（但し大型絵本はレベルに関係なく下にある）こと、読みやすさレベル（これが多読でいうとこ

ろのYLという数値であることを後に知る）がバーコードに記載してあることなどをご説明いただいた。どうやら、多読の当面の目標は100万語読破であるということらしいので、私も100万語をめざして多読ルームの蔵書を読んでいくことにした。もちろん、Excelで累積語数グラフを作りながら（図参照）。

(2) ゼミナール学生への自主ガイダンスとその後

約50万語が過ぎたころ、新年度を迎えた。建築学科では3年の4月にゼミナールに配属される。新吉永研のスタートの季節だ。この時点で、実際に自分が読み続けてみて多読がよさそうだという、より強い確証を得たこともあり、自分の研究室の新3年生8名、新4年生10名、そして大学院2年生1名を多読ルームに引き連れていった。その後、別の研究室に所属している大学院1年生2名にも声をかけた。

他学科・他学部の状況は不明だが、私の周囲を見る限り、学生は英語が得意ではない。昨年度、「自主ゼミ」と称して私のゼミの希望者のみを募って、ソーラーハウス設計のためのごく簡単な専門書を題材に英文書籍の輪講を行ったのだが、一コマ90分で4~5頁しか進まず、また潜在的な問題点もいくつか明らかになったので、翌年は自主ゼミの開催を断念した。潜在的な問題点というのは、希望者で輪講としたため、①英語力のレンジが広く、担当学生が平均よりもレベルが高いとさっさと進んでしまい、平均より低い学生が取り残される（あるいはその逆）、②日本語訳を作成してきてそれを音読してしまう（これはやらないようにと指導したが、訳を見ないと一步も前に進めないというケースもあり、ある程度は認めた）、③異学年混在で行ったので、高学年で非常に英語力が低い学生には精神的に辛い、などだ。③について補足すると、このような学生は実は意欲は高いというケースが多い。今まで英語は苦手なので避け続けてきたが、ここらで心を入れ替えて頑張ってみたい、という学生だ。折角再スタートのきっかけを得たのに、このような場で意欲がそがれてしまうことを、非常に心配した。英語に限らず、このような学生へのケアは個別に、または少人数で行う必要がある。

話を元に戻す。4月に私が独自に行った多読ガイダンスの参加者のうち、4~5人程度の学生は、

3か月以上継続して通ったようだ。定番だが、Oxford Reading TreeとCurious Georgeが人気だった（私が勧めたためバイアスがかかっているのかもしれない）。しかし、1年生の英語の講義が本格的になる季節には、かなりの蔵書数であるにも関わらずYL 0～1.2あたりの書籍はいつも貸出中で、思うように読めないとのぼやきも聞かれた。本年度末にさらにCurious Georgeシリーズなどの蔵書が増強されたので、たいへん嬉しく思う。4年生、大学院生に関しては、梅雨明けから夏休み終わりまでは研究や実験が本格的に忙しくなることもあり、残念ながらこのタイミングで多読ルームから遠ざかってしまった。しかし、この中のある学生は英語学習を自分で維持しようと、NHKの英語番組「リトル・チャロ」のバックナンバーに移行した。楽しく全編最後まで継続できたようだ。

もちろん「継続は力なり」だが、私はいつも学生に「三日坊主でもいい」と言っている。意図は、三日坊主でも、四日目にまた気が変わってやる気になれば、断続しつつも継続していることになる、ということだ。もっと言うと、四日目に別のテーマに興味をもって勉強し始めて、また三日坊主になっても、また次の新しいことにチャレンジすれば、次々と新しく、広い知見が得られる。そうはいっても不思議なもので、いつも新しいスタートを探していると、数か月か数年で、同じ題材に戻ってくるものだ。今回多読ルームから遠ざかった学生も、遠くない将来、多読や英語学習に戻る可能性が高い。また、その際「ゼミの先生がやれって言ってたなぁ」ではなく、「ゼミの先生がやってたなぁ」のほうが、より強い牽引力を有すると、私は思っている。

(3) 多読の楽しさ

私は、多読歴1年が過ぎ、現在およそ350万語を読了したあたりである。よく言われることであるが、多読が非常に効果的な英語学習であるもっと大きな理由は、ごく単純な読書の楽しみがあることである。日本語だろうが、英語だろうが、自己人生とは違う生き方を創造の世界で経験したり、新たな情報や知識を得たりすることは、間違いなく楽しい。多読の最初の一歩として、GR(Graded Reader)や洋販ラダーシリーズ（主に日本の名作の簡約版）を手にする人は多いと思う

が、情報を得る楽しみとして多読をするには、私はLR (Leveled Reader)と児童書を勧める。異文化学習としての多読である。

例えば、図書館の利用方法について着目する。ORTのLEVEL 0は、文章としての英語は皆無で、絵だけでストーリを追いかけるというもっとも易しいレベルだ。この中で、初めて図書館を利用する際に、保証金のようなものを支払っているのが見てとれる。日本の公共図書館では通常あまりみないシステムだ。Beezus and Ramona (Beverly Cleary, YL5)ではRamonaが図書館の本に落書きをしたため、保護者が弁償をする羽目になる。しかし、弁償をするとその本は持ち帰って良いと言われる。確かに経済的に筋は通っているのだが、ちょっと不思議な気がする。

教育上面白いと思うのは、小学校低学年が登場する児童書では、頻繁にShow and Tellという課題が登場することだ (ORT, Ramonaシリーズ, Junie B. Jonesシリーズなど)。低学年では、家にあるお気に入りのものを学校に持って行って、クラスの皆の前で発表（それが何か、どうして好きか、どのような経緯で入手したか、など）し、学年が進むにつれて自分の report や作品の発表に発展していくようだ。これはプレゼンテーション力を重視する米国ならでは教育方法で、日本でもぜひ導入してほしい初等教育だ。また、発表のあとに先生が「あなたの大切なものを share してくれてありがとう」というのもパターンだ。なるほど、shareは単純な物の貸し借りや分け合いだけではなくのだな、と感心した。

同じく教育面では、有名なMagic Tree Houseシリーズ (YL3.5) の姉妹本として刊行されている、Magic Tree House Research Guide (YL3.5) も興味深い。対応する巻の歴史的、あるいは芸術的テーマにのっとって、ノンフィクションの参考書となるように構成されている。私がとても気に入っているのは、最後にはいっている“Doing more research！”として、自分でそのテーマの調査を促すページだ。Research Guide全巻に同様に説明がある。例えば本を探すなら、①書籍のすべてのページを読む必要はない。②書籍の名前をメモしておくこと。③本の内容をそのまま書き写しては、絶対に、いけない。④ノンフィクションの書籍を使う。などだ。レポートやプレゼンテーションの前段階となる大切なところを初等教育の

中できちんと教えようという配慮が素晴らしい。
(インターネット上の文章を平気でコピー＆ペーストしてレポートに貼り付ける学生にぜひ参考にしてほしい)

ちょっと異色な楽しみもある。Louis Sacharは著名な児童小説家で、前述のBeverly Clearyとならんで、ほぼ全作品が邦訳されて日本語で読むことができる。しかし、Dogs Don't Tell Jokes (YL5)だけは邦訳版が見当たらない。これは人を笑わせることが大好きなGary君のJokeというかダジャレが満載の、それでいて最後は感動するという素晴らしい作品なのだが、ダジャレが効きすぎていて、邦訳できない、ということらしい。邦訳のない作品を原著で読むというのは少し優越感のある楽しみだ。さらに、この作品では、如何に米国人がコミュニケーションにJokeを大切にしているか、ということが読み取れる。(確かに国際会議でも、諸外国のプレゼンテータはよく聴衆を笑わせる。日本人にはなかなか難しいハードルだが...)私は、この本のJokeの殆どを理解できなかったのだが、そのうちの一つ chicken cross the road ネタの正体が、それから8冊後に読んだTalks Turkey (Nate the Greatシリーズ, YL2.5)で判明した。“Why did the chicken cross the road?” “To show he wasn't chicken.” ということらしい。あまりにも定番ネタらしく、最後まで書いてないことが多いこんなネタも、多読で何度か出会うと徐々に慣れそうだ。

ところで、多読を楽しめない学生の何割かは、実は読書そのものの経験がないことも考えられる。日本語ですら読まないのだから、英語なんて、というわけだ。日本語でも英語でも、できるだけ若いうちに、よい書籍に沢山出会うことが、根本的な語学力を培う上で、もっとも重要なことだろうと思う。

(4) おわりに

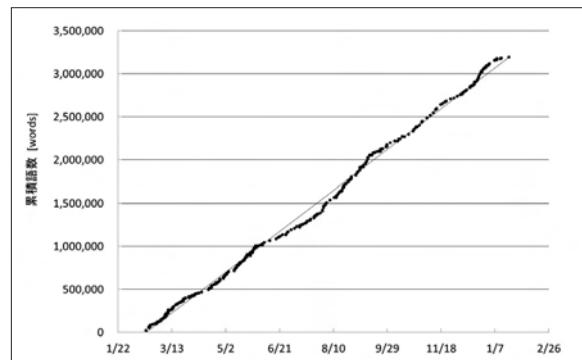
最後だが、個人的に多読のデータを得たく、最近TOEICを受けた。点数は伏せるが、自分としては十二分に多読の効果を感じられた。やはりReadingのスピードが非常に速くなった実感があるし、多読に比べるといくら長文問題といえども、短いものだ。しかし、TOEICはビジネス英語の検定試験のため、残念ながら私の読んできた児童書中心の多読ではボキャブラリが違い、語彙増強

とは至らなかった。

一報で、私は受験英語（もちろんゆとり教育以前の）の経験者であり、「こんなに勉強してもしゃべれるようにならない」典型的日本人だった。多読を実際にやってみてひしひしと感じたのは、文法（精読）と多読は車の両輪だということだ。たくさん文章に触ることで、初めて文法が生きてくるのだと思う。1年次で、大学受験でたくさん詰め込んだ文法知識やボキャブラリある学生には、ぜひ多読を活用して、その高いレベルが落ちないように4ないし6年間維持してほしい。逆に、今から英語学習そのものを本格的に始めるという学生は、すぐに目に見える効果が出るとは、期待しないほうがよいだろう。しかし、断続的にでもよいかから、楽しみながら継続することで、あるとき急に両輪が効率よく回りはじめ、必ず効果が顕在化する。私の場合は、読書速度が向上した、理解度が高まったなどの明らかな効果を実感したのは、150～200万語を読んだ辺りだった。まだまだ私も通常のペーパーバックを読むには力不足なので、もちろん継続して多読を続ける予定だ。

最後に、このような素晴らしい環境を作り、維持してくださる岡林先生はじめ、多読ルームの皆様へ、御礼とエールを送りたい。

図 約1年間の累積読了語数グラフ



2-2. 多読指導と授業内活動としてのオーラル・インタープリテーション実践

平尾節子（名城大学 非常勤講師）

1. はじめに

名城大学に着任した2006年、多読指導システムが全学共通教育英語プログラム全体に取り入れられた。多読指導を英語教育の重要な教育手段として位置づけ、その効果的な指導を展開することは大いに意義があると認識した筆者は、早速多読を授業に組み入れた。2008年には名城大学多読ルームがオープンした。授業で多読ルーム・ツアーガイドを始めた。

学生たちに易しい英語で書かれたre-toldの原書を辞書を引かずに読むことの興奮と楽しさを体感させ、英語学習へのモティベーションを高めることを目的とした。

2. 実践報告

筆者は1年生のBasic English、2・3年生のElementaryとIntermediate English、4年生のAdvanced Englishの4コースを、農学、経済、経営、人間の4学部の学生を継続して5年間、担当した。多読導入により、英語が好きになったと言う学生、Storyが面白い、挿絵が美しい、自分の好きな本を選んで読める、英語を読むのが楽しくなったと言う学生たちが増えていった。

導入段階では、興味付け、学習意欲向上が主たる目的ではあったが、2009年には、多読の効果を高めるために大量に読み続ける指導として、前・後期で、基礎は30冊15,000語、初級30冊30,000語、中級40冊50,000語、上級では40冊80,000語のノルマを与えた。学生たちの中には、基礎で225,000語、中級で500,000語、上級で100,000語を超えたつわものが現れた。

まずは、多くの英語をインプットする習慣が定着できたようであった。

課題としての「多読リポート」には、一冊毎に、日付、タイトル、出版社、レベル、語彙数、読破した時間などを記入し、英語で物語の要約と自分の感想を述べ、自分が気に入った英語表現の記述を習慣づけた。

さらに、授業中の言語活動として、感動した物語の主要部分の口頭発表を試みた。黙読により、文章の意味を読み取るだけではなく、ひとつの文章を生きた語りとして、声を出し、感情を込めて、読む練習である。特に、物語の中の話し言葉・セリフをまとめて覚え、囁いたり、朗々と披露したり、声色替えて対話するのである。

学生たちは、当初、とかく小さな声での発表になりがちであった。声を響かせる発声、抑揚、リズム、イントネーション、自分が感動した内容に応じての音調、音量、間のとり方、ジェスチャー、などを工夫し、練習を継続した。

学生たちは語彙を増やすことに懸命であるが、単語を一語、一語覚えるだけでは、実際に活用できないこと、究極の英語力は、英語表現をまとめて身につけることであると認識させた。

平易な英文で書かれている物語の表現、つまり自分では言えないような素晴らしい言い回しを、良いお手本として、声を出して見習い、自分自身のことばとして発表する。学生たちは、指名されて発表するのではなく、自ら“Volunteer”として“Entry Sheet”に登録し、次の授業時に嬉々としてプレゼンテーションを実践した。

英語学習は楽しくなければ身につかない。また、学生自身が努力を重ねなければ上達しない。

“Enjoy English!”が筆者の指導モットーであり、“3 As (Be active! Be aggressive! Be ambitious!)”が学生へのEncouragementである。

例：The Lion and the Mouse : Retelling of “Aesop Fables”

A lion caught a mouse for a tasty snack.
"Do not eat me," said the mouse, "and I will help you one day."
The lion laughed. "How could you help me?
Still, I like your spirit. Go."
The lion released the mouse and watched him scamper away.
Later hunters caught the lion in a net. The mouse saw what happened. "Now I can help you." he said.
"You can't help me," said the lion.

"Watch," said the mouse. He chewed the net with his sharp little teeth. Finally, it was cut.

"You saved my life," said the lion.
"Now we're even," said the mouse.

3. 評 價

多読の評価は、「多読レポート」を最終総合成績の30%に、オーラル・インタープリテーションは、10%に組み入れた。

一年生の入学時4月のプレイスメント・テストと、12月後期のCASEC (TOEIC) スコアの伸びと比較して、その有効性を検証してみよう。

実験対象：農学部1年生 Basic Class (25人)

プレイスメント CASECスコア			プレイスメント TOEICスコア		
平均	326.3	377.7	平均	264.0	298.2
最高	306	506	+200	最高	245
最低	215	365	+150	最低	185
					+100

4. 考 察

アンケート調査の結果、多読に取り組むことにより、「英語を読むことに対する抵抗感がなくなった」ことが筆頭に挙げられている。さらに、大量に読むことで、感動と興奮と喜びをみずから体験し、「英語を学ぶ意欲が向上した」と述べられている。また、授業内活動としてのオーラル・インタープリテーションでは、オーディエンスの前で発表することの「自己表現の満足感」を体験している。

自作のスピーチとは異なり、物語の中の自分が感動した一部分を引用して、朗読発表をするのであるから、学生たちは「予想よりも取り組み易かった」と言う。ただし、発音・イントネーションなどの指導が必要であった。そのため、多人数クラスでは、“Volunteers”の学生による発表に限られたが、上級クラスでは、毎時、全学生が交互に発表のチャンスに恵まれた。

5年間の実践から、多読とオーラル・インタープリテーション活動は、実践的な英語コミュニケーション能力だけでなく、読解力を含めた総合的な表現力を身につけるための有効な手段であると考察する。

5. おわりに：今後の展望

今後さらに、実践を継続して、学生の英語学習に対するモーティベーションを高め、実力アップを図りたい。そのために、「ヨーロッパ言語参照枠組み (CEFR:Common European Framework of Reference for Languages)」の活用により、“I can do.” のCan-Do-System を導入して、名城大学の学生たちに達成感と自信を持たせたい。評価もCEFRの4技能・6段階評価を参考にして、学生みずからの自己評価システムで、目標到達度を測り、Step by stepのグレード・アップで、さらなる自信をつける指導を展開したい。その実践に基づいて、Can-Do-System 導入による多読の自立学習に関するプログラム、およびCEFR活用の多読自己評価システムを研究開発し、提案していくと考える。

残念ながら、多読指導システムとその環境整備が充実している名城大学で、来年度から、教鞭をとれなくなるのが、痛恨の極みである。

末尾ながら、名城大学で、ご指導、ご厚誼を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。

2-3. 名城大学附属高等学校の取り組み

2-3-1. 名城大学附属高等学校 英語多読プログラム実践報告

杉山剛浩（名城大学附属高等学校英語科教諭）

(1) 経緯

平成21年度より、名城大学教育開発センターの協力を仰ぎ、高等学校英語教育の早期段階から、多量の英語に触れることにより、高校卒業時に高い英語力を有し、更に大学教育においても継続的に行うことにより、附属高等学校・大学との連携の強みを最大限に發揮することが可能だと考え、名城大学全学共通教育の担当者との意見交換を踏まえて、英語多読教育をコアとした「①高大連携英語教育の展開、②高大を通じた英語教育の組織的改善の実施と教材開発の推進、③英語多読法の普及」の3点を柱とした高大連携による英語教育のあり方を構想するに至った。平成22年度は、附属高等学校普通科2年生スーパーサイエンスクラスを中心に実施した。

(2) 目的と仮説

多読は、従来の文法訳読方式の英語教育法を変える力を持っている。多読を導入することにより、高大共に、授業展開に関して、教師からの自発的な改革が進むものと期待できる。教師のアクション・リサーチや生徒(学生)アンケートによって、この成果が評価、又は測定することが可能である。

語学学習にとって、インプット量は重要な成功要因である。多読により多量に英語をインプットすることは、単に読解力だけでなく、他の技能(話す・聞く・書く技能)の伸長にもつながることが期待される。高校教育の早期段階から多量の英語に触れることにより、大学入学時の英語力アップが期待でき、大学でも多読を継続することによって、更なる効果を期待することができる。

(3) 指導計画

附属高等学校の国際コース（1年生中心）とSS（スーパー・サイエンス）クラス（2・3年生）が対象。英語の授業時間、及び課外時間に生徒が多読に取り組めるように、多読用図書の整備を行い、英語教師には授業評価アンケートなどを通じて、多読指導のノウハウを共有する。

大学では全学部（法・経営・経済・理工・農・薬・人間・都市情報）を視野に入れて多読用図書の整備を継続し、高校と大学を合わせて計7,000冊以上の図書を整備する。



又、大学でこれまで続けてきた多読活動課外クラブ「楽読クラブ」の取り組みを高校にも応用し、多読による効果をモデルグループで検証するリサーチを継続的に実施する。

(4) 実践報告

第1回 Introduction :平成22年4月19日

2年生スーパーサイエンスクラスにおいて公開授業という形式で多読の効用についてのミニ・レクチャーを実施。

多読の基本姿勢の講義より、実際に多読体験を試みた。一般的に高校生は、試験や大学受験の科目と捉えがちであるが、多読により身につけることができる読解力、想像力などのスキルを分かるという視点から考えさせた。

絵本やGRを手に取らせ、読みやすさレベルや総語数、ジャンル分けシールなどの説明を行った。またRobert Munschの「LOVE YOU FOREVER」を読み聞かせを実施した。これによって、難しそうな洋書でも「分かる」「おもしろさ」を体験させることができた。



普段の英語の授業とは一味違う体験をさせることにより、多読とは何であるのかが明確に示され、多読に対する思いが生徒個々に十分伝わったものと思われる。机上で学習することは教科書や問題集だけではないことが生徒にとっては新鮮に写り、今後の英語学習への夢と希望につながった。

第2回以降 英語授業時、課外時にそれぞれの取り組み

授業実践－10分間の多読時間

生徒たちは予想以上に、静謐に取り組むことができた。教師からは特別な指示はしないが、本のアドバイスやレベルの推薦などを積極的に語る。

Reading Log/Book Report

下図のように生徒に読書記録をつけさせ、多読の大きな目標である100万語に、少しでも近づけるようにモチベーション維持を試みた。

	日付	タイトル	レベル	語数	総語数
1	Y/10	Floppy Floppy	0.1	10	10
2	Y/10	Who is it?	0.1	16	26
3	Y/10	Birds	1.2	326	352
4	Y/10	Under the Sea	1.5	550	902
5	Y/11	Bear's tooth	0.6	197	1099
6	Y/11	Candle - light	0.6	229	1320
7	Y/11	Big Cat Babies	0.7	283	1611
8	Y/11	Spines, Strings and Teeth	0.7	272	1883
9	Y/12	Pet Lizard	0.6	247	2116
10	Y/12	DEATH of DINOSAUR	1.2	521	2637
11	Y/12	Lucky Number	0.8	500	3137
12	Y/12	The Umbrella	0.5	646	3783
13	Y/12	Run For Your Life	1.0	1600	5383
14	Y/12	BARTERING	1.0	400	5783
15	Y/12	The Missing Child	1.0	1700	7083
16	Y/12	Girl Meets Boy	1.0	1900	8983
17	Y/12	The House on the Hill	1.4	2500	12483
18	3/1	The Gift of the Magi	1.2	4400	16883
19	3/1	The House of the Seven	1.6	9000	21083
20	3/1	John Dee Book and	1.6	15000	35583

又、長期休暇などを利用し、Book Reportを作成し、読書記録を単なるデータの記録だけでなく、印象に残った言葉などを転記させて、提出をさせた。

Reading logのcheck

平成21年度 2年スーパーサイエンスクラスでは、約8ヶ月で生徒の多読総語数が以下のようない結果であった。多読への取り組みに積極的に行う生徒が多く、最多語数は106,066語であり、平均語数は46,734語であった。

平成22年度 2年SSスーパーサイエンスクラスでは、同時期に最多語数101990語であり、平均語数は61383語であった。

平成21年度と大きく違う点は、個々の生徒が平均的に数多くの語数を読んでおり、平均語数が大幅に増加した。これは多読プログラムが徐々に生徒に浸透してきている結果であると思われる。また平成21年度は数名がReading Logを紛失したり、未提出のままであったが、平成22年度はそのような生徒が皆無であり、個々の生徒が数多くの語数を読破している点である。また複数名が80000語を超えている。

«スーパーサイエンスクラス2年生»



アンケート結果

平成22年度はスーパーサイエンスクラスの生徒に下記のようなアンケート調査を実施した。それぞれの回答より、短期間で多読の効果を検証するのは大変難しいことが推察される。特に2の質問で「分からぬ」を約半数の生徒が答えていることから、英語が「分かる」とはなかなか実感できないことが窺える。但し質問4では前向きな姿勢が見受けられるため、長期的な視点で多読プログラムを実施する価値が十分あると思われる。

1 多読をやっていく中で、英文を読むことへの気持ちの変化はありましたか？

- ・以前と変わらず、英文を読むことへの抵抗感がある（2名）
- ・以前に比べると英文を読むことへの抵抗感は減ったが、やはりまだ抵抗感はある（23名）
- ・英文を読むことへの抵抗感がなくなった（7名）
- ・もともと英文を読むことへの抵抗感はない（2名）
- ・英文を読むことへの抵抗感がでてきた（1名）

2 多読をやっていく中で英語力に変化はありましたか？

- ・英語力がUPした気がする（9名）
- ・英語力に変化はみられなかった（11名）
- ・英語力がDOWNした気がする（0名）
- ・わからない（15名）

3 どんな分野の本が好きですか？

- ・小説（8名）
- ・文学（1名）
- ・歴史（2名）
- ・ホラー（1名）
- ・ミステリー（4名）
- ・絵本（17名）

- ・自然科学（6名）
 - ・ファンタジー（9名）
 - ・医学（1名）
 - ・経済（0名）
- 4 多読についてどう思いますか？
- ・これからも読んでいきたい（28名）
 - ・あまり読みたい気がしない（1名）
 - ・どちらともいえない（6名）

(5) 考 察

アンケート調査より分かるように、昨今の高校生は活字離れといわれることが多いが、実は多読に関して前向きであることが分かる。平成21年度に引き続き、平成22年度も高校と大学との連携事業としての取り組みが、もう少し前進すると更に発展的に展開できたと思われるが、対象生徒が前向きに多読に取り組むことにより、気付かぬうちに英語を読むことに対する抵抗感が減ってくれるものと信じている。また、今後も多読を実施することにより、大学受験だけでなく英語本来の学びが浸透してくれることを確信している。

(6) 今後の展望

多読の図書整備が徐々に進み、絵本の冊数が増えたことにより、幼いころから慣れ親しんだ本もある。このように既知のストーリーを改めて読むことにより、新たな発見や感動が出てくることを期待している。国際クラスとスーパーサイエンスクラスが多読プログラムを実施しているが、今後も継続的に多読プログラムを実施しなければその効果が検証できず、生徒アンケートなどを活用しリサーチする必要がある。また将来的には、徐々に他コースにも応用できるよう期待している。

株式会社アルク発行「英語の先生応援マガジン2010夏号」に掲載された名城大学附属高等学校の多読教育の取組み

キムタツの
顔

英語教師塾 in 応援マガジン

キムタツ先生こと灘校の木村達哉先生を塾長として、全国の高校教師が集結して授業研究を行う「英語教師塾」。このコーナーでは、このワークショップの誌上版として、現場で奮闘する先生方の姿をレポートし授業見学をしたキムタツ先生にコメントをいただきます。また、キムタツ先生が教育現場の生の疑問に応えるコーナーも8ページに掲載。明日からの授業に生かしたくなる指導方法のヒントが満載です。



生徒のビジョンに合わせたさまざまなクラス

今回伺った名城大学附属高等学校普通科は、国公立大学を目指す「特別進学クラス」、名城大学をはじめ他大学を目指す「一般進学クラス」、名城大学人間学部との7年間一貫教育で英語とコミュニケーション能力を養成する「国際クラス」の3クラスがあります。また、「一般進学クラス」は理系・文系に加えて、特に理数系教育に力を入れたスーパーサイエンスコースが設置されています。さらに、多くの校外学習を取り入れた特色あるカリキュラムの「総合学科」があります。さまざまなクラスの授業を見学することで、名城大学附属高等学校の全体像が浮かび上がってきました。



巧みな話術で生徒の心をつかむ坂 将人先生

巧みな話術とグループ・ディスカッションで理解を深める

最初は、高1の「特別進学クラス」で英語Ⅰを受け持つ坂先生の授業。授業冒頭は、生徒の緊張を和らげようと「筋トレ・シリーズ！」と題して、“push-up”、“sit-up”、“chin-up”などを板書し、生徒に辞書を引かせたり、イラストを交えたりしながら解説。単に機械的に単語を覚えさせるだけでなく、なるべく語源やイメージを生徒に意識づけながら語彙の定着を図っていました。

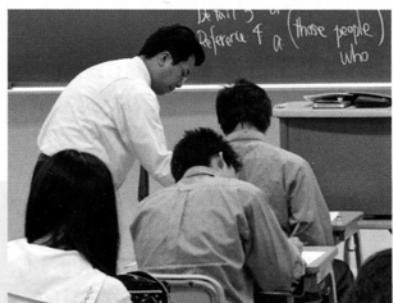
ウォーミングアップが終わると、教科書に入ります。今日のテーマは「時制」。「will と be going to の違い」を主な題材として、「未来ってどう表現する?」「なぜ時や条件を表す副詞節中の動詞は現在形になる?」の2つのポイントを学習しました。“I will/am going to buy a new TV.” という例文を元に、will に

は「(その場で)突然決めた」、be going to には「前々から決めていた」というニュアンスを、複数の例文を参照しながらグループごとに生徒に考えさせて、文法への理解を深めていきました。この日は時間が足りなかったのですが、普段はその日に習った英文を音読、さらに数回リピートさせて定着を図るそうです。坂先生の授業は解説一辺倒ではなく、生徒にポイントを意識させながらグループで考えさせる指導方法で、生徒が主体的に授業に取り組んでいる姿勢が印象的でした。

机間巡回で適切なコーチング

続いて、高3のスーパーサイエンスコースで英語Ⅱを受け持つ杉山先生の授業を見ました。授業開始前、生徒が教室後方の書棚から1冊ずつ洋書をピックアップして、授業の冒頭10分で默読。これは多読プログラムの一貫で、多読により多量に英語をインプットすることで、単に読解力だけでなく、他の話す・聞く・書く技能の伸長も狙いとしています。名城大学との高大連携で多読用の図書を7,000冊準備していて、生徒は自分の興味に応じて1冊を選びます。読み後に、「Reading Log」や「Book Report」を記録して、多読の大きな目標である100万語に少しでも近づけるよう頑張っていきます。杉山先生は「自分が興味を持てる内容を選んで、読み進めることができるのが多読の面白さ」と生徒に話されていました。

授業では、『Reading EXPLORER 1』(CENGAGE Learning)を使用しています。この日は「Extreme Destination: VANUATU」の“Volcano surfing”、“Land diving” の2テーマの復習から。



多読用の図書は種類が豊富!
机間巡回を細かく行う
杉山剛浩先生

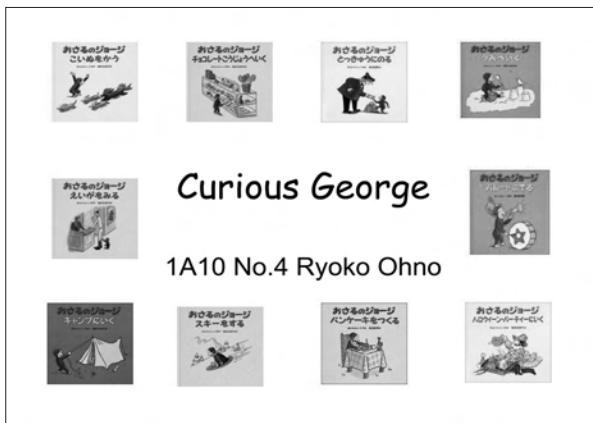
2-3-2. ブックトーク指導

伊藤高司（名城大学附属高等学校教諭）

これまで何度も読書指導の1手法としてブックトークを実践してきた。ブックトークとは、ある一つのテーマを設定し、トークで繋ぎながら数冊

の本を紹介する啓蒙のための活動である。読んだことのない本を様々な切り口で紹介することで、生徒たちはこれまで持つことのなかった分野への興味を抱く要になることが期待される。2010年度は、夏休みに取組み、本を紹介するパワーポイントを作成した。以下が学生が実際に作成し使用したパワーポイントと原稿である。

1



2

About Curious George



- It was written by MARGRET & H.A.REY
- This story is set in New York City.
- George from Africa was gone out by the man in wearing yellow hat.
- George likes imitation.

3



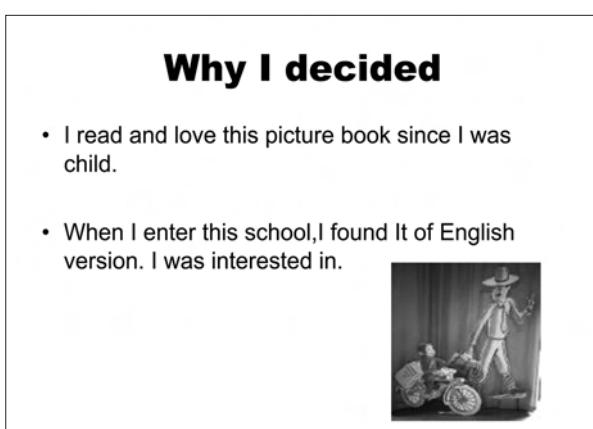
4

A year of publication

★First Time

- The original work : in 1947
- Japanese version : in 1954
by the way, when my mother elementary school student (1 grader), she read it on Japanese text book.

5



6

The difference between Japanese and English

• Writing of titles

English (the original)

→ Curious George

Japanese(a literal translation)

→mimic a baby monkey

After author's death

→George of a monkey



Except picture books



an animated film!
2006, it show!
time→ 90minites

but,it was didn't show in Japan...
but!!!!!!

Show on Japanese TV!

It shows every Saturday.

A TV station
→NHK education

Time
→am8:35~



George Goods!



quotation

- 岩波書店
<http://www.iwanami.co.jp>
- Wikipedia
<http://ja.wikipedia.org/>
- NHKオンライン(アニメワールド)
<http://www9.nhk.or.jp/anime/george/>

Curious George

1A10 No,4 Ryoko Ohno

Hello.

My name is Ryoko Ohno. I announce about my favorite picture book from now. But, I am sudden. I have a question to you. Have you looked picture books? Maybe, everyone answers "yes!" Picture books are loved by many people and many countries. So I loved it too. I read many many it too! In that, especially I love this book. The name is "Curious George" I announce about "Curious George"

I have two reasons why I decided it. I spoke it some time ago. Because I read and love this picture book since I was child. And When I enter this school, I found it of English version. I was interested in it.

By the way, who is curious George? It was written by MARGRET & H.A.REY.

This story is set in New York City. George from Africa was gone out by the man in wearing yellow hat. George likes imitation. So he wants to be mimic. He is mimicking In New York City.

Next, I speak about this book of popularity. George is loved all over the world. It was translate into 12 languages! And it was publish twenty million! So it was big Bestseller!

Next, I speak when it A year of publication In First Time, The original work was published in 1947. Japanese version was published in 1954. By the way, when my mother was an elementary school student (1 grader), she read it on Japanese textbook. So George has been loved for long time.

Next, about the difference between Japanese and English. There are Writing of titles The original work in English is curious George. Japanese in a literal translation is "mimic a baby monkey". After author's death, now Japanese is "George of a monkey".

Curious George plays actives part except picture books. In 2006 curious George was made into a movie but it wasn't shown in Japan . . . however shown on Japanese TV! It is broadcasting every Saturday! A TV station is NHK education. It begins from 8:35 am. There are The difference between books and animation. A little totch of pictures. My opinion, my favorite picture is books one.

Many George Goods is sold various places. Please see these. They were sold in USJ. It is sold online.

I spoke in this way; my fever is not cool off.
So my fever is forever.

Thank you for listening.

2-3-3. 附属高校国際クラス多読実践報告

澤田麻衣（名城大学附属高等学校教諭）

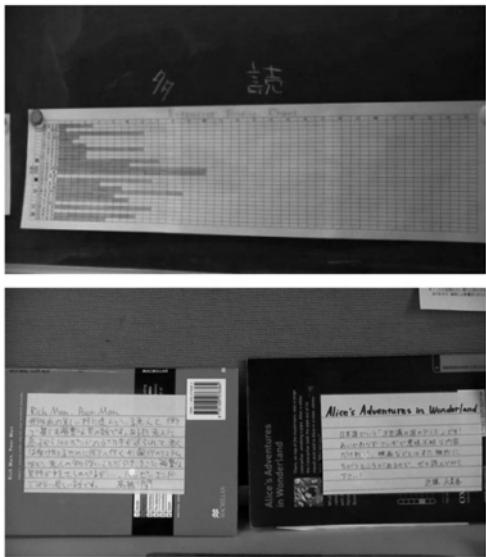
附属高校国際クラス2年生(25名)を対象に行った「多読強化月間」の取り組みについてご報告します。1年次より多読を導入していたクラスではありましたが、日々の課題やクラブ活動等で忙しい生徒達にとって、多読の優先順位は低いものでした。多読を習慣付けるためにはある程度の強制力が必要と考え9・10月の2ヶ月間を「多読強化月間」とし、目標語数を20万語と設定し多読に取り組みました。

まず、9月初旬に名城大学の多読担当者より生徒向けにオリエンテーションがあり、多読がTOEIC等の資格試験や、大学受験とも相関があることをお話をいただきました。国際クラスでは資格試験に力を入れているため、生徒に多読をすることがただ「楽しい」だけではなく「英語力を養成する」ものだという意識付けをしました。その後1ヶ月間は英語IIの授業を週に一度多読用に使い、50分間生徒たちは各自選んだ本を読みました。最初は寝てしまう生徒が出るのではないかと心配しましたが、どの生徒も熱心に読んでいました。毎週読書記録を回収し、点検をしたうえで、語数をチャートにし教室に張り出しました。また、一定の冊数を超えると次に何を読んだら良いかわらかない、という生徒も増えてきたため、付箋に感想を書いて貼るという取り組みも行いました。

多読は成績には入れませんでしたが、10月末時点で20万語を超えていた生徒(12名)はクラス内で表彰をしました。2ヶ月間のクラス平均語数は16万7千語で、最も読んだ生徒で21万語、最も語数の少ない生徒で6万5千語という結果でした。また強化月間が終わった後もチャートは教室に掲示したままにし、自主的に読書記録を提出した生徒は点検し、チャートに加えました。

最後に12月初旬に行ったアンケート結果をお知らせします。

- 12月時点での総語数（平均：20.2万語）
- 一週間に何時間くらい多読をしていますか
(平均：1.9時間)
- 日本語の本を一ヶ月に何冊くらい読みますか
(平均：1.1冊)
- 主にどんな場所、どんな時に多読をしていますか。<複数回答可>
 - 電車で(16)
 - 家で(16)
(宿題が終わってから読む(1)、寝る前に(6))
 - 学校の空き時間(8)
 - 暇なときはいつでも(4)
 - 週末(2)
 - 学校で残って
 - 気が向いたとき
 - 地元の図書館
 - 勉強が嫌になった時



- 次の質問に1（強くそう思う）～5（全くそう思わない）までの5段階で答えてください。
(平均)
 - (2.2) 多読をすることで英語を読むことへの抵抗感が減った。
 - (2.7) 多読をすることで英文を読むのが早くなかった。
 - (2.8) 多読をすることで単語の意味を推測できるようになった。
 - (3.0) 多読をすることで語彙力がついた。
 - (3.3) 多読をすることで資格試験への力がついた。
 - (3.9) 多読をすることで日本語での読書習慣がついた。

- 好きなシリーズ、よく読むレベル等があれば教えてください。

<シリーズ別>

- Cambridge(5)
(1.0～2.5くらい／2.0／2.8くらい)
- OXFORD(5)
(2.8くらい／2～3.5くらい／2～3くらい)
- マンガ(3)
- Disney(3)
- Foundations Reading Library(3)
- 映画のシリーズ(2)
- Penguin Readers
- OXFORD Reading Tree
- レベル1以下の本しか基本読みません。
- ジブリの英語版
- ラブストーリーに最近はまりました。
- 絵の可愛いやつ。

<レベル別>

- 3以下のレベル
- 2.0～2.8まで。
- 最近は2.5くらいまで読めるようになってきた
- 2.0まで読みます
- 2.0くらい。黄色のシールの本が好き。
- 1.6が読みやすい。2.8は少し難しく感じるけど内容がすき
- 1.8～2.6くらいのレベルですね
- 1.4～2.8くらいまで。
- 1.6～2.0くらい
- 1.0～1.3とか1.4くらいが気軽に読める。
- 0.8～1.2くらいが、簡単すぎず、難しすぎず。
- 1.0くらいのレベルで1000語以上あるもの。

- 9～10月を多読強化月間に設定しましたが、この取り組みについてどう思いますか。
感想、今後の要望などがあれば教えてください。

- 普段あまり多読しないから、この期間にたくさん本を読めて良かったです。
- 多読をする習慣ができるまでに時間がかかる、あまりできなかった。図書館にあった「ルビ訳」シリーズを読みたいけど多読としてアリかナシか検討して欲しい。
- 取り組み自体は良かったけど早く読まなきゃいけないという気持ちがあり楽しむより読む

ことに一生懸命になってしまった。

- ・それがきっかけで習慣的に読むようになった。その語数が宿題（模試マラ）にカウントされるのでやる気が出ている。
- ・普段は本をあんまり読まないので、強化月間の間にたくさん読むことができてよかったです。また、日本語の話を英語の話にしてあるものは、日本ではこんな風に言わないので違うんだなと新発見できた部分もたくさんあった。
- ・本を読む機会が少なかった僕には、本を読む良いきっかけだったと思う。おかげで、日本語訳をすることが楽になった。20万語は少し多かったと自分は思うので、15万語ぐらいにしてほしい。
- ・20万語読もうとすると9月初めから読まないと後半きついので、テストや宿題と被らないようにしておけばよかったです。
- ・よかったと思う！この機会がなかったらきっとほとんど読んでいなかっただと思うから。気軽に以前より本を手に取ることが増えた。大変だけど、ずっと継続してほしい…
- ・少しきつかったけど、悪くはなかった。
- ・本が好きではなったのでやらなければいけないという状況がなければ自分からは読みませんでした。なのでこのような期間があつてよかったですなと思いました。授業中の長文や英検の長文をスラスラと読めるようになったと思います。日本語の本をまだ読む習慣がついていないけれど多読は自分から進んで読むようになりました。
- ・ノルマ達成は辛かったけど多読をする良い機会になった。もう少しレベルの高い本（特にOxford）と、ONE PIECEの続きや、マンガ（ジブリ以外）を読みたい。
- ・ちょっと大変かなーと感じたけれど、割と読めた。すごい楽しかった。
- ・1ヶ月で20万語というのは結構辛かったけど、どうしても読まなきゃいけない環境になっていたので、英文を読む力はついたと思う。
- ・20万語は厳しいけど毎日コツコツ読めばそんなに難しいことではないと思う。
- ・たくさん本を読みました。しかし、二ヶ月で20万語というルールを設定されたので、楽しく読むというより、語の多い本で稼ぐという傾向が見られたような気がします。どちらに

しろ、20万語読めたので良いと思います。

- ・多読する習慣についてよかったです11月からは全然読んでいない。CDを聞きながら本を読んでいたのでリスニングの面でも少し力はついた気がする。やろうとしないと、今みたいに全然読んでない状態がずっと続くけど、9・10月は楽しく多読をしていたと思う。
- ・目標があったからがんばれたし、なんだかんだで楽しかったです。
- ・つらかったけど、達成感とかが、すごいそれしかった！！だし、読むのが好きだから、そこまで苦ではなかった。またやっても良いと思う!!
- ・英語の本は普段触れることがめったになく、国際クラスに所属していてもこのような機会がなかったら積極的には読まないので良い取り組みだったと思います。
- ・9～10月は、とにかく簡単な本を読みました。すごく楽しくて、20万語という目標があったからたくさん読むことができたので、また強化月間を作つてほしいです。要望としては、袋に入っているシリーズに2.0～2.5くらいのレベルのものがあると嬉しいです!!
- ・良いと思います。しかし私はあまり読んでいなかったので5の質問もそのような結果がでてしまったと思います。今日からまずは1日に1冊読むのをスタートさせようと思いました。
- ・多読するようになったから、良かったと思う。また、継続して読んでいきたいです。
- ・正直言うと自分はすごく要領が悪いので、多読も、Link Englishも普通のそれぞれの教科の宿題も…とやることが多すぎて辛かったです。自分は日本の小説が好きなのでその間全く読めなくてそれも辛かった。そもそも日本語ができるのに英語でやっても意味がないと抵抗を感じていました。できれば自分のペースで読みたい。好きなこともしたいし。
- ・強化月間を設定してくれた方が多読できる！ジブリやアニメの本をたくさん入れてほしい。
- ・この取り組みを聞いたときは「無理」って思つたけど、実際読んでみると案外すんなり読めたりし、20万語いったときは達成感があってよかったです。

8. 多読をしたことで何か変化を感じることはありましたか？

いつ頃から、どのような変化を感じ始めたか詳しく教えてください。

- ・変化はあまり自覚していない。(6)
- ・簡単なものはスラスラ読みやすくなったり、どんどんレベルを高くして読めるようになった。
- ・2、3冊読み終わった頃には長めの本でも普通に読めるようになった。
- ・長文を読むのが少し早くなった気がする。
(要領が良くなった)
- ・多読の強化月間頃から、日本語訳が今までより楽になった。今までは堅苦しい訳しかできなかったが、今はもっと打ち解けた言葉でできるようになった。
- ・始めは簡単なものでも辞書を引いていましたが、今はなんとなく単語を推測して読めるようになりました。
- ・5の項目の中にもあるように「長文」を読むのが前より速くなったという実感はある。
“単語の意味がわからなくても先へ先へと読み進める”というのはTOEICの長文や英検の長文にも役立ったし、これからも役立っていくと思う。
- ・10万語前後から読むスピードが速くなった気がする。
- ・10月の英検へ向けて勉強し始めたときに今までは読むことさえ嫌だったけれど今回は内容の把握も早くできたり読むのもはやすくなりました。
- ・(読み始めた頃から) 英文が目に入ってすぐ内容が頭の中をめぐる！(あんまり難しいのでなければ)
- ・9月上旬では、レベルの少し低めの本ばかり読んでいました。でも中旬ぐらいになると何か物足りない感じがしていてもっとレベルの高いものに挑戦してみようという気になっていました。
- ・よく出てくる単語が覚わるようになった、と思う！
- ・1.6以上ぐらいの本を読んでちょっと慣れてきた頃ぐらいから長文を見ても「ああ…(汗)」と思わなくなった。
- ・空いた時間に多読することによって時間の使

い方が上手だったと思う。

- ・今まで長文とか嫌いで、読む気にならなかっただけど、模試とかの時に意外とすんなり読めるようになった。
- ・最近そう思う。前までは1.6や1.8くらいまでしか難しくて読めなかっただけど最近は2.5の本もそこまで問題なく読めるようになってきたと思う。コナンなど会話ばかり続く本を読んでいると、よく出てくるフレーズや単語(殺人とか)などわかつてきたり、たくさんでてきて、どうしても気になるものなどは辞書で調べたりするから、少しは学べていると感じ始めた。
- ・約3万語くらいからは読むことへ楽しさを感じ始めていたと思います。そのころから語数を増やしたいという気持ちが強くなり、読むことに熱中しました。
- ・最初は1.0とか私にとって読みづらくて、ずっと0.5～0.9の本をずっと読んでいました。(10万語突破するくらいまで) だいたい0.5～0.9の本が読み終えたので1.0～1.5の本を読み出したのですが、最初全く読めなかっただ本が読めるようになってよかったです。今では2.0まで読めるようになりました！
- ・1ヶ月くらいで英語を読むのが辛くなくなったりなって思った。少し読む本のレベルが上がった。
- ・意味を知らない単語がでてきても、何とか読み進められるようになった。最近気付いたから、いつかはわからない。

9. 多読をする上で困難なこと、悩みなどがあれば教えてください。

- ・たまに途中であきてしまうことがある。(4)
- ・時間がない。(2)
- ・特がない。(2)
- ・頑張りすぎて眠くなってしまうことがある。
- ・語数が多くてレベルの低いものがあまりない。絵本になると分厚くて重くて持ち運びに不便。レベルが低くても知らない単語が多くて時々困ることがある。
- ・読んだことある本が増えていってしまう。
- ・文字が小さくて多いと初めは読む気が失せてしまう。
- ・わからない単語や難しい表現、話し言葉など

が出てくると少し戸惑ってしまう。

- 字数を増やそうとして難しいのを読むと途中でわからなくなる時がある。
 - 時間を自分で作っていかないとなかなか進まない。そして日にちを空けすぎると前のストーリーがわからなくなる…の繰り返しで悪循環になってしまふのが少しネック。
 - 本が嫌いだと読む習慣を習得するのに時間がかかるし、英語なので余計に本に対する抵抗感が増しそう。
 - 途中で内容がわからなくなったらやめればいいと言われても諦められず、つまらないまま1冊読んでしまい、内容が頭に入らないことがあります。
 - 本そのもののストーリーがつまらないときがある。1文ずつが短すぎて苛々することがある。(He is a man who works here everyday.ではなく He is a man. He works here. Every day.みたいな風に)
 - 自分の興味のある本が少ない…。
 - レベルの高いものに変えたりすると単語の意味がわからないものも出てきます。でも全部調べていては時間がかかりすぎるので、あきらめて次へ進んだり、推測することが難しかった。
 - 途中で話がわからなくなってくる。
 - 英語を理解するのに頭を使うので。頭の中でストーリーのイメージが作りにくい…→頭使って疲れる…
- だから、絵のあるやつをよく読みます。
- わからない単語があったとき、飛ばすけど、後で気になる。
 - 多読強化月間が終わってから、あまり読まなくなってしまったこと。
 - 読んでいるときにわからない単語を辞書で毎回引くのが正直めんどくさいです。辞書で引かないとあーって心で思ってスルーしちゃった…みたいな気持ちになって…。感覚で読みばいいとは心で思うけど、そしたらわかんない単語とかをわかったり読解力をつけるために読む、どんな読み方をしたら良いかわからないです。
 - もともとの語彙が少ない上、完全に英語への苦手意識ができてしまっているので、特定の悩みはないです。ただ、どうしても日本語の

小説を読みたくなるのが辛い。

- 登場人物が多いと誰がどんな人かわからなくなって話が理解できなくなる。

10. 今後の多読への目標・意気込みを教えてください。また、要望があれば書いてください。

- 冬休みは、たくさん時間があると思うから、たくさん読んで語彙力をつけていきたいです。
 - TOEIC対策になるような、会社内の雰囲気がつかめる絵の多いものがあると嬉しい。単語帳やTOEIC、英検で使われる単語が含まれているかつ絵が多い本は個人的に読んでみたい。
 - 停滞しているので年内に20万語に達せられるようにがんばります。
 - 2.0~2.8のCambridge, OXFORD, Penguin Readersを増やしてほしい！
 - トトロシリーズが全て読みたい。30万語突破できたらしたい。ディズニーシリーズも読みたい。
 - もっとレベルの高い本にも挑戦して、語彙力を増やしていきたいと思う。
 - もう少し高いレベルを読めるようにしたいです。「シャーロック・ホームズ」とか推理物が増えてほしいです。
 - 読んでいたら絶対プラスになるし、実際に自分のためになることはわかったから今後も続けていきたい。普通、英語で書かれた本を読む機会なんてないし、すごい事だから「国際だからこそできる」多読は自信を持って続けたい。
- ※もっとたくさん映画の本を入れてほしいです！
(洋画も邦画も)
- とりあえず20万語読みたい。ONE PIECEの11巻から読みたい。
 - 課題もあって大変だけどその中でも時間を見つけて(特に電車の中)読んでいきたいです。人物の人生(ベッカムやオードリー・ヘップバーンなど)の話が大好きなので種類を増やしてほしいです。
 - 模試マラの範囲でもあるのでその分はしっかり終わらせたい。さっきも書いたけど日本の漫画の英語版はストーリーそのものが面白いので読みたい！
 - とりあえず卒業までに50~60万語いきたいなー。

ワンピースの続き（11巻以降）がほしい！続きを読むが気になるし読んで楽しい！あとコナンも！高校生が興味ありそうなおもしろい本がほしい。（でもレベルが低いと逆に読みづらいからレベルは2.0～3.0あたりがいい）

- ・強化月間は終わったけど少しづつ語数を増やしていくけたら良いと思います。マンガ特有の言い回しとかも覚えられるといいです。（コナンが全巻そろうといいです。）
- ・レベルが低くて語数が多い本を増やしてほしいです。毎日1日に15分でも多読をする習慣をつけようと思います。
- ・忙しいけど1ヶ月で5万ずつぐらいは読みたい。<要望>マンガを増やして欲しい。漫画なら絵があって読みやすい。
- ・9・10月に比べ最近は全然英語に触れてないので、また多読する習慣をつけるべきだと思った。
- ・最近ちょっとサボっていたので、これから色々読む。とりあえず50万語を目標に。
- ・卒業までに!! 100万語必ず達成!! 2年生終了までに100万語にとりあえず近づけること!!

コナンが人気で常に本棚になくて悲しい。とりあえずもっと本がほしい！（2千以上のものなど）レベルが2.5以下くらいの映画の本（1万語くらい）がほしい！

- ・20万語は達成したいです。
- ・冬休みに30万語突破します！
- ・1日1冊から私の場合始めたいと思います！！通学時の電車の中で。
- ・もっともっと読んでスラスラ読めるようになりたい。CANBRIDGEの本を増やしてほしい。②のやつ絵本も増やしてほしい。
- ・コナン・ワンピース以外にも漫画がほしいです。多少は抵抗なく読み始められるので。ここまで欲を言うのはどうかと思うのですが、できれば鋼の錬金術師の英語版を読んでみたいです。
- ・とりあえず20万語!! 余裕があれば25万語。ジブリ・アニメの本。なるべく絵がついていて読みやすく、おもしろい本。
- ・30万語を目指す。2.0ぐらいのディズニー映画の本。

平成22年度実用英語技能検定とTOEICの結果

英語検定	学 年	準1級取得	2級取得	準2級取得			
	H22 3年	4 (12.1%)	21 (63.6%)	33 (100%)			
	H22 2年	1 (3.6%)	21 (75.0%)	28 (100%)			
	H22 1年	—	1 (13.6%)	21 (95.5%)			
TOEIC 3年目標：470	学 年	550以上	470～549	400～449	350～399	349以下	平均スコア
	H22 3年	12	7	7	2	1	545.0
	H22 2年	10	7	7	1	0	538.6
	H22 1年	1	1	8	4	4	402.2

3. 楽読クラブ

3-1. 楽読クラブ前期活動報告

高橋俊平（経済学部：2010年度前期部長）

新入生歓迎会

一週間にわたり早朝からビラを配ったり、午後から多読ルームで新入生の勧誘を行ってきました。そのかいあって、多くの新入生がクラブに入ってくれました。

クラブ生が集まり、新入生歓迎会を行いました。学年ごとに一人ひとり英語で挨拶などをし、交流を深めていきました。

アクティビティ

時間割ごとにアクティビティの班を決め、活動していました。活動内容はブックレポートを行う週、読み合わせを行う週と交互に進行していました。

また楽読クラブの内でどの班がどのような活動をしたかなど、クラブ内の交流をはかるため、活動内容を記録するための日記を新しく設置しました。しかし、あまりうまく機能せずに終わりました。

岡林先生がアクティビティの時間にいらっしゃらないときなどは、上級生がその場をしきり自分たちでアクティビティが進められるようにしていました。発音の練習以外は自分たちで運営していくくらいの活動内容ができていました。これは、力のある上級生が育ってきたことが証明されたのではないかと思います。

ランチタイムトーク

今年度から初の試みで、「オープンな場で昼食を食べながら英語を話そう」ということで始めていきました。

始めたころは1日10人ぐらい集まったりしていましたが、1～2か月もたつと3～4人ぐらいしか集まらなくなってしまいました。約30分の間、日常会話を英語で話し続けるのはメンバーにとって困難なことでした。なので、一日ごとにお題を決めてそれについて英語で話し合う、TOIECに向けたリスニング対策などして、長く続けられるように工夫を重ねていきました。来る人の人数は減ってはしましたが、モチベーションが高い

子は毎週一度必ず参加してくれました。話した分だけ上達していく英語。わずかな時間でも、毎日の積みが上達への大きな一步。その上達への場をランチタイムトークでは作り出させていた感じています。

読み聞かせコンテスト

計2回に分けてクラブ内の予選とクラブ外の生徒を交えた本選が行われました。誰が優勝してもおかしくないぐらいの非常にレベルの高いコンテストになりました。

オープンキャンパス

オープンキャンパスでは毎年紙芝居をしているのですが、今年は始めてパペットショーに取り組みました。三匹の子豚、シンデレラの公演をしました。

台本づくり、演出、人形作りなど、初めてづくしの作業が多く、ほとんどゼロの状態から自分たちだけで作り上げていくこととなりました。途中、同じ名城大学に所属し、人形劇の経験が豊富な児童文化研究会の方々に協力していただきました。人形の動かしかた、舞台づくりなど丁寧なアドバイスをいただきながら、自分たち独自のパペットショーを模索し作り上げていきました。

パペットショーを作りあげていく際、参加メンバーの大半が新入生で、いろいろと経験を積んでいるクラブ生の参加が少ないという状況でした。しかし、経験の少ない新入生達が積極的にパペットショーに取り組んでくれたおかげで、短期間ですばらしいパペットショーを完成させることができました。この経験が新入生を成長させ、英語に対する意識も変えたのではないかと、その後のクラブ活動を見ていて感じとれることがあります。挑戦してみて本当によかったですと思える活動でした。

名城DAY

内容はオープンキャンパスに行ったパペットショーと同じです。がしかし、こちらは観に来られる方の年齢の幅が広いので、時おり日本語を混ぜたりして誰にでもわかりやすいパペットショーをおこないました。

合宿

夏休みに名城大学付属農場で1泊2日の泊まり込み合宿を行いました。2日間の共同生活をとおして、メンバー内での良い絆が生まれました。1日目は、まずドッヂボールで体を動かしながら、初めてあったりするメンバーとの距離を縮めていきました。その後、みんな真剣な顔でディベートの準備をし、取り組みました。内容も前年度以上にレベルが上がっており驚きました。ディベート後は、夕食づくりをしたり、英語でのゲームをして夜中まで楽しみました。2日目はグループごとに読み聞かせを行い、昼食を取り解散となりました。回を重ねるごとに内容がよくなっている合宿を、今後も良い形にもっていき続けていきたいです。

半年間の部長をつとめて思ったこと

僕が心残りにしていることの一つとして、新入生が次第に顔を見せなくなって、いつのまにかやめていってしまった人が、3～4人見られたことです。

新入生でやめていく人の要因の一つとして、クラブ内での交流がうまくいかず、仲の良いメンバーがつくれなかったりしたことではないかと思います。逆に、残って続けている新入生は、合宿・ランチタイム・オープンキャンパス・名城DAYなどの全体の活動に参加し、メンバー内の深い交流が進み、それらによってクラブを続けていく要因になっているのではないかと思います。やめていく人を減らしていくために、新入生は必ずなにかしらの活動に参加させたり、上級生がしっかりと声をかけていくべきだと思います。入ってくれた新入生がやめていかぬように、英語の勉強だけでなく、もっと色んな活動を通してクラブ内の交流がはかれることを今後に期待します。

3-2. 楽読クラブ後期活動報告

平手美帆（人間学部：2010年度後期部長）

1. 大学祭における英語パペットショー

後期は、名城大学Day、大学祭において、英語パペットショーを中心に行った。オープンキャンパス、名城大学Dayは、三匹の子ブタとシンデレラを、大学祭では、大きなかぶのパペットショーに加え、紙芝居のジャックと豆の木を披露した。

台本は多読ルームにある英語の本をもとにセリフを作り、パペットや紙芝居の絵、また必要な小道具等も全て手作りした。ショーでは、効果音等も付けたり、歌を歌ったりと小さなことにもこだわった。三匹の子ブタでは、田代、村上、高橋俊平、シンデレラでは、小柳津、菊岡、熊谷、渋川、平手、の各部員が活動をした。大きなかぶは、宇野、西岡、山田、福島、村上、山本樹里、山本優太、田中、高橋泰斗、平手、各部員が行った。ジャックと豆の木では、小柳津、高橋俊平、田中、田代、平松、平手、の各部員が中心に活動を行った。

大変だったことの一つはパペット作りである。裁縫が上手く出来ないことや、時間がとてもかかるなどの壁に当たりながらも、お互いに手助けし合った。特にシンデレラの場合は、シンデレラや継母、義理姉妹など計8体のパペットを作るのが大変だった。2つ目に、英語のセリフ練習と手の動きである。ただ英語を読めば完成ではなく、発音や暗証さらにパペットが生きているかのように、感情や表現力につけることは大変だった。手の動きは、名城大学サークルの児童研究会かざぐるさんにお願いをし、指導をしていただいた。

英語パペットショーを、見に来てくれた方々は、年代様々であったが、笑って見てくれたこと、また英語の本にも興味を持ってくれた方もおり、成功できたと実感した。英語パペットショーは、初めて行うことで、全て一からの出発だったので不安は大きく、出来上がるまでは苦労の連続で一度は辛いと思ったこともあるが、出来上がった瞬間はやってよかったと心から思えるものとなった。そして、それは英語の面白みや自分が英語を話すときの表現性を上げてくれる良い機会となった。

2. クリスマス会

12月25日にクリスマス会を行った。集まった人

数は約20人。クリスマス会では、赤鼻のトナカイの歌を英語で振付と一緒に歌った。振り付けは、竹田真紀子先生が作ったもの。クリスマス会をやる以前は、みんな歌って踊ることをためらっていたが、クリスマス会では、楽しそうに参加していた。また、竹田先生が作成してくださったクリスマスクイズで盛り上がった。その他、来年の抱負など自分に関わることを英語で一言、一人ずつ発表をした。クリスマス会ということなので、みんなでお菓子や飲み物を持ち寄って、食べたり、家にあるもので使わないものという条件でクリスマスプレゼントを一人ずつ用意してもらい、最後にくじ引きでそれを貰う形をとった。クリスマス会は、歌やダンス、プレゼント交換どれも盛り上がり、大成功だった。

3. 4年生の追い出しコンパ

2月25日に4年生の追い出しコンパを行った。4年生は5人。集まった人数は4年生含め27人。場所は、八事の神戸屋でお屋に行った。はじめに、4年生からメッセージを言ってもらった。4年生の宇野さんは、英語で素晴らしいスピーチをしてくださった。

メッセージの後は、食事をしながら、会話を楽しんだ。最後には、全員で集合写真をとり、4年生に何か残るものとして楽読メンバーから色紙と、4年生の名前とメッセージを英語で刻んだフォトフレームを贈った。

追い出しコンパの準備において、こったのはプレゼントである。色紙は、ただ色紙にメッセージを書くのではなく、画用紙を花弁型に切って、それにメッセージを書いてもらい、貼って花にするというものだった。また、フォトフレームをプレゼントとして選択したのは、追い出しコンパで取った全員の集合写真を入れてもらおうと思ったからである。準備は大変であったが、4年生がすごく感動をしてくれていたので、とてもうれしかった。

4. 春の合宿

3月8～9日と三重県の鳥羽市で合宿を行う。合宿では、メインとして英語のディベートを予定している。今回のテーマは、①Disney corporation gives more dreams to children than soccer. ②Sharks are more dangerous than wolves.の二つである。ディベートは、チーム制

で、Disney team対soccer team、Sharks team対Wolves teamの四チームに分けて行う予定である。チームごとに事前にテーマに沿った英語の本を読み、足りない部分はインターネットを活用するなど準備を当日までにしておく。また、英語を使った伝言ゲームやいす取りゲームなども計画を立てている。その他、観光として、鳥羽水族館が案としてあげられている。

3-3. 楽読クラブ活動を振り返って

小柳津敬央（理工学部）

まず始めに、僕が2年半、主に楽読クラブで行ってきた活動は以下のようです。

1. Book Report（週2回程度）、2. 発音練習、
3. クエスチョニングゲーム、4. 大学祭での紙芝居・ペットショー、5. Oral Interpretation Contest（読み聞かせコンテスト）、
6. 合宿（ディベート）、7. ランチタイムトーク、8. 自主アクティビティ（ディベート）

<入部前>

今は勉強は得意だとは言いませんが、僕は元々、勉強はどの科目も基本的に苦手な方でした。大学1年の専門科目の講義中、「勉強を得意にしたいなら、たくさん本を読むべき」とある先生が仰られました。本を読むのは嫌いでしたが、騙されたと思い無理やり自分で本を読むよう努力をしてきました。するとあるとき、本を読むのが苦にならず、いつしか本の虫になっていました。驚異的なスピードで何冊も本を読み続けました。すると勉強も暗記の勉強から、理解する勉強へと変わっていきました。

<入部のきっかけ>

僕が楽読クラブに入ったきっかけは、自分の発音に違和感を覚えていたからです。元々、英語は好きで自動的に大学に入っても勉強は続けていました。しかし、CD等から聴こえるネイティブの発する音と自分の出す音の違いがどうしても埋まらずに悩んでいました。そこで、楽読クラブで発音の指導をしていた岡林先生と出会い、クラブのことを聞き、入部することに決めました。

<主な活動内容>

楽読クラブの主な活動は1. Book Reportと2. 発音練習、3. クエスチョニングゲーム、4. Oral Interpretation（読み聞かせ）がメインです。多読の有効性については、日本語の読書経験から何の疑いもなく入部してすぐに実行しました。ただ、読むだけではなく、みんなに報告するするBook Reportは、分かりやすく要約する必要があり、まとめるのは大変でした。しかし、要約す

る必要があるので本当に自分が読んだ本について理解しているかという確認にもなりましたし、まとめる力が付いたと思います。

問題の発音ですが、アクティビティの練習の時間は真剣に取り組みました。中学、高校、大学と音の一つ一つについて出し方を教えてくれる先生がいなかったので、岡林先生には本当に感謝しています。今でも多々問題は残っていますが、基本的な音の出し方はドリルを参考に見直すことができるので、修正していこうと思います。

<大学祭での紙芝居、人形劇>

<Oral Interpretation Contest>（読み聞かせ大会）

これらの活動は外部の方々への発信の機会でもありますので、楽しい部分もありますが、下手なものは出せないと想い準備に多くの時間をかけました。準備は題材選びから、台本作りまで自分たちで行いました。役者になって英語を読む機会は滅多にないので、どのように読んだらいいか先生にアドバイスを頂きながら、修正していきました。また人前で発表し喜んでもらうことで、自信になりました。

<ランチタイムトーク>

<自主アクティビティ>（ディベート）

僕自身、卒業研究のため普段のアクティビティに参加する時間があまり取れませんでしたが、その分、ランチタイムトークと自主アクティビティの時間は貴重でした。

ランチタイムトークでは何度も問題を抱えました。トピックが曖昧であったり、皆が興味を持てなかつたりと、話を続けるのが困難でした。また講義の関係もあり、少しずつ人数が減っていき、悩みました。しかし、クラブで受けるテスト（cambridge、TOEIC）対策で活動内容を変更したところ、参加人数が増えました。

あくまで憶測ですが、このことから具体的に何か目標、目的がしっかりしていないと、人間は行動できないのかなと思います。そこで、今後続ける後輩たちには、今年度の反省をしっかり生かして、活動を続けていって欲しいと思います。

学部・学科を変えて進学—英語教育への関心と英國の大学院留学に至った経緯

僕は大学4年間、理工学を専攻してきましたが、決して理工学が自分に合わなかったとは思っていません。物理学、数学は今でも興味を持っています。

しかし、楽読クラブの影響が僕の決断を大きく変えました。多読の本には、Non-Fictionの本がたくさんありますが、その中で自分が今まで知らない、さまざまなことを学びました。EgyptやBiology, Martin Luther Kingなど、様々な本が自分の人生について考えさせてくれる時間を与えてくれました。そして、興味を持って読書（学習）を続けることができました。また、クラブには英語を楽しく勉強できる仲間がいて、様々な活動を行ってきました。僕が英語教育への関心をもったのは、クラブ活動を続けるなかで、さまざまなことを体験してきたからだと思います。理由は一つではありませんが、その中でも特にクラブの仲間と英語を学ぶ（知る）ことの喜びを共感できたからだと思います。楽読クラブにはさまざまなレベルのメンバーがいます。レベルという表現は適切ではないと思いますが、事実かと思います。そんな彼らと活動するなかで、質問を受ける機会が何度かありました。発表のために指導する立場になることもあります。そのような機会に、うまく教えられることもあれば、うまく伝えられず、苦労することもありました。ときには、教えた子が活動に来なくなるという危機的状況にまで追いやってしまったことがあります。自分では一言一言、適切に教えたつもりになっていても、ある一言が相手のモチベーションを下げてしまうのだと気づいたときにはいたたまれない気持ちになりました。そのような経験から、ただ教えるだけでなく、教え方も重要なだと感じ、英語教育に強く興味を持つようになりました。

僕がイギリスへの関心が強くなった理由はすごく単純でした。アクティビティ活動後、先生に発音練習を見てもらったときのことです。「アメリカの発音だとうけど、イギリスの発音だとちょっと違って…。」それまで特に違いを区別することなく英語学習をしてきましたが、音の出し方まで違うというのは知りませんでした。また、日本の高校課程まではアメリカ英語であると聞き、他の子と違うことを知って、使えたら面白いだろうと

いう単純な思いから、違いに注意し、学習を進めました。そして必然的に、留学はイギリスへと決断しました。

楽読クラブは英語学習のみでなく、クラブ活動ですので英語以外にも悩む時期もありましたが、それもまたいい経験だったと思います。お忙しい中、クラブの指導をして下さった岡林先生にはとても感謝しています。また、来年度以降、後輩の皆さんのが活躍を期待しています。

3-4. 3年間の多読での勉強

宇野 朝貴

私が英語を勉強し続けることができたのは、英語をより自然な形で身につけようと心がけたからだと思います。「自然に」と強調したのは、単語帳を丸暗記したり、ひたすら英文法を教科書で勉強するのでは頭に入りにくく、また使いものにならないからです。しかし自然にといっても、英語の勉強を始める前、私も日常生活ではそもそも生の英語に接する機会は皆無に等しい状態でした。当然、私も自然に英語を身につける最も有効な方法は海外で生活することだと思います。ただし、その過ごし方によっては効果に大きな差異が出てくることは否めません。また、私の場合のように生まれてから20年経ってから勉強を始めるのでは、0歳から英語使い生活を始めているネイティブスピーカーに追いつくことは、勉強時間数を考えても極めて困難という事実があります。つまり、この時間のハンディキャップを埋めるには短時間でより多くのことを頭に入れるしかありません。しかもそれを自分に合った、無理のない、自然な形で行う必要があります。私の場合、最初に英語を学ぼうと思ったきっかけは、海外版テレビゲームの英語字幕を理解したかったからです。画面に出でくる主人公や他のキャラクターの英語字幕を見て、単語を調べながら進めていくうちにそれが習慣化していきました。この時、出てきた字幕の中に面白い、使えそうなものをノートに書き取るようになり、また不明な文や単語があれば、これも同じくノートに書き写すようにしました。あらためてノートを見てみると、中身は自分が役に立ちそうだと思った文章、面白かったセリフ、わからなかった文章で埋められていて、暇なときに見返しています。こうした文章は仮に書き写さなくても頭に残ることが多いですが、自分の手で書き取ることでより鮮明に記憶に残るだけでなく、紙に書くことによって後で確認することができる所以語学学習には有効な手段だと言えます。また、テレビゲームを利用したことの良い点を挙げるとすれば、それは映像を学習に取り入れられることだと考えています。これは、映画やドラマについても同じことが言えると思いますが、映像、音声が加わることで、見た文章がより印象的になり、記

憶に残りやすくなるからです。

私の場合自分で勉強を始めて半年ほどたったときに楽読クラブに所属することになりました。それまで私は英語の勉強は専らゲームか、ビデオ(海外映画、ドラマ)だったのですが、この時初めて英語図書を使った多読というものを知りました。楽読クラブでは毎週「アクティビティー」を行っており、毎回のアクティビティーは近況報告、発音練習、読んできた本のレポートを基本としていました。私はもともと読書が苦手な方だったので、初めのうちは本を読むということに抵抗がありました。そもそもどんな本が自分に合っているのかがわかりませんでした。しかしひとりあえず最初のうちはレベル2~3程度のバイオグラフィーなどに手をつけ、しだいにOxford, Cambridgeなどの小説へとシフトしていました。中でも私が気に入っていたのがCambridge Readersのレベル5、6の本で、内容はアドベンチャー、サスペンス、ロマンスなどのフィクションです。私がこのシリーズを好きな理由は完成度の高さもさることながら、様々なジャンルがあり、いろいろな種類の話を楽しめることです。中には息をのむような展開のある話や、泣きそうになるくらい感動する話もありました。1冊3万語程度で絵や写真はないので難しそうに見えますが、手に負えないほどではなく、むしろ読み進める過程で新しい単語や、表現を学ぶことができるので良いと思います。因みに私は読んでいてわからなかった箇所は先生に質問して解決することにしていました。また、本を読むときでも役に立ちそうな文や単語をノートに書き取ることは継続して行っていました。アクティビティーで使うブックレポートの作成の際にはこうした過去に調べて、書き写した文や単語が役に立つことがしばしばあったことも加えておきます。余談ですが、本は大きく分けてフィクション、ノンフィクションの2種類に分けられると思いますが、クラブの中で一時期どちらが英語学習に役立つかというのが議論的になったことがあります。私個人の意見からすればそれは何を得たいかによると思います。つまり、自分が日常会話で使えるような多様な英語表現を学びたいならフィクションを読むべきですし、ある分野における専門的な単語や、それらを使ったより難しい表現を学びたいならノンフィクションを選ぶべきです。レベルにもありますが、一般的にノンフィ

クションの方が難しいと言えるでしょう。私としては語彙力に自信のない人はまずフィクションから手をつけることをお勧めします。

クラブ活動での最も大きな収穫は発音を学べたことといっても過言ではないかもしれません。確かにセリフや文章を書き写すことでボキャブラリーを増やしていく事は可能ですが実際にそれを声に出し、会話の中で使えなければ学習の意味が半減するだけでなく、実際の生活の中で声に出して英語を使用することが最も有効な記憶方法であり、学習方法だからです。私はクラブに所属してしばらくしてから、発音の重要さを感じました。いくら頭に詰め込んでも、それを正確に出力しなくては相手に伝わらないばかりか、発音を知らないまま学習する英語は本当の英語学習ではないとさえ思いました。一度発音の重要さに気付いた私は焦燥感にとらわれましたが、時間をかけてでもマスターしていくしかないと思いました。私が非常にラッキーだったのは身近に発音に詳しい先生がいたことです。それ以来、英語の発音の仕方、発音記号の読み方など毎日のように多読ルームの岡林先生を訪ねたことを覚えています。

楽読クラブに入つてもう三年近くが経ちますが、自分の英語力がどこまで上達したのかは自分では把握しづらいものがあります。未だに海外映画を字幕なしで見るには無理がありますし、ネイティブの会話の内容が聞き取れることも多々あります。しかし、楽読クラブの活動の中にはTOEIC受験や、PET受験など実力を客観的に測る機会がたくさんあり、それにおいてはそれなりの成績を残すことができたと思っています。最後にこのクラブでお世話になった岡林先生をはじめ、一緒に時間を過ごしたクラブのメンバーに感謝の意を表します。

3-5. 楽読クラブ部員の学習成果の検証

岡林 園（嘱託英語講師）

4月に1年生8人と上級生4人、そして6月に1年生2人が入部して、活動をはじめました。週1回のルーティーン活動、(毎回の What's new? (近況報告) と Pronunciation practice) に加えて、第1週 Oral book reports、第2週 Group interpretation、第3週 Oral book reports、第4週 Questioning game—を行いました。今年度新しくLunch time talk と、4限・5限の自主活動を始めました。また、7月のオープン・キャンパスのため、Puppet show (英語人形劇) の練習を5限6限に上級生を中心に部員が自主的に行いました。

夏休みも、大学夏季休暇以外は毎日活動をつづけ、9月には恒例の農学部農場セミナーハウスでの合宿は

特にディベートを中心に行いました。9月19日には名城デイにおいてPuppet show、を好演し、11月には大学祭で、Puppet show、Paper story show、そして、お勧め本のポスター展示も行いました。

さて今年も例年どおり、上記の活動による学習効果をはかるため、6月と12月にTOEICを受験してもらいました。

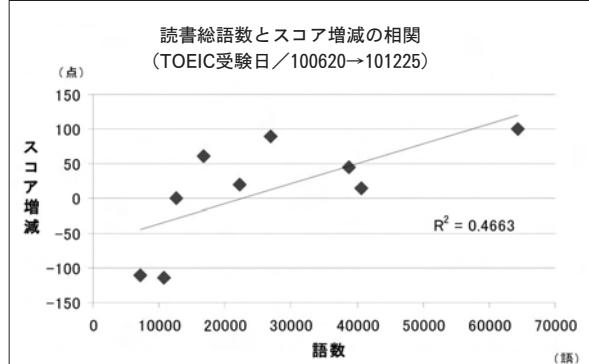
TOEICでの検証、

2008年の楽読クラブ創立より活動を続けて3年目となる部員もいますので、検証は1年生と複数年活動を続けている上級生とに分けておこないました。

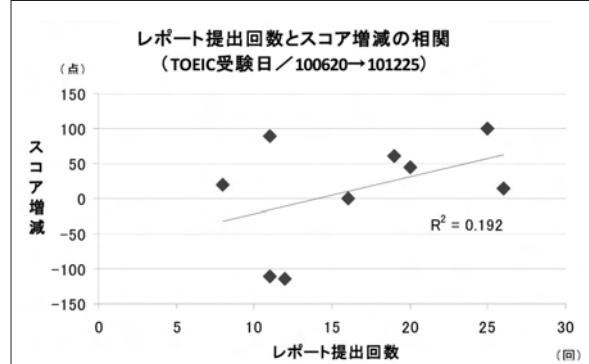
- (1) 1年生の2010年6月から12月の半年間でのTOEICの伸び幅、①. 読書総語数、②. レポートの提出回数(枚)、③. アクティビティの出席回数、の3項目との相関をみてみました。

	2010 06/9	2010 12/5	2010/6/19→ 2010/12/25	～2010/ 12/25	～2010/ 12/25	～2010/ 12/25
受験者	TOEIC IP Score (Total)		スコア増減	レポート提出数	期間別 総語数	Activity 出席回数
O	330	430	100	25	64315	31
P	295	310	15	26	40594	31
Q	290	290	0	16	12528	23
R	245	305	60	19	16666	23
S	410	295	-115	12	10777	10
T	445	335	-110	11	7221	13
U	400	420	20	8	22147	22
V	385	430	45	20	38792	22
W	470	560	90	11	26987	27
平均	363.3	375	11.7	16.4	26669.7	22.4

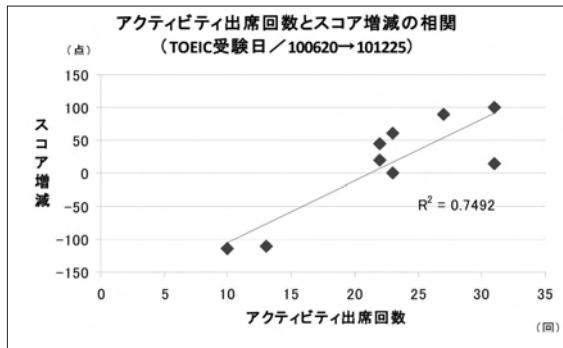
- ① TOEICスコアの増減（伸び幅）と
読書総語数との相関



- ② TOEICスコアの増減（伸び幅）と
レポート提出回数（枚数）との相関



③ TOEICスコアの増減（伸び幅）と
アクティビティ出席回数との相関

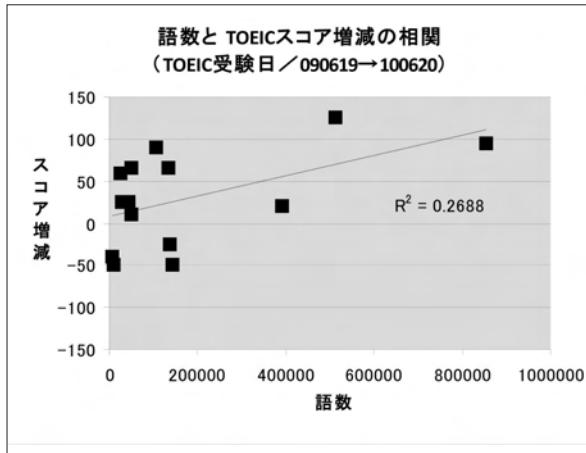


TOEICのスコアの増減（伸び幅）は① 読書総語数と③ アクティビティ出席回数とに相関がみられ、特に③ アクティビティ出席回数とに強い相関 ($R^2 = 0.75$) がみられます。しかしTOEICの伸び幅の平均スコアは11.7点で、十分な点数とは言いがたく、断定的なことは言えないと考えます。

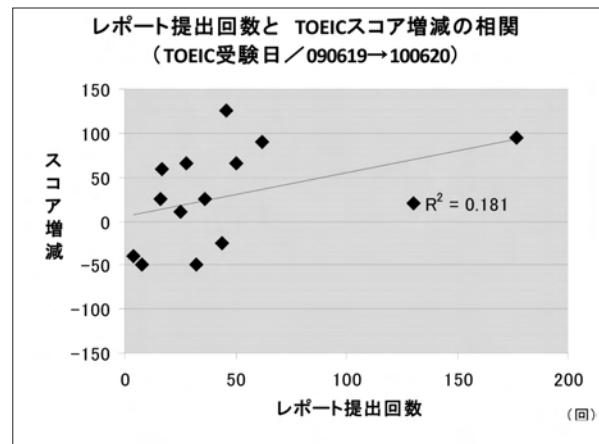
(2) 上級生について、'09年6月から'10年6月までの1年間のスコアの増減（伸び幅）と上記の3項目との相関を見てみました

	2009/ 6/20	2010/ 6/19	09/06/20→ 2010/06/19	~2010/06/19	~2010/06/19	09/06/20→ 2010/06/19	~2010/06/19
受験者	TOEIC IP Score (Total)		スコア増減	期間別 読書語数	レポート 提出回数	スコア増減	Activity 出席回数
A	350	300	-50	7951	8	-50	16
B	325	350	25	27183	16	25	16
C	300	390	90	105218	62	90	45
D	345	305	-40	4811	4	-40	9
E	445	505	60	25974	17	60	21
F	425	490	65	134775	50	65	41
G	425	490	65	49162	28	65	26
H	360	385	25	42240	36	25	22
I	455	465	10	50639	25	10	43
J	515	465	-50	142821	32	-50	27
K	755	880	125	511729	46	125	71
L	605	700	95	855201	177	95	88
M	570	545	-25	138105	44	-25	31
N	550	570	20	391933	130	20	64
平均	458.93	488.57	29.64286	177695.9	48.21429	29.642857	37.142857

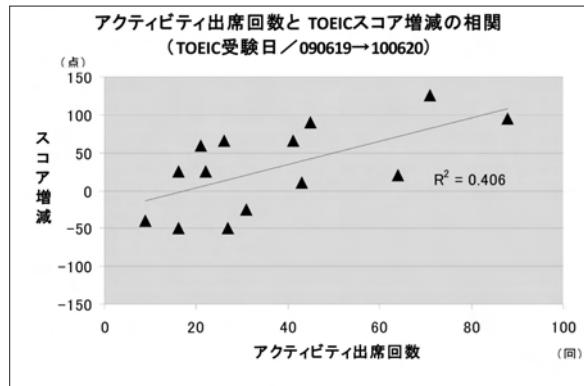
① TOEICスコアの増減（伸び幅）と
読書総語数との相関



② TOEICスコアの増減（伸び幅）と
レポート提出回（枚）数との相関



③ TOEICスコアの増減（伸び幅）と
アクティビティ出席回数との相関



① 読書総語数と② レポート提出回（枚）数との両方に相関はあまり見られず、アクティビティ出席回

数との相関 ($R^2 = 0.406$) が 3 項目のうちでは一番強く見られました。しかしこのTOEICの 1 年間でのスコアの伸び幅も平均では 30 点にとどまり、これも十分な数値とはいえないかと思われます。

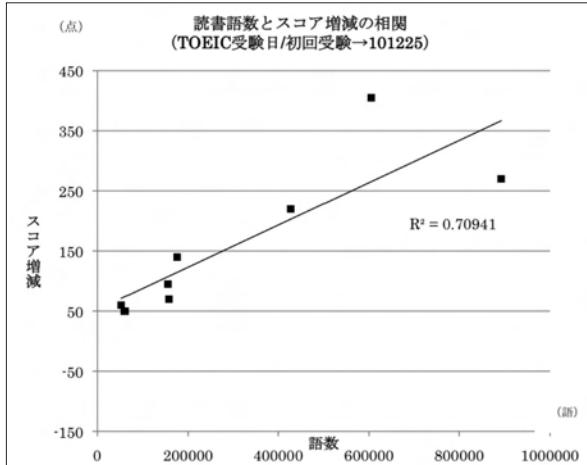
(3) 複数年活動している上級生について、TOEIC第 1 回受験から 2010 年 12 月までの期間での増減（伸び幅）と上記の 3 項目との相関を見てみました。

部員の活動年数の内訳は、2 年半の部員 4 名、丸 2 年の部員 2 名、1 年半の部員 2 名でした。

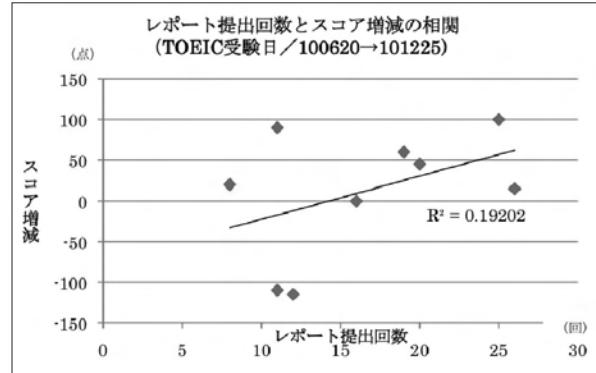
合計 8 名の第 1 回目の受験の平均点は、439 点、2010 年 12 月の平均点は 603 点、スコアの増減（伸び幅）の平均が、163.8 点となりました。その間の読書総語数は平均 300,000 語でした。

受験者	TOEIC IP Score (Total)		2010年12月 -初回受験	~2010年12月			
	初回受験	2010年 12月25日		スコア増減	レポート 提出回数	読書総語数	アクティビ ティ 出席回数
A	2008年6月	245点	385点	140	90	175460	61
B	2008年6月	460点	865点	405	49	604729	80
C	2008年12月	430点	490点	60	26	52766	47
D	2008年12月	545点	815点	270	193	893042	113
E	2008年6月	445点	540点	95	30	155077	33
F	2008年6月	445点	665点	220	146	427615	70
G	2009年6月	515点	585点	70	37	157424	39
H	2009年6月	425点	475点	50	35	59940	36
平均点		439点	603点	163.75	75.75	315756.63	59.875

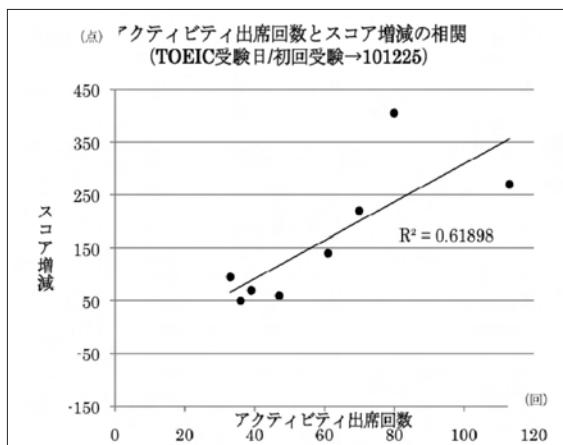
① TOEICのスコアの増減（伸び幅）と
読書総語数との相関



② TOEICのスコアの増減（伸び幅）と
レポート提出回数（枚数）との相関



③ TOEICのスコアの増減（伸び幅）と
アクティビティ出席回数との相関



①の読書総語数との相関は $R^2=0.7$ で、かなり強い相関が見られました。2年、2.5年の期間の読書を続けて初めて読書総語数との相関が見られるようになりました。

②のレポートの提出回(枚)数との相関は、ほとんど見られませんでした。

③アクティビティとの相関は $R^2=0.6$ となり、①の読書総語数に次いでかなり強い相関が見られました。

結論

今までの2年間の結果もそうでありましたが（参照5-2-2）、今回の(1)、(2)、(3)、の全てを通して見てみれば、TOEICのスコアの伸びはアクティビティの出席回数に一番強い相関をしめしているといえると考えます。言い換えれば多読にくわえて、それに関した多くの、アクティビティを行うことにより、インプットの効率をあげることができると考えます。

豊田高専での先行研究によれば60万語から70万語ほど読まなくてはTOEICのスコアに明らかな伸びは見られないとのことでしたが、この楽読クラブのデータによれば、平均約30万語の読書量でも、コミュニケーション的なアクティビティを加えることにより、TOEICのスコア平均で、160点ほどあげることができたといえると思います。多読プラス、コミュニケーション・アクティビティによって、大学の教養のように1年、2年の短期間でも効率よくインプットをおこなうことができ、楽しく学習効果を上げて、英語力を伸ばすことが可能であると考えます。

楽読クラブ員について

昨年の宇野朝貴（参照3-4）と、神野阿稀の2名に引き続き、2010年度もTOEICの得点730点以上で2名の部員が学長表彰を受けることになりました。

理工学部の4年生、小柳津敬央君（参照3-3）と人間学部3年の平手美帆さん（参照3-2）です。小柳津君は、楽読部員では最高の読書総語数893,000語を読み、TOEICの得点は830点に達することができました。昨年度の宇野君の880点には達しませんでしたが、これは専攻の学部の違いかと考えます。TOEICの性格上このテストは、経済学部の専攻で経済的な内容に強い宇野君に有利であるのに対して、理工学部の機械専攻の小柳津君には高得点になるほど少しハンデがあるのではと考えます。このような素晴らしい先輩に刺激を受けて、下級生の部員も先輩に習い、多読活動を通じて、素晴らしい経験をしてくれることを願っております。

今年度で楽読クラブは多読の検証の役目をおわり、新しく正規の部になる方向に進むことになります。これほど一生懸命に勉強し活動できる学生はめったにはいないのでと思われますので、私の後任の竹田先生の指導の下、きっと立派に自主的活動を進めて、素晴らしい部へと変身を遂げてくれることと確信いたしております。素晴らしい学生の皆さんに囲まれて3年間をすごすことが出来たことを大変に感謝しております。

4. 検証【データ資料】2010年度多読教育の実践状況

竹田 真紀子（英語嘱託講師）

4-1. 多読ルームの基本情報（平成23年2月28日現在）



場 所：天白キャンパス共通講義棟南3階（約56m²）

可児キャンパス2号館2501教室（約30m²：2010年9月末開設）

蔵 書 数：24,791冊

（天白：14,524冊、八事：2,774冊、可児：3,733冊、附属高等学校：3,677冊）

八事・附属高等学校はブックトラックで貸出

利用実績：利用者数 38,708名

貸出冊数 84,248冊

備 品：図書館総合情報管理システム（Lib Max）用PC：2台、同返却専用機PC：1台、

液晶テレビ：1台、DVDプレーヤー：1台、コピー機：1台、

蔵書点検用ハンディーターミナル：1台、カラーレーザープリンター：1台

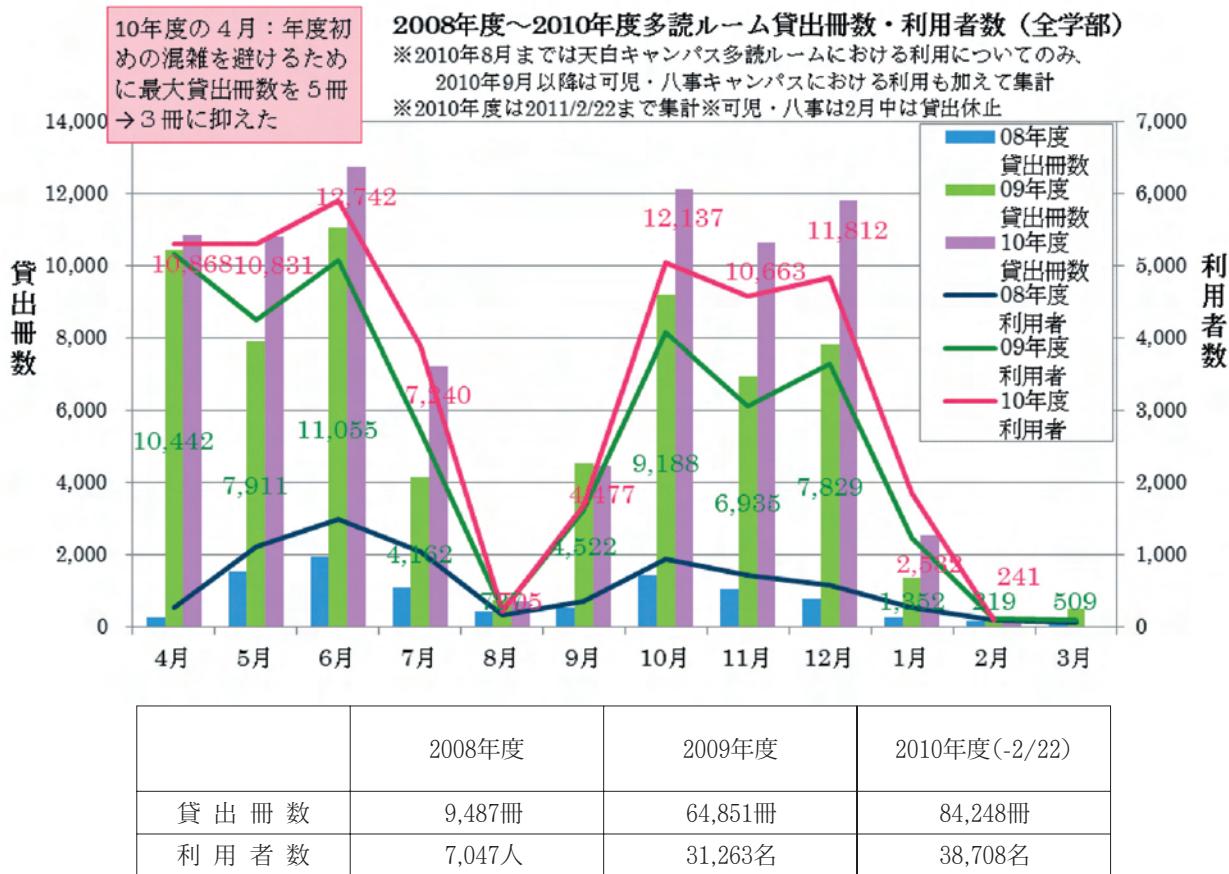
スタッフ

多読アドバイザー：2名（嘱託英語講師：2010年度4月より2名体制）

多読ルーム支援スタッフ：2名

多読ルーム学生アルバイト：4名

4-2. 多読ルーム貸出冊数及び利用者数 (2008.4.22~2011.2.22)



2010年度天白キャンパス利用実績 (4～6月、10～12月：休み期間を除く)

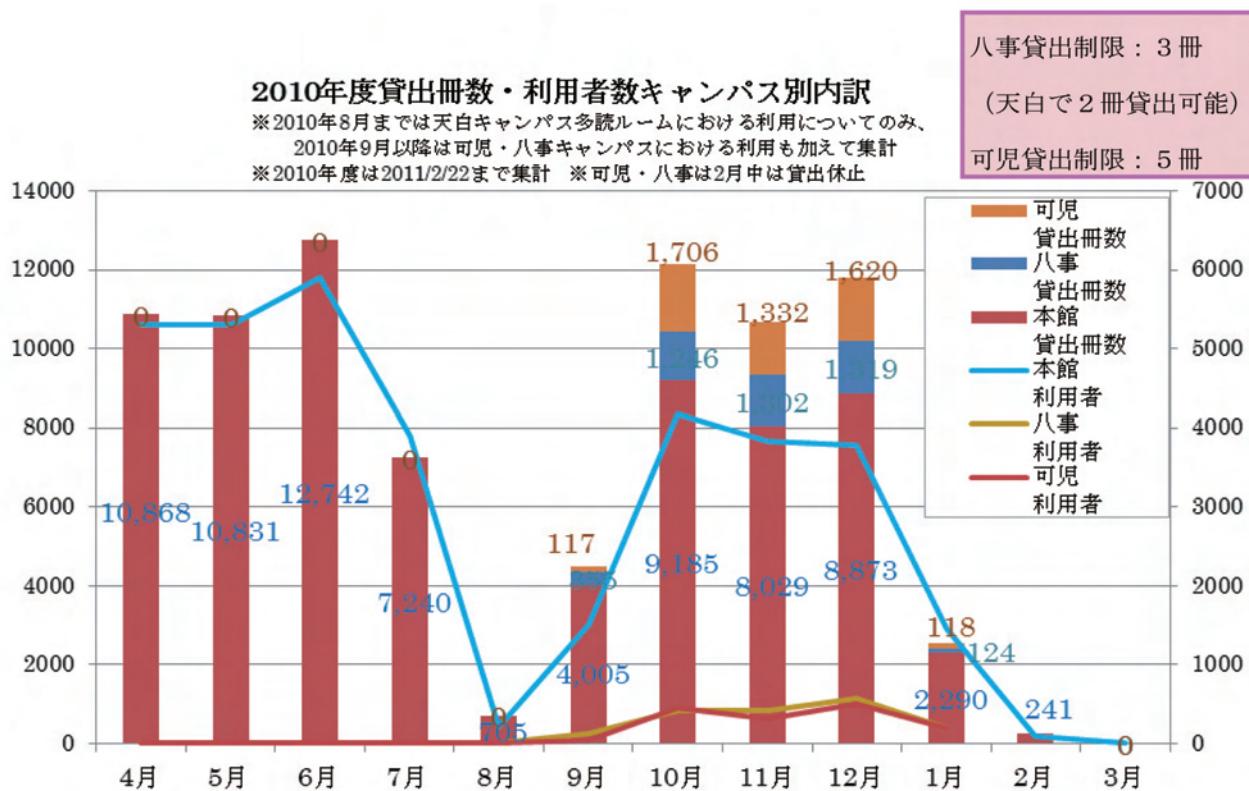
	2008年度	2009年度	2010年度(-2/22)
貸出冊数	9,487冊	64,851冊	84,248冊
利用者数	7,047人	31,263名	38,708名

2009年度に多読ルームが共通講義棟南館3階に移設され、貸出冊数、利用者数ともに飛躍的に伸びた。その要因は、1) 授業科目のレベルごとの読書量の目標設定、2) 全学部の学生が行き交う南棟に移設されたことによる全学共通教育で学ぶ学生以外の利用者、教職員の利用者増加（名城大学多読プログラム報告書参照）であった。2010年度においても、4月に貸出制限を行っていた（通常5冊→3冊）にもかかわらず、実績はさらに伸びている（特に4～7月）。今年度さらなる利用促進のため様々な取り組みをしてきた結果である。以下に実績増加要因となった取り組みについて示す。

2010年度利用実績増加要因

- 1) 天白キャンパスの全学共通教育4学部1年生全クラス（52クラス）と希望する他学部の英語クラスへの多読ルームツアーの実施（4月1～3週目）
- 2) 様々な多読コンテストの開催による多読への動機付け
- 3) ハロウィーン・クリスマスなどのイベントの開催による多読への動機付け
- 4) FD活動：英語教員研修会(METS)での多読活動の紹介
- 5) 学生の要望の反映（ご意見箱の設置）
- 6) 全学共通教育英語プログラムハンドブックで多読ルームや多読プログラム（各レベル別読書量等）についての教員への周知の徹底

4-3. 可児・八事キャンパス貸出冊数及び利用者数 (2010.9~2010.1)



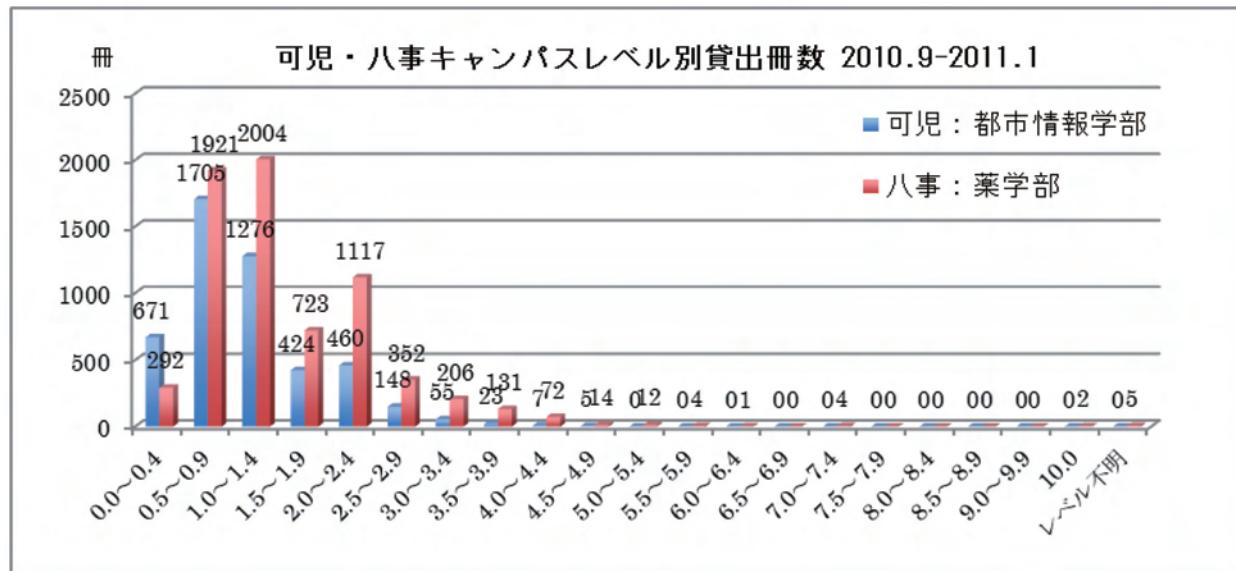
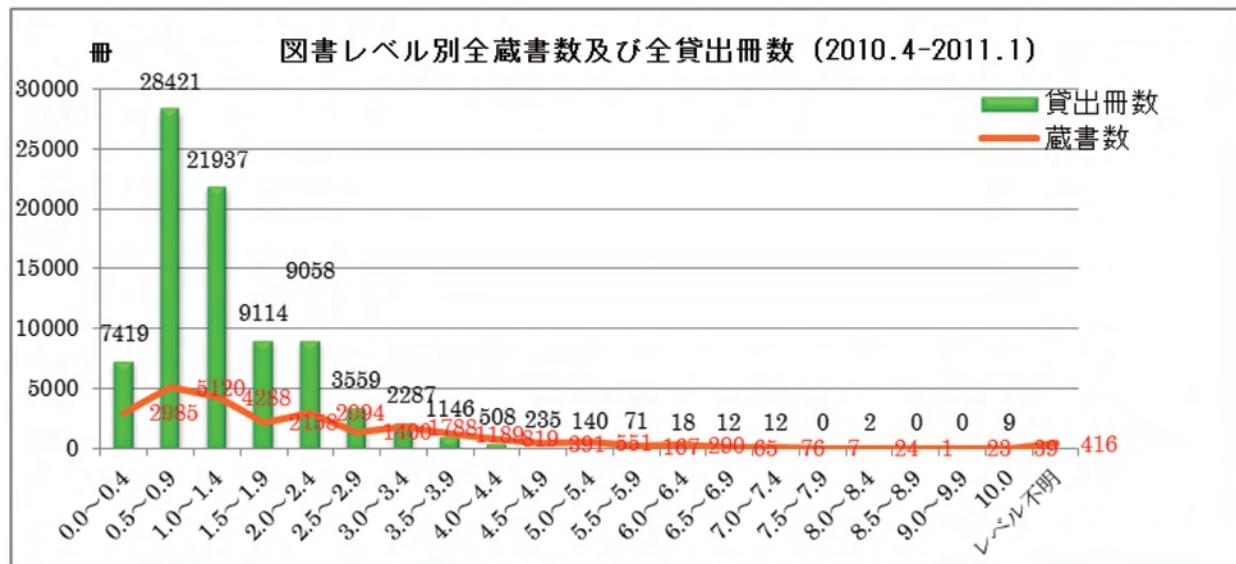
2010年度天白キャンパス利用実績 (10~12月: 休み期間を除く)

	八事	可児
月貸出平均冊数	1,289冊	1,553冊
月平均のべ利用者数	475名	420名
月平均読書冊数/名	4.8冊	6.2冊

(八事登録学生数: 約270名、可児登録学生数: 250名)

八事は貸出制限が3冊であるため制限が5冊の可児よりも一人当たりの月平均読書冊数は少ない傾向にある。

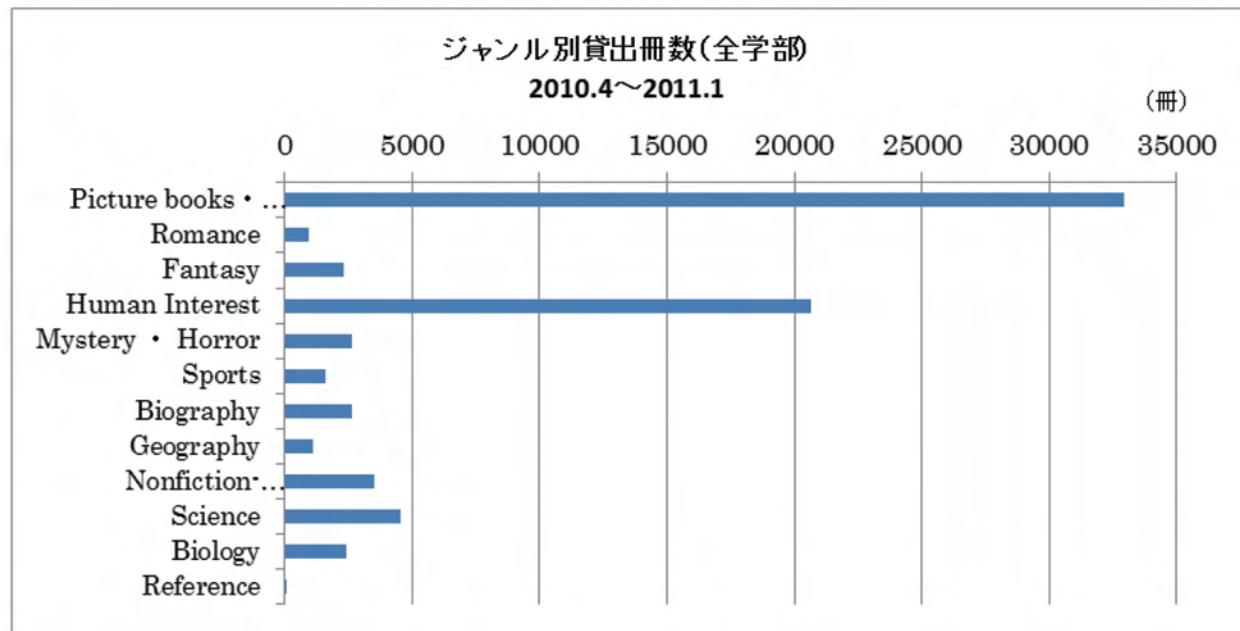
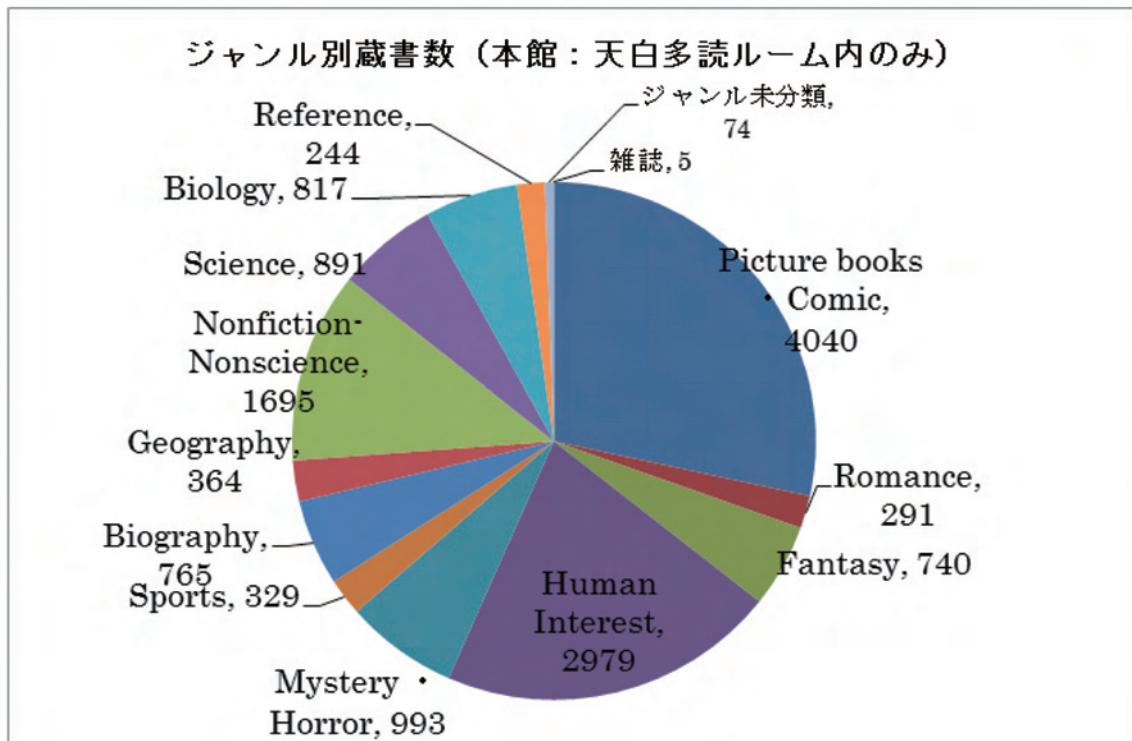
4-4. 図書レベル別貸出冊数及び蔵書数



全体としては、レベル0.0～2.4までが中心である。特に0.5～0.9次いで1.0～1.4までの本が読まれている。これは、学生のレベルにあった本を読む指導の徹底によるもので学生の読む力を反映している。

キャンパス別にみると、可児キャンパスは全体の傾向とほぼ同じで、レベル0.5～0.9の本を中心にやや易しい本が読まれている。八事キャンパスは、中心がレベル1.0～1.4でレベル2.0以上の本もよく読まれている。9月より可児・八事の貸出データ管理がはじめられたことによりキャンパス別の学生の読書レベルがわかってきた。今後はこのデータをもとにさらに学生のレベルや学生の興味関心に合わせた蔵書計画・整備をしていく必要がある。

4-5. ジャンル別貸出冊数及び蔵書数（2010.4～2011.1）



2つのグラフを比べるとジャンル別貸出冊数とジャンル別蔵書数の割合はほぼ比例している。よって学生の嗜好にあった蔵書整備がある程度整いつつあるということができる。しかしサイエンスのジャンルの本は貸出冊数に対して蔵書数が少ないのでサイエンス関係の本の整備が必要である。

4-6. 2010年度ベストリーディング（平均貸出回数/冊）1位～16位

順位	平均 貸出 冊数	総貸出数	蔵書数	書名	出版者	レ ベ ル	語 数	ジャンル
1	22	65	3	A Pet for a Princess (Step Into Reading Step 2)	Random House	0.7	193	Picture books・Comic
2	21	82	4	Cinderella (Little Golden Book)	A GOLDEN BOOK	1.2	1118	Picture books・Comic
3	19	58	3	THE FOX AND THE CROW.	Thomas Nelson & Sons Ltd.	0.5	311	Picture books・Comic
3	19	57	3	Sealed with a Kiss (Step Into Reading Step 2)	Random House	0.5	232	Picture books・Comic
3	19	56	3	Bertha. (Fast Forward Level 10)	Thomson Learning	0.5	400	Picture books・Comic
3	19	56	3	UP, UP, AND AWAY!	Disney Press	1.0	848	Picture books・Comic
7	18	71	4	Spirited Away 2	Viz Communications	1.0	1420	Picture books・Comic
7	18	71	4	Go, Stitch, Go! (Step Into Reading Step 2)	Random House	0.6	296	Picture books・Comic
9	17	69	4	A Fright in the Night (Oxford Reading Tree)	Oxford	0.6	480	Picture books・Comic
9	17	69	4	Rotten Apples (Oxford Reading Tree)	Oxford	6	465	Picture books・Comic
9	17	69	4	The Laughing Princess (Oxford Reading Tree)	Oxford	冊 パ ック	470	Picture books・Comic
9	17	69	4	Christmas Adventure (Oxford Reading Tree)	Oxford	冊 パ ック	466	Picture books・Comic
9	17	69	4	The Go-kart Race (Oxford Reading Tree)	Oxford	冊 パ ック	475	Picture books・Comic
9	17	69	4	The Shiny Key (Oxford Reading Tree)	Oxford	冊 パ ック	490	Picture books・Comic
9	17	69	4	Guess How Much I Love You	Walker Books	1.0	375	Picture books・Comic
16	16	407	25	The Big Test. (Foundations Reading Library (Level 5)	Cengage Learning	1.1	1126	Human Interest
16	16	65	4	Mickey's Handy Helpers	Disney Press	1.0	976	Picture books・Comic
16	16	405	25	The Bear's Mouth.(Foundations Reading Library (Level 5)	Cengage Learning	1.1	1670	Human Interest
16	16	381	24	I Spy. (Foundations Reading Library (Level 4)	Cengage Learning	0.9	1284	Human Interest
16	16	378	24	Who's Best? (Foundations Reading Library (Level 5)	Cengage Learning	1.1	1606	Human Interest
16	16	391	25	Where's Lorena? (Foundations Reading Library (Level 5)	Cengage Learning	1.1	1637	Human Interest
16	16	62	4	Tinkers Island (Penguin Readers)	Pearson Longman	0.8	957	Human Interest

今年度は人気のディズニー関係の本の整備をしたこともあり、ベスト7のうち5タイトルはディズニーの本である。また9位のOxford Reading Treeのシリーズは6冊セットのパックである。16位のセンゲージラーニングのFoundation Reading Libraryのシリーズは、在庫数が多いのでベスト10位には入っていないが、各タイトルともに380～410回の貸出回数で広く多くの学生に読まれていると言える。レベルの幅は、0.5～1.2までである。

5. 学会発表等

5-1. 中部地区英語教育学会石川大会 / 大学英語教育学会(JACET)月例研究会(招待講演)

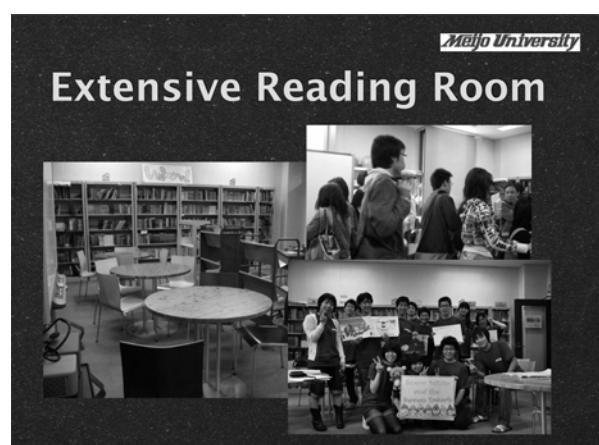
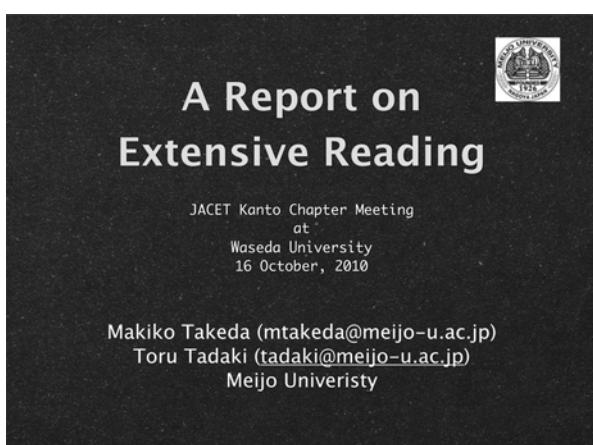
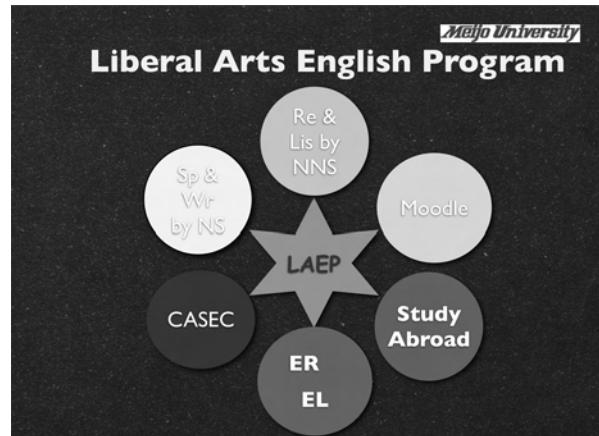
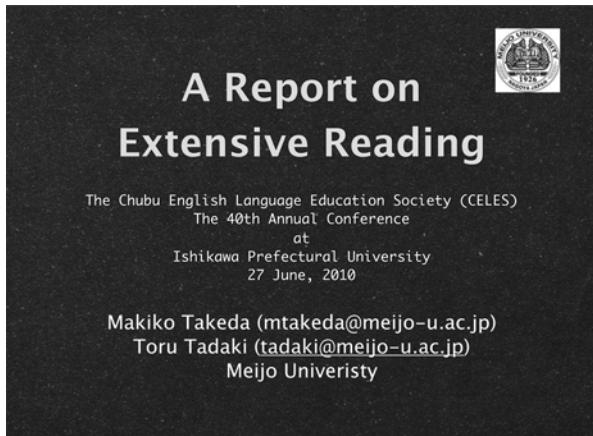
A Report on Extensive Reading 只木 徹 (学長室)・竹田真紀子 (嘱託英語講師)

2010-2011 JACET Kanto Monthly Meeting

参加費無料 主催:JACET関東支部月例研究会

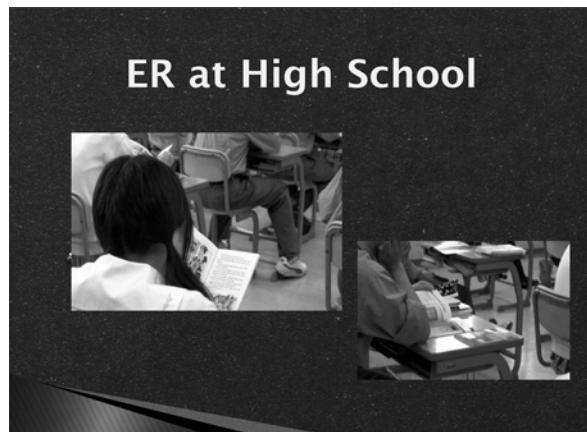
お問い合わせ先:JACET関東支部事務局

日程	時間	発表者	タイトル
2010年10月16日(土) 会場: 早稲田大学 早稲田キャンパス 16号館 606教室	17:00-18:00	名城大学全学共通教育グループ (竹田真紀子先生・只木徹先生)	「英語多読プログラムの実践」



Books for ER

Meijo University



Extensive Reading Log

Meijo University

Tadoku-News

Meijo University

*******Recommendation** *****
from T.Sugiyama
PENGUIN READERS (LEVEL 2)
"Ghost in the Guitar"
YY 3. 1000

This is a kind of horror story. At first I didn't like such a kind of story. When I started reading this book, I wanted to know the development of the story. I like the sound of Gitar. I made a band and played the guitar in my school days. If you liked music, I'm sure you like this book.

* PENGUIN READERS (LEVEL 2)
"Nursing Hill"
YY 2.4. 1400

This book is different from ordinary love story. As you know, this story was made into a screen a few years ago. I enjoyed this book, though I haven't watched the film. At the beginning of the story, I thought that the names of the characters and places were difficult to understand, but not so confusing to you if you don't know them. You should read this book. It is suitable for pre-intermediate.

LAEP: ER Questionnaire

Meijo University

“役に立った”（488件）との意見

楽しく英語を読めた。単語力が身に付いた。
英語に触れる時間が増えた。
目に英語が慣れてきた。
英語を読むスピードが上がった。
知っている話を英語で読むとまた違った感じがして楽しかった。
授業以外で英語を読むのは新鮮だった。
知らない単語も文脈から推測できるようになった。
英語への苦手意識が減った。
本気で英語に取り組めた。
日本の子供と外国の子供とでは読み本がかなり違うということがわかった。
海外の文化に触れることができた。
自分の興味から本を選べるので自主的に学ぶという点において役立った。
高校では学んでいない表現が含まれていて、本当の英語に出会ったような感じがする。

(平成21年7月21日～7月23日アンケート実施)



LAEP: ER Questionnaire

Meijo University

“どちらとも言えない”（55件）との意見

課題目標のためだったので、あまり頑張ってやらなかった。
英語の力が上がったかどうかはわからない。
好きにはなれなかった。映画のほうが良いと思う。
他の勉強が忙しくてなかなか多読の時間を取れなかった。
読解力は身に付いた気がしたけど、文法は力が付いたか自信がない。
どちらとも言えないが、つづける価値はあると思う。

“役に立っていない”（26件）との意見

これで英語力が伸びるとは思わない。
興味の持てる本がなかった。残っている本が難しい本が多くてなかなか読み難い。
記憶に残っていない。
文法などの文章構造を理解しやすい本ではなかった。
ノルマをこなすのに必死で、英語力を挙げることにはつながらなかった。

(平成21年7月21日～7月23日)



名城大学の現状

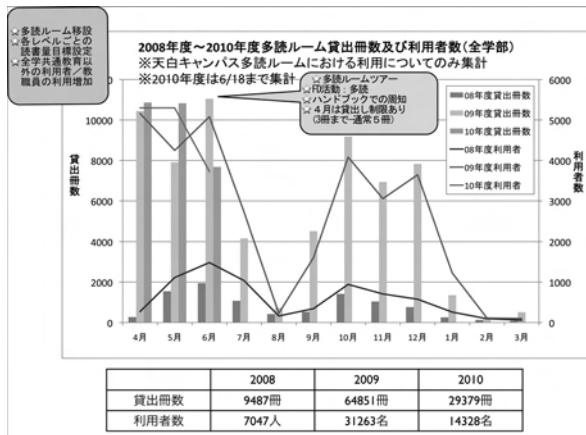
★2010年度
月平均 約10,900冊貸出
月のべ利用者数 5,300名
(天白キャンパスのみ。他キャンパスはシステム未導入のため正確なデータがない。)

★蔵書数23,000冊 (3キャンパス+付属高校)

★天白キャンパス蔵書数 13,000 冊

**★ 登録学生 約2,700名(天白キャンパス学生数
2,150名 1名 5冊/月**

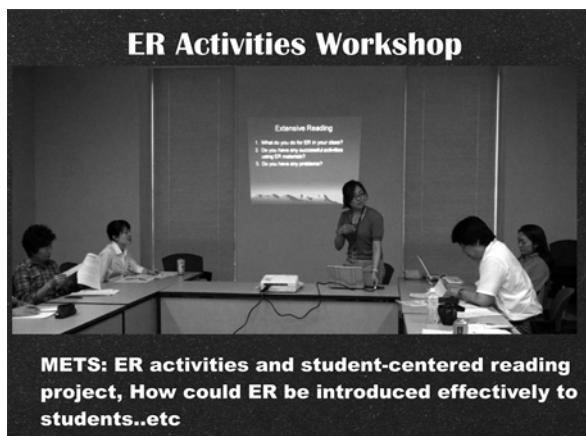
★ 多読専門教員2名 専属スタッフ2名



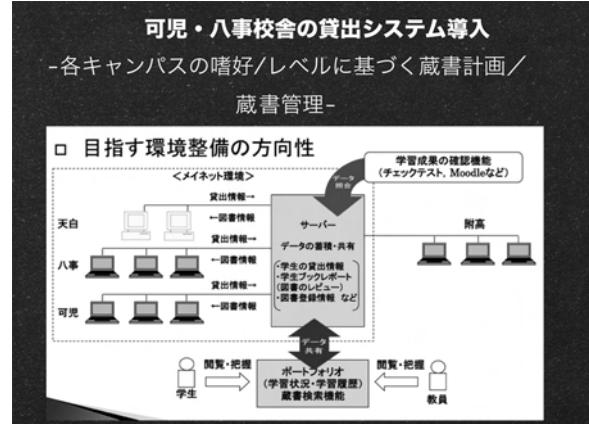
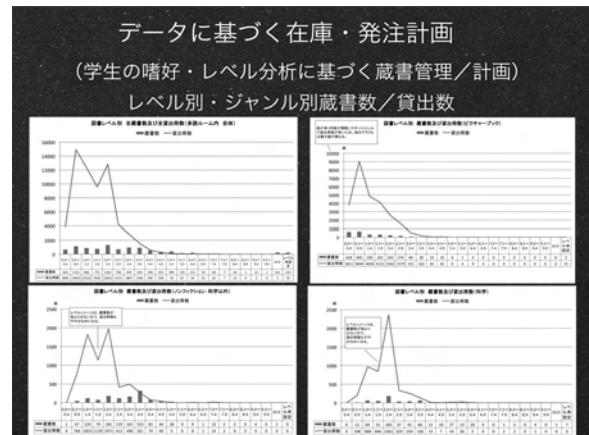
2010年度の取組み

**★ 天白キャンパスの全学共通教育4学部全クラスの多読ルームツアーの実施
4月1-2週目にATR-CALLのツアーと共に実施
1年生のみ全52クラス+他学部英語クラス各10分程度**

**★ 様々なコンテストの開催
(Oral Interpretation Contest, Picture Book Contest, Book Review Contest)**



データ公開・おすすめ図書の紹介



今後の課題

★八事・可児キャンパスのシステム導入

★発注のオンライン化（発注/納品の可視化）

★ 発注から本を棚に出すまでの作業フローの可視化とマニュアル作成

5-2. 多読授業研究会（豊田高専）名城大学多読実践報告

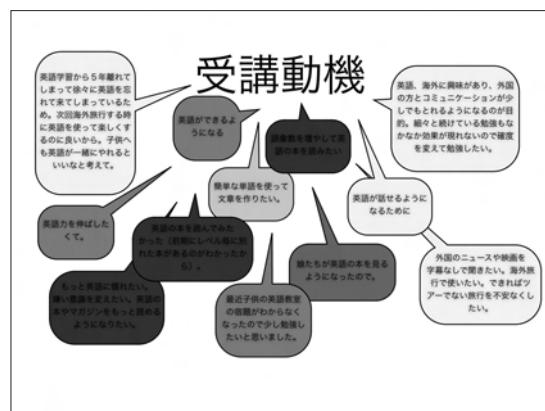
5-2-1. First Step to 多読 成人向け多読講座報告 只木 徹（学長室）



英語力	
・ 英検 3 級	1 名
・ 英検準 2 級	1 名
・ 英検 2 級	3 名
・ TOEIC 380	1 名

刈谷市大学連携市民講座						
講座等名	内 容	開催日時	会 場	対象・定員	参加費	事前申込
First Step to 多読	自分が今やるべきことを人に説くことができるようになります。多読閱讀の技術を身につけられます。	10/11～11/15 毎週土曜日 10:00～11:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 15名	受講料 1,500円	生徒学習課 Tel. 62-1026
大人の講座学	英語基礎知識と基礎力を解説します。特に基礎知識や資源活用問題を中心に学習します。	11/12(土)・26(土) 12/10(土) 10:30～12:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 30名	受講料 1,500円	生徒学習課 Tel. 62-1026
「健康面白」をもうかるために外から必要なこと	健康面白（元気で健康的な生活）の実践力。特に基礎知識や資源活用問題を中心に学習します。（3回講座）	10/15～11/13 毎週土曜日 10:00～11:30	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤一般 30名	受講料 1,500円	生徒学習課 Tel. 62-1026
光つながる生きと宇宙	生き物や宇宙の世界を「光」という観点で見ています。学生でも感動します。	10/9～11/13 毎週土曜日 10:00～11:00	刈谷市総合文化センター	市内在住・在勤中学生以上 20名	受講料 1,500円 教材費 支拂	生徒学習課 Tel. 62-1026

都合により、変更する場合があります。



参加者 13 名					
平均年齢					
女性			47.2歳		
男性			50歳代		
合計					
30代	40代	50代	60代	合計	
女性	2	7	1	2	12
男性	0	0	1	0	1
合計	2	7	2	2	13

1週間で多読に割ける時間	
2時間	1名
2.5時間	1名
2~3時間	1名
3時間	5名
4時間	1名
4~5時間	1名
5時間	2名
7時間	1名

英語学習歴					
<ul style="list-style-type: none"> 英会話教室 3名 ラジオ・テレビ（NHK）講座 7名 学校（中高大）の時 その他（赴任先で家庭教師など） 					

日本語の読書量週あたり	
ほとんど読まない	4名
簡単なエッセイのみ	1名
月に1~2冊	1名
2~3週で1冊	1名
1冊	1名
1日30~60分	1名
7時間	1名
2~3冊	1名

第1回目内容

1	Warm-up Activities (Self-introduction)	30分
2	What is ER?	20分
3	Class Procedures	20分
4	Speed Reading	10分
5	Select Books and Check-out	10分

第3回目内容

1	Warm-up Activities (Let's talk about famous stories)	15分
2	Book Conference in Groups	10分
3	Book Report to the Whole Class (4 volunteers)	15分
4	Return the Books	10分
5	Read Big Books in Groups	10分
6	Speed Reading	15分
7	Questionnaire	5分
	Select Books and Check-out	10分

Homework

- 来週、今週読んだ本の中から一番気に入った本を皆さん前で紹介してもらいます。準備してくださいね。
- 読んだ本すべての本に関して簡単にブックレポートを書いてください。

Let's talk about famous stories!

- Pick 1 card and think about how to explain the story for a minute. (Don't show the card to anybody!)
- Talk for a minute about the story and the main character(s) to the other members of the group.
- Don't use the 'Forbidden Words' when you talk.
- Other members have a guess and write the name of the story or the main character on a given sheet.
- If many of the members have a correct answer, then the speaker gets a prize... go on to the next person.



Forbidden words:

第2回目内容

1	Warm-up Activities (happy incidents)	15分
2	Book Conference in Groups	15分
3	Book Report to the Whole Class (4 volunteers)	15分
4	Return the Books	10分
5	Speed Reading	15分
6	Questionnaire	10分
7	Select Books and Check-out	10分

Choose 1 famous story!



Check your reading speed!

- Try to read the passage a little faster (each passage has 200 words).
- Don't look back at the passage when you are answering the questions.
- When you finish reading the passage, check your time on the screen.
- Write your reading time on the sheet.



第4回目内容

1	How to use 'Kindle' and 'i-Pad' for Extensive Reading	20分
2	Love You Forever	10分
3	Book Conference in Groups	10分
4	Book Report to the Whole Class (4 volunteers)	10分
5	Return the Books	10分
6	Speed Reading	10分
7	Questionnaire (Feedback & Fill-in)	10分
8	Select Books and Check-out	10分

We'll invite you to Extensive reading room

at Meijo University

on Sunday, December 12th.

AM 10:00 - PM 12:00

Merry Christmas

See you in 2 weeks.

A mother held her new baby and very slowly rocked him back and forth, back and forth, back and forth.
And while she held him she sang:

*I'll love you forever.
I'll like you for always.
As long as I'm living
My baby you'll be.'*



多読に興味を持った？

アンケートに答えた9名中
9名が「多読に興味を持った」と答えた。

第5回目内容

1	English Christmas	15分
2	On-line Materials for ER	20分
3	Book Conference in Groups	10分
4	Book Report to the Whole Class (4 volunteers)	10分
5	Return the Books	10分
6	Speed Reading	10分
7	Questionnaire (Feedback & Fill-in)	15分

速読の結果

	正答数 (8問中)	範囲	語彙数 (1分間)	範囲
1回目	5.7	0~8	67.4	44~114
最終回	6.5	3~8	121.9	57~160

YOUR FEEDBACK

- 何をするのもゆっくりな上に先生や皆さんが英語で言っている内容がわからない事が多いので少し焦ります。でも英語の本を読むのは楽しいです。
- 英語で何を言っているのかわからない時があったので、何を言っていたのか日本語でも言ってほしいと思いました。
- 易しい本から“こういう言い回しで言えばいいんだ”という事を学びました。何度もそういう文に出会う事で残っていきますがそれを話せるようになるのが私のdreamです。
- 読んでいて多少知らない単語が会っても気にならずに読みでいます。読み進む間にわからなかつた単語の意味を理解できる事に気づきました。
- 読書そのものがあまり出来ない毎日でしたが、これからもコツコツと多読を続けたい。
- 簡単な英語を沢山読む、このレベルから楽しく感動するにレベルアップさせたいです。英語に触れる環境を強化したいです。
- 多読は速読だと思っていました。違うのですか?と思いました。今は1日10分朝一番に英文になれるよう継続していますが100万語にはほど遠そうです。

多読結果

	冊数平均	範囲	語数平均	範囲
全体	27.6冊	6~52冊	18581語	8626~29306語
1週当たり	5.5冊	1~10冊	3492語	1000~7000語

楽読クラブによる課外活動 多読プラス

多読をベースにし
コミュニケーションをプラスした
活動

主なアクティビティー

1. 多読ルームの本の本を読んでブックレポートを書き、それをグループでオーラルレポートを行う
2. グループ・オーラル・インテリテーション（本を1冊選びラジオ劇のように何人かで役を決めて読み合わせる）
3. 質問ゲーム（グループで1冊本を選び、その本に関する質問を2サイドの分かれて質問しあう）

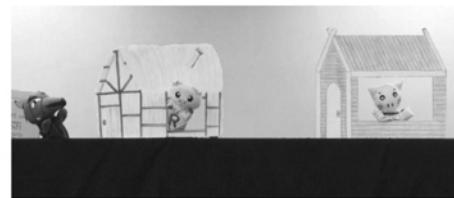
Oral Report on books



Questioning Game



* オープンキャンパスでの
Puppet Show人形劇



* 合宿でのDebateディベイト



* 大学祭での
Paper Story Show 紙芝居

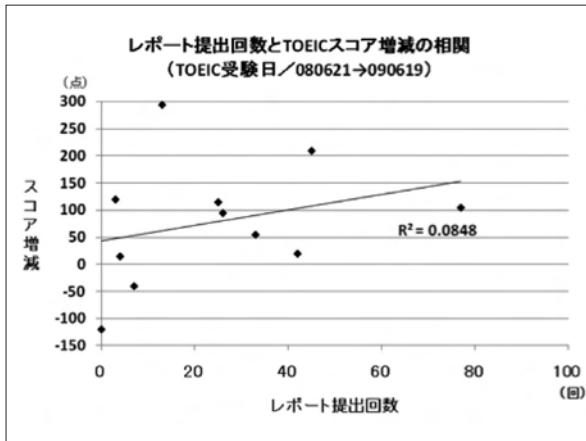
Group Interpretation 朗読劇



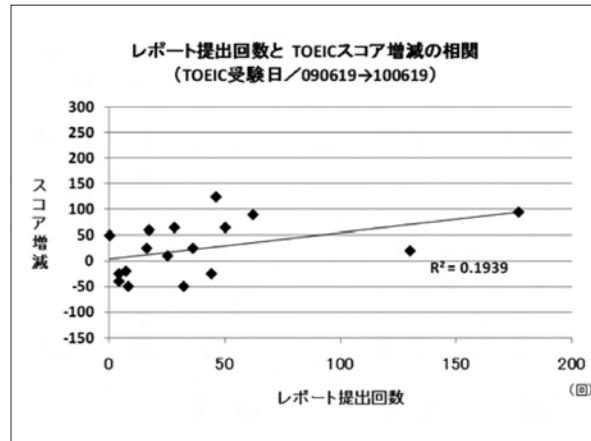
以上のようなコミュニティティブなアクティビティを加えた活動を2年間続けました。そして以下のように、毎年6月に受験したTOEICの各1年間のスコアの伸びと、1.レポート提出回数、2.読書総語数、3.アクティビティの出席回数との相関を見てみました。(’09年から’10年のデータは複数年在籍の学生のデータが含まれ、レポート提出回数、読書総語数、アクティビティの出席回数は’08年からの累計です。テストを受けた期間のみの数値ではなく累積した条件で初めてスコアの変化につながると考えるからです。)

1. レポート提出回数との相関図

’08年－’09年

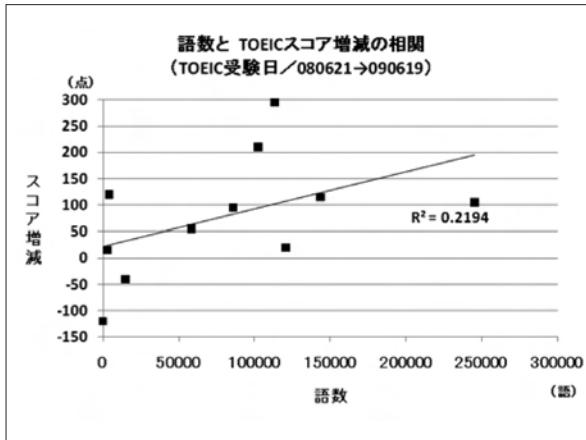


’09年－’10年

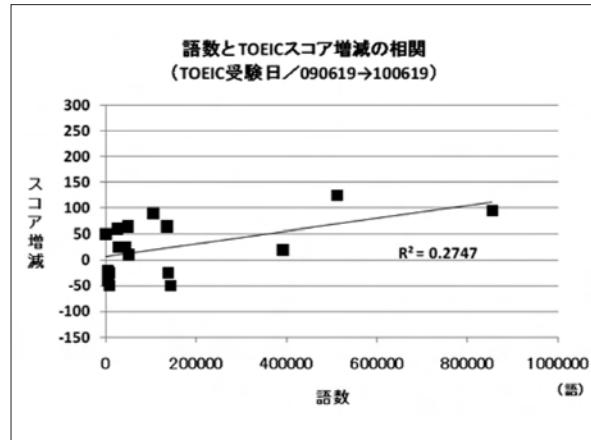


2. 読書総語数との相関図

’08年－’09年

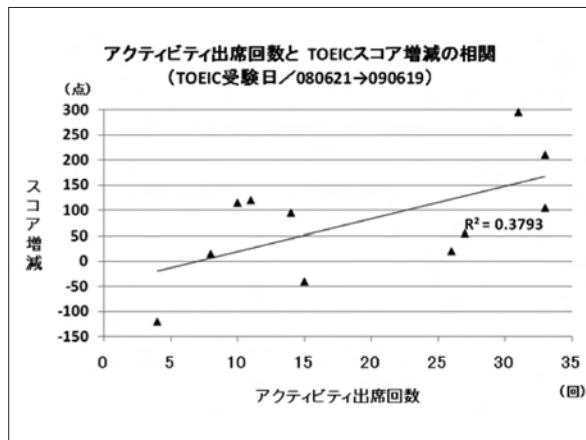


’09年－’10年

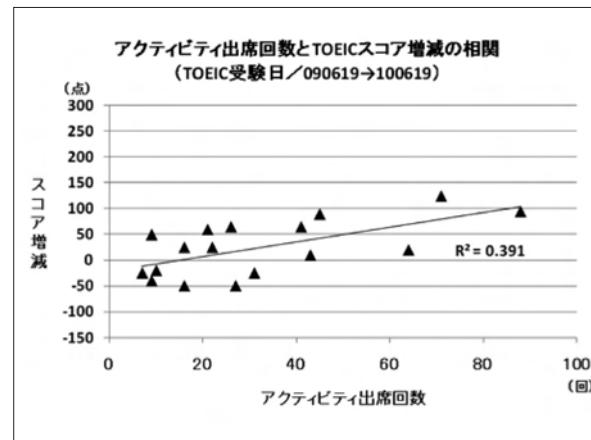


3. アクティビティの出席回数との相関図

’08年－’09年



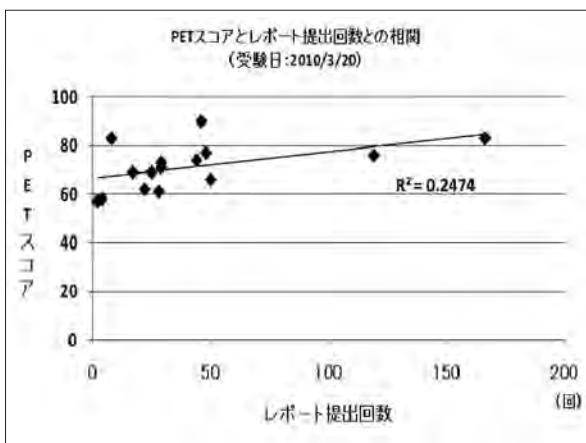
’09年－’10年



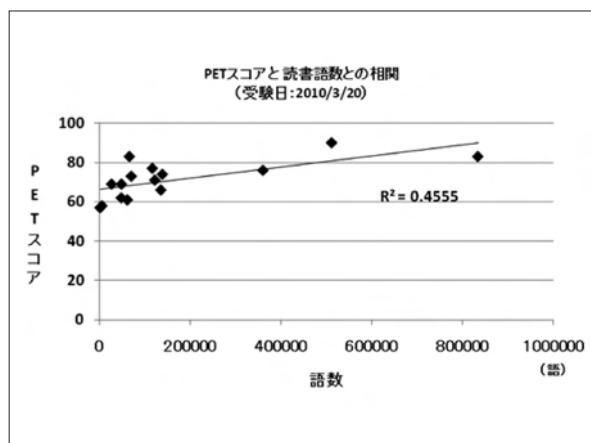
- 2年間ともに同じような結果が見られました。
1. のレポート提出回数とは相関が見られませんでした。
 2. の読書総語数とあまり相関はみられませんでした。
 3. のアクティビティの出席回数との相関が一番強くみられました。

2010年3月に行ったケンブリッジ英語検定のPET (Preliminary English Test) のスコアとも同じように上記の3項目とで相関を見てみました。(PETは'10年3月に1回のみの受験ですので、伸び幅ではありません。)

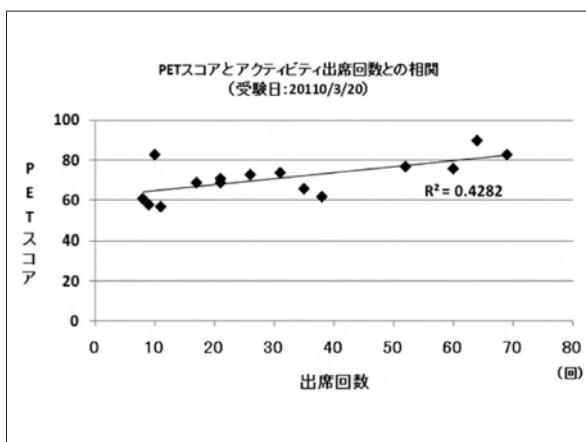
1. レポート提出回数との相関図



2. 総語数との相関図



3. アクティビティの出席回との相関図



1. のレポート提出枚数とは相関がほとんどみられませんでした。
2. の読書総語数に相関が一番強い($R^2 = 0.4555$)ようです。
3. のアクティビティの出席回数ともほとんど同じくらいの相関 ($R^2 = 0.4282$) が見られました。ただしグラフの形状からアクティビティとの相関が大きく、適切であると考えます。

以上のようにTOEICのスコア 1年間の伸び幅、およびケンブリッジ英検のスコアー、共にアクティビティの参加回数との相関が強いことから、単に読書するだけでなく、コミュニケーション活動を加えることにより、短期間でも効率よく、読んだ本からの情報のインプットを行うことが出来、英語力を伸ばすことが可能であると考えます。これは課外活動のみに限らず、授業に於いても同様のことが言えると考えます。

5 – 3. 研究ノート Extensive reading approach satisfies intelligence curiosity

伊藤高司（名城大学附属高等学校教諭）

Status Quo: Problems with English Education in Japan

It has been argued that learning English at school in Japan is not necessarily expected to lead to a good command of English, although it has been widely recognized that this issue is one of the most pressing problems to be solved as relevantly and expeditiously as possible. Unfortunately, it is very far from the case that every student who attempts to learn English succeeds; contrarily it is considered that the figures for successful language learners are depressingly, even shamefully, low.

There have been a broad variety of standpoints from which the way of teaching English at high schools has been criticized. What has relentlessly been condemned stems supposedly from the reality that the communicative skill in English common to ordinary students is incredibly poor despite the great efforts they are putting into their language study. This phenomenon has conceivably been attributed to miscellaneous facets, some of which are worth mentioning briefly hereafter.

Teachers' Claim

Some language teachers insist that the currently existing framework within which students have to learn English compels teachers to employ nothing but the controversial grammar-translation method, whether or not they find it appropriate, thus leaving them no other options. It is still used in many parts of the world today to teach many languages despite the fact that its heyday is now really past. Moreover, school teachers have practically no alternative but to adjust their teaching styles to the standards that the conventional system of entrance examinations demands on students. Consequently, all that teachers can

instruct in the class is de-contextualized knowledge, e.g., morphology and prescriptive grammar.

Hiramatsu (2005, p.129) claims that it appears that particularly experienced Japanese teachers of English accept the notion that both English for exams and communicative English are essential, thus seemingly creating the existence of two Englishes. Further to this reality, it is a great disappointment that there are not a few school teachers who have abandoned the pursuit of conveying the pleasure of language learning to students, which has presumably been regarded as unhelpful in the educational settings generally seen all around Japan. Yet, it is being gradually acknowledged among school teachers that language learning is likely to be the most successful when it is accomplished through a focus on the content, rather than the attention to the language per se, as the objective of analysis. This seems to have been derived from various professions that have indubitably borne witness to a considerable degree of success through the use of subject matter as the springboard for analysis of language data and forms.

Students' Claim

It would be much more convoluted to take into consideration students' perspectives towards English class, but it should also be worth while to reveal what numerous high school students have been complaining of, most of which has been revealed through questionnaires and informal interviews.

Recent research has portrayed the classroom as a complex environment which is substantially influenced by a wide range of attitudinal and contextual factors, one of which is the textbooks used. In point of fact, quite a few students assert themselves that learning materials, in particular authorized textbooks, should be compatible with their needs and interests. Textbooks, which are core materials

for most of the classrooms, however, appear to fail to live up to students' desire.

Language teachers, however, seem to be in a position to enable truly interesting material to be used in class and therefore, language classrooms surely have the flexibility unavailable in other subjects. Every school teacher ought to realize that students are loud in their complaints that they are totally dissatisfied with the textbook they have to use both inside and outside the classroom. It appears that most students suspect that such materials solely lead to removing willingness to learn English and deteriorating motivation, only to result in generating those students who have difficulty in obtaining the enjoyment out of learning a language.

In light of textbooks, it could be paraphrased that language learners are obviously eager to learn English through some authentic materials of which topics are closely related to ordinary daily life, which is conducive for students to experience some authentic input. The significance of this in language learning is bound to be highlighted, delineating the critical role that input plays both in child language acquisition and in naturalistic language learning among adults (Krashen, 1985; Krashen & Terrel, 1983). Following this nature, it inevitably makes sense that experiential approaches to language learning favor the utilization of authentic or naturally occurring learning materials not written or prepared for the mere purpose of language teaching.

Awaiting Solution

It is broadly true that students as well as teachers question the current procedures of English lessons at school, but at the same time, unfortunately, most educators do not seem to have the nerve to tackle this problem in real earnest. Some school teachers appear to fear that it could possibly end in pushing students off the right track of the framework of entrance examinations, should they address

this issue head-on: This contributes significantly to preventing students from seeking the enjoyment of studying English and devastating motivation to learn. What language teachers bring to the teaching process are supposed to be reflected on their own views of language learning and teaching, value system and interpersonal preferences, and their personal investment in their tasks; all of them are phenomenal components of classroom dynamics.

Barnes's (1976) critique of the school curricula is frequently quoted in the literature on language learning. According to his argument, the distinction between school knowledge and action knowledge entails a hypothesis in regard to the value of different kinds of learning. School knowledge, i.e., knowledge that is taught and retained in entirely abstract decontextualized form, merely remains someone else's knowledge and can be forgotten with ease. On the other hand, action knowledge, i.e., knowledge that is accumulated into learners' views of the world, becomes real knowledge of their own, forming the solid framework for their actions and mode of living. This lends itself to hypotheses about tracing and learning, which suggest deep insight into the essence of learning.

It could be summarized that the English language, which has been conceived as simply one of the many subjects being taught at school, has somehow been placed on top priority of all, as if achievement in this subject might guarantee young learners the royal road to a better and brighter future. It has been assumed to be the next best thing for students to be capable of handling English in everyday situations. Nevertheless, it has at long last been acknowledged as misconception among Japanese language teachers that students have no choice but to struggle at their desk for the benefit of acquiring a better academic background. One of the most powerful clues to overcoming the dilemma discussed above should lie in the concept of extensive reading

program.

It has gradually been given wide recognition that what should be delivered by language teachers to learners beyond anything else is that learning a language does not altogether require students to be over-sensitive to and highly analytic about the language structures. On the contrary, language learning can be enjoyable, once they feel that they are unleashed from the devious obsession that learning a language is a means to get an advantage over their competitors. Being unburdened of this unnecessary strain through the introduction of the extensive reading program, it should be more likely that students would be provided incentive to challenge language learning, which is conducive to surmounting hardship in climbing up the developmental learning stages and enhancing motivation to learn a language. When the competition is not taken too seriously, and when scores are at least partly a result of chance, so that anyone might win, positive motivational aspects are far more likely to be enhanced and stress reduced.

Shamin's (1996, p.129) argument has been ceaselessly deep inside me: It could be observed that the majority of school teachers create within their large class a 'smaller' class of students who sit in the front. Such teachers seem to be happy to teach this smaller class of students and arguably tend to ignore students sitting at the back, as long as these students tacitly agree not to disturb the class and at least copy down the answers from the blackboard. In addition, it has been profoundly engraved on my memory what Richard Dawkins (1941-), who is a British ethologist, evolutionary biologist and popular science writer, and holds the Charles Simonyi Chair for the Public Understanding of Science at the University of Oxford, and people like him have been claiming: It is wrong to teach children that they should believe something just because their parents do, and it is wrong to teach them

to believe something when there is no evidence that it is true. Teachers should remember that as with all the other principles of human relations, they should realize that a show of interest in individual learners and their learning must be sincere and it is supposed to pay off not only solely for the teachers showing the interest, but also for learners receiving the attention; the relationship between students and teachers is expected to be a two-way alley benefiting both parties.

The tradition of schooling overall should be examined and overhauled since it has long depended upon a textbook-centered and teacher-centered pedagogy that has neglected to accommodate the various talents of learners (Grisham & Molinelli, 1995, p.2). Extensive reading approach holds the potential for both honoring and nurturing the diverse intelligences which can be manifested within any classroom. It is particularly effective within a tradition of schooling that has long depended upon a textbook-centered and teacher-centered pedagogy that frequently fails to accommodate the various mixtures of invaluable talents and learning differences among a diverse student population (Goodlad, 1984; Cuban, 1984). It is up to teachers whether they can make extensive reading approach satisfy students' intelligence curiosity.

References

Cuban, L. (1984). *How teachers taught: Constancy and change in American classrooms*. New York: Longman.

Goodlad, J. I. (1984). *A place called school: Prospects for the future*. San Francisco: McGraw Hill.

Grisham, D. L. & Molinelli, P. M. (1995). *Cooperative learning*. Westminster: Teacher Created Materials.

Hiramatsu, S. (2005). Contexts and policy reform: A case study of EFL teaching in a high school in Japan. In Tedick, D. J. (Eds.), *Second language teacher education: international perspectives* (pp.113-134). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers.

Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: issues and implications*. Harlow: Longman.

Krashen, S. and Terrel, T. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.

Shamin, F. (1996). In or out of the action zone: location as a feature of interaction in large ESL classes in Pakistan. In Bailey, K. M and Nunan, D. (Eds.), *Voices from the language classroom* (pp.123-144). Cambridge: Cambridge University Press.

6. 2011年度に向けての展望

竹田真紀子（英語嘱託講師）

2011年度は、名城大学の多読教育にとって転換期と言えるだろう。それには2つの理由がある。1つめは、全学共通英語プログラムの方針が変わり多読教育への位置づけが変わったことである。全学的に多読教育を推奨していくのではなく、多読を取り入れるか取り入れないかは個々の教員の裁量になった。今まで学生は、当たり前のように授業を通して多読を体験した。しかし今後は、多読を英語の授業で取り扱わない先生も多くなるため今までのようにはいかない。どのように多読のすばらしさを学生や先生方に伝えて多読を経験する学生を増やしていくか1から再出発のつもりで考えていくと思う。

2つめは、多読予算の縮小である。文部科学省の「私立大学等経常費補助金」の申請が採択され2007年度から2009年度までの3年間補助金をうけて学生のための図書の整備を行ってきた。現在は八事・可児・附属高等学校を含める4キャンパス合わせて約25,000冊の図書がある。この蔵書数については、色々意見が分かれるところだと思うが、補助金が終了した今、これまでどおり図書の整備をしていくことは難しいだろう。しかしながら、多読ルーム立ち上げ当初の計画通り最終的には、地域社会に貢献できる名城大学のランドマーク的な存在の図書館へと成長するにはさらなる図書の整備が必要であることは明らかである。

この報告書の中で報告したとおり（4. データ検証参照）、多読教育は今年度非常に大きな結果を残したといえるであろう。天白キャンパスだけでも、月平均10,000冊以上の貸出がある。天白キャンパスの蔵書数が約14,000冊であることからしてもこの数字がいかに大きいかがわかるだろう。昨年度の全学共通教育に参加している6学部を対象に行った多読に関するアンケート調査においても70%以上もの学生が、「多読は英語学習において役に立った」と答えている。これだけ多くの学生に支持される教育手法はそう多くはないだろう。

多読の効果の一つとして、多読は学生の英語苦手意識を軽減し英語学習に対する認識を変える力を持っていることが報告されている。しかしながら学習への意識は変わっても英語の運用力は短期

間で身につくものではない。それには多量のインプットが必要不可欠でそれにはある程度の時間がかかる。豊田高専の先行研究では、多読（読破語数）とTOEICの明確な相関ができるまでに70万語以上（多読の効果を実感するまでに20万語）読む必要があり4～5年もの期間がかかっている（もちろんTOEIC自体が英語の総合運用能力を測るテストであるかどうかという議論もある）。1～2年で終わってしまう大学の授業だけでは到底たりないのである。附属高等学校との連携強化はこの点で大変重要である。名城大学の多読教育は、大学単体としてではなく本報告書2-3-1の附属高等学校の杉山先生の報告でも述べられているように、名城大学附属高等学校を含んだ名城グループとして学生をサポートする体制を強化することが出来れば、長期的な指導を実現することができ、さらに多くの「英語が使える」学生を育てていける可能性を十分に秘めている。楽読クラブの報告（3. 楽読クラブ参照）はそのような学生を育てることが可能であるという実践例である。

また刈谷市総合福祉センターにおいての多読の成人向け講座の取組み（1-6. 刈谷市総合文化センター名城大学連携講座参照）の経験を通して、多読は、どんな年齢・レベル・嗜好の学習者でも自立学習者として成長させるパワフルなツールになりうるということを確信した。

転換期の今だからこそ、学生が英語を学ぶ楽しみを実感できるさらによりよい多読教育を追求し、それを学生をはじめとして学内外に発信していくことが求められている。それには新たな取組みが必要であろう。また名城大学の学生だけでなく、少しずつでも地域社会に社会貢献できる多読図書館実現に向けて準備する方向を模索したいと思っている。

7. 多読ルーム訪問者一覧

訪問日	曜日	訪問者氏名	訪問者所属
4.30	金	鈴鹿高校 2年生	鈴鹿高校
5.20	木	附属高校生	名城大学附属高校
5.27	木	武豊高校生	武豊高校
6.17	木	高校生4クラス	(入試センターよりの紹介)
7.21	水	伊藤先生	名城大学附属高校
7.21	水	フィリップ先生	名城大学附属高校 国際クラス
7.28	水	米野由紀様	KGIC Japan (KING GEORGE INTERNATIONAL COLLEGE)
7.29	木	ディビッド ホワイト様	McGrowhill 出版
7.29	金	附属高校生(1年生)	名城大学附属高校 国際クラス
12.13	月	堀野様、中野様	ウェストゲート社
3.1	火	桑原陽一教授 良知恵美子准教授 ディレクター 柴田里実先生 ディレクター 梅田 泰先生 ほか2名	常葉学園大学 外国語学部 外国語学習支援センター

名城大学多読プログラム報告書

2011年3月 発行

編集兼

発行者

名城大学大学教育開発センター

名古屋市天白区塩釜口1-501

〒468-8502 電話(052)838-2032

